島原市文化財調査報告書　第12集

小原下（おばるしも）遺跡

２００８

島原市文化財保護協会

島原市文化財調査報告書　第12集

小原下（おばるしも）遺跡

２００８

島原市文化財保護協会

発刊にあたって

本書は株式会社東洋機工製作所の工場建設に伴って実施した小原下遺跡の発掘調査報告書です。

小原下遺跡は昭和４１年から断続的に発掘調査がおこなわれ、縄文時代後期の重要な遺跡として知られていました。

このたび島原中央道路建設工事により、株式会社東洋機工製作所島原工場が移転を余儀なくされたため、同有明工場の隣接地に新工場が計画され、埋蔵文化財の発掘調査について協議をおこない、同社の理解もあり発掘調査を実施いたしました。

今回の調査では３０棟あまりの竪穴住居や８点の遺物が発見され、九州でも稀有の遺跡であったことが判明いたしました。

最後になりましたが、今回の調査にあたり、株式会社東洋機工製作所並びに関係の皆様に心より感謝申し上げ発刊のことばといたします。

平成20年３月

島原市文化財保護協会
会長　宮﨑　金助

例　言

1　本報告は2006（平成18)年から2007(平成19)年にかけて実施した株式会社東洋機工製作所の工場建設に伴う長崎県島原市有明町に所在する小原下遺跡の緊急発掘調査の報告である。

2　調査は株式会社東洋機工製作所の依頼を受けて、島原市文化財保護協会が実施した。

3　調査は2006（平成18)年3月2日から3月20日まで、及び６月12日から６月21日まで範囲確認調査を実施し、その結果をもとに2006（平成18)年9月1日から2007(平成19)年3月2日まで発掘調査をおこなった。確認調査・本調査の整理作業と報告書作成は2008(平成20)年3月まで行った。

4　調査体制は以下のとおりである。

調査主体　　島原市文化財保護協会

会長　　宮崎金助
社会教育課長　松本　正
主査　　土橋啓介
主事　　宇土靖之（調査担当）

㈱埋蔵文化財サポートシステム

長崎支店長　　山口勝也
調査員　　東　貴之（調査担当）
調査員　　大坪芳典（調査担当）

5　現地での遺構の実測は㈱埋蔵文化財サポートシステムに委託した大坪芳典・多々良正人・小石龍信・東貴之・中田裕樹・小池真章子が行い、一部を辻田美和が行った。遺物の実測は宇土靖之・大坪が行った。遺構写真は宇土が、遺物写真は大坪が撮影した。

6　遺構実測の一部と、空中写真撮影は㈱埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

7　本調査の遺物は及び図面等は、大野原遺跡展示館収蔵庫で保管している。

8　本書で用いた方位は全て真北である。

9　本書の編集・執筆は宇土靖之・大坪芳典による。

凡　例

1　小原下遺跡の遺跡略号は「OBS」と表記する。

2　遺構名はローマ字による遺構分類略号と遺構番号との組合せで表記した。なお、詳細は「第Ⅰ章 第3節」に記している。

3　原則として遺構の測定値はm単位を使用した。

4　表示した方位はすべて国土座標第Ⅱ系による座標北(G.N.)である。

5　遺構実測図の縮尺は竪穴住居を1/80で、土坑を1/40で、埋甕を1/20を基準とし、遺構の状況に応じて適宜その縮尺を設定して掲載した。遺物実測図の縮尺は1/3を基準として、大型土器を1/6で、土偶・土版と一部の遺物を1/2で掲載した。

6　土色の表記については、『新版 標準土色帳』（日本色研事業株式会社）を基にした。

なお、調査および本書の刊行にあたっては以下の方々から御協力、御指導を頂いた。記して謝意を表します。
地元各位　株式会社東洋機工製作所　長崎県教育委員会
小石龍信　竹田ゆかり　辻田直人　城野一郎　土橋啓介　中尾篤志　林潤也　東貴之
古門雅高　渡邊康行　（五十音順、敬称略）

本文目次

第Ⅰ章　調査の経過……1
　第１節　過去の調査……1
　第２節　調査に至る経緯……1
　第３節　発掘調査の経過と方法……2

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境……3
　第１節　地理的環境……3
　第２節　歴史的環境……4
　第３節　調査の概要……6

第Ⅲ章　調査の概要と記録……8
　第１節　縄文時代の遺構と遺物……8
　　１　竪穴住居……8
　　２　土坑……44
　　３　溝……54
　　４　不明遺構……56
　　５　土器溜り……57
　　６　包含層……58

第Ⅳ章　総括……63
　　１　小原下遺跡の集落構造……63
　　２　小原下遺跡の竪穴住居の構造と変遷……65
　　３　小原下遺跡出土の土器編年考察とその他の出土遺物について……67
　　４　小原下遺跡出土の土偶編年考察……72

挿図目次

第１図　小原下遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
第２図　小原下遺跡周辺遺跡分布図・・・・・・・・・・・・・・ 5
第３図　調査区位置図(S=1/5,000)・・・・・・・・・・・・・・・ 7
第４図　小原下遺跡基本土層模式図(S=1/20)・・・・・・ 9
第５図　小原下遺跡遺構配置図(S=1/500)・・・・・・・・・ 9
第６図　SB01竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・ 9
第７図　SB01出土遺物実測図（S＝1/3）・・・・・・・・・・ 9
第８図　SB01出土遺物実測図（S＝1/3・1/2）・・・・・10
第９図　SB01出土遺物実測図（S＝1/3）・・・・・・・・・・11
第10図　SB01出土遺物実測図（S＝1/6）・・・・・・・・・・13
第11図　SB01出土遺物実測図（S＝1/6）・・・・・・・・・・14
第12図　SB02竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・15
第13図　SB02出土遺物実測図（S＝1/3）・・・・・・・・・・15
第14図　SB03竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・16
第15図　SB03出土遺物実測図（S＝1/3）・・・・・・・・・・16
第16図　SB05竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・17
第17図　SB06竪穴住居実測図（S＝1/40）・・・・・・・・・17
第18図　SB07竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・19
第19図　SB07出土遺物実測図（S＝1/3）・・・・・・・・・・19
第20図　SB08竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・20
第21図　SB09竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・21
第22図　SB09出土遺物実測図（S＝1/3・1/2）・・・・・21
第23図　SB10竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・22
第24図　SB10出土遺物実測図（S＝1/3・1/2）・・・・・22
第25図　SB11竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・23
第26図　SB11出土遺物実測図（S＝1/3・1/2）・・・・・23
第27図　SB16竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・24
第28図　SB16出土遺物実測図（S＝1/3）・・・・・・・・・・24
第29図　SB17竪穴住居実測図（S＝1/40）・・・・・・・・・25
第30図　SB19竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・26
第31図　SB19出土遺物実測図（S＝1/3）・・・・・・・・・・26
第32図　SB20竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・26
第33図　SB22竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・26
第34図　SB22出土遺物実測図（S＝1/3）・・・・・・・・・・26
第35図　SB24竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・28
第36図　SB25竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・28
第37図　SB25出土遺物実測図（S＝1/3）・・・・・・・・・・28
第38図　SB26竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・28
第39図　SB26出土遺物実測図（S＝1/3）・・・・・・・・・・28
第40図　SB27竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・29
第41図　SB27出土遺物実測図（S＝1/3）・・・・・・・・・・29
第42図　SB28竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・30
第43図　SB28出土遺物実測図（S＝1/3・1/6）・・・・・31
第44図　SB29竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・32
第45図　SB31竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・32
第46図　SB31出土遺物実測図（S＝1/3）・・・・・・・・・・32
第47図　SB32竪穴住居実測図（S＝1/40）・・・・・・・・・33
第48図　SB32出土遺物実測図（S＝1/3）・・・・・・・・・・33
第49図　SB41竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・33
第50図　SB42竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・34
第51図　SB43竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・34
第52図　SB43出土遺物実測図（S＝1/3・1/2）・・・・・34
第53図　SB44竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・35
第54図　SB44出土遺物実測図（S＝1/3）・・・・・・・・・・36
第55図　SB46竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・36
第56図　SB46出土遺物実測図（S＝1/3）・・・・・・・・・・36
第57図　SB47竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・37
第58図　SB47出土遺物実測図（S＝1/3）・・・・・・・・・・37
第59図　SB48竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・38
第60図　SB48出土遺物実測図（S＝1/3）・・・・・・・・・・38
第61図　SB49竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・39
第62図　SB49出土遺物実測図（S＝1/3）・・・・・・・・・・39
第63図　SB50竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・39
第64図　SB53竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・40
第65図　SB57竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・40
第66図　SB70竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・41
第67図　SB71竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・42
第68図　SB76竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・42
第69図　SB77竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・43
第70図　SB77出土遺物実測図（S＝1/3）・・・・・・・・・・43
第71図　SB78竪穴住居実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・43
第72図　SK12土坑実測図（S＝1/40）・・・・・・・・・・・・・44
第73図　SK13土坑実測図（S＝1/40）・・・・・・・・・・・・・44
第74図　SK13出土遺物実測図（S＝1/3）・・・・・・・・・・44
第75図　SK14土坑実測図（S＝1/40）・・・・・・・・・・・・・45
第76図　SK15土坑実測図（S＝1/40）・・・・・・・・・・・・・45
第77図　SK21土坑実測図（S＝1/40）・・・・・・・・・・・・・45
第78図　SK21出土遺物実測図（S＝1/3）・・・・・・・・・・45
第79図　SK30土坑実測図（S＝1/40）・・・・・・・・・・・・・46
第80図　SK33土坑実測図（S＝1/40）・・・・・・・・・・・・・46
第81図　SK35土坑実測図（S＝1/40）・・・・・・・・・・・・・46
第82図　SK35出土遺物実測図（S＝1/3）・・・・・・・・・・46
第83図　SK36土坑実測図（S＝1/40）・・・・・・・・・・・・・47
第84図　SK37土坑実測図（S＝1/20）・・・・・・・・・・・・・47
第85図　SK38土坑実測図（S＝1/40）・・・・・・・・・・・・・48
第86図　SK39土坑実測図（S＝1/40）・・・・・・・・・・・・・48
第87図　SK45土坑実測図（S＝1/20）・・・・・・・・・・・・・49
第88図　SK45出土遺物実測図（S＝1/3）・・・・・・・・・・49
第89図　SK58土坑実測図（S＝1/40）・・・・・・・・・・・・・50
第90図　SK58出土遺物実測図（S＝1/3）・・・・・・・・・・50
第91図　SK60土坑実測図（S＝1/40）・・・・・・・・・・・・・51
第92図　SK61土坑実測図（S＝1/40）・・・・・・・・・・・・・51
第93図　SK62土坑実測図（S＝1/40）・・・・・・・・・・・・・51
第94図　SK63土坑実測図（S＝1/40）・・・・・・・・・・・・・51

第 95図　SK65土坑実測図（S＝1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
第 96図　SK66土坑実測図（S＝1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
第 97図　SK74土坑実測図（S＝1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
第 98図　SK79土坑実測図（S＝1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
第 99図　SK80土坑実測図（S＝1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
第100図　SK80出土遺物実測図（S＝1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
第101図　SK81土坑実測図（S＝1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
第102図　SK81出土遺物実測図（S＝1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
第103図　SD01土坑実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
第104図　SX40不明遺構実測図（S＝1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
第105図　SX56不明遺構実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
第106図　SX59不明遺構実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
第107図　SX72不明遺構実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56
第108図　SX73不明遺構実測図（S＝1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56
第109図　SX75不明遺構実測図（S＝1/80）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
第110図　SK75出土遺物実測図（S＝1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
第111図　包含層出土遺物実測図（S＝1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
第112図　包含層出土遺物実測図（S＝1/6）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
第113図　包含層出土遺物実測図（S＝1/3・1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
第114図　包含層出土遺物実測図（S＝1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62
第115図　小原下遺跡遺構配置図(S=1/1,000)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63
第116図　九州北半における縄文後期後半の拠点集落・・・・・・・・・・・・・・・・・・64
第117図　小原下遺跡主要遺構変遷図(S=1/1,000)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・65
第118図　小原下遺跡における縄文時代後期後半の土器編年表(S=1/6)・69
第119図　小原下遺跡における土偶編年表(S=1/2)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73

写真図版目次

写真図版０　小原下遺跡出土の土偶と土版（前面）
写真図版１　小原下遺跡全景と南側を望む
　　小原下遺跡全景と南東の有明海を望む
写真図版２　小原下遺跡全景（図上は北東）
　　小原下遺跡出土の土偶と土版（背面）
写真図版３　01. 調査前　02. グリッド設定
　　03. 包含層遺物　04. 包含層遺物
　　05. 包含層遺物　06. 包含層遺物
　　07. 包含層遺物　08. 包含層遺物
写真図版４　09. 包含層遺物　10. 包含層遺物
　　11. 埋甕(SX01内)　12. 埋甕(SX01内)
　　13. SK37埋甕　14. SK37埋甕
　　15. SK45埋甕　16. SK45埋甕完掘
写真図版５　17. SK47埋甕断面　18. SK79埋甕

	19. SK81埋甕	20. 遺構検出
	21. 遺構検出	22. 遺構検出
	23. SB01掘削	24. SB01掘削
写真図版６	25. SB01掘削	26. SB01掘削
	27. SB01掘削	28. SB01完掘
	29. SB01遺物	30. SB05
	31. SB06	32. SB07完掘
写真図版７	33. SB07遺物	34. SB07遺物
	35. SB07遺物	36. SB07遺物
	37. SB08	38. SB09
	39. SB10・11	40. SB10・11
写真図版８	41. SB16完掘	42. SB25遺物
	43. SB28掘削	44. SB28掘削
	45. SB28完掘	46. SB28遺物
	47. SB28遺物	48. SB28遺物
写真図版９	49. SB28遺物	50. SB31遺物
	51. SB32遺物	52. SB32遺物
	53. SB43遺物	54. SB43遺物
	55. SB46	56. SB46集石
写真図版10	57. SB46	58. SB50検出
	59. SB50完掘	60. SB50遺物
	61. SD01検出	62. SD01完掘
	63. SK12	64. SK14
写真図版11	65. SK21	66. SK21遺物
	67. SK30	68. SK35
	69. SK58	70. SK63
	71. SX40検出	72. SX40断面
写真図版12	73. SX75	74. SX75遺物
	75. SX75遺物	76. SB01から調査区南を望む
	77. 土器溜り遠景	78. 土器溜り
	79. 土器溜り	
写真図版13	出土遺物	
写真図版14	出土遺物	

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　過去の調査

遺跡周辺は畑地であり大正時代から昭和40年代頃まで、牛蒡栽培が盛んだった。そのため、牛蒡栽培により70cmから80cmほどの堀削されることにより、地中の遺物が地表に露頭していた。発見の動機は永松實氏の熱心な遺物採集により、縄文時代後期の遺物や土偶が発見されており、昭和41年、有明町教育委員会（現島原市教育委員会）から有明町大三東小原下木下2843番地‐1に所在する縄文時代後期の西平式土器から御領式土器の包蔵地として発見届が提出された。

本調査を除く過去の調査は第1次と第2次の2回の調査が実施されている。

第1次調査は昭和41年12月25日から昭和42年1月5日に島原高等学校国見分校（現長崎県立国見高校）と有明町教育委員会により実施され、昭和42年5月に長崎県立国見高等学校から報告書が刊行された。この調査により製鉄遺構の存在を提起された。

第2次調査は昭和45年、遺物包含予察地一帯の宅地化・牛蒡栽培地の拡大という事態に対応し、当時の県文化財課と有明町とで協議し、県教育委員会と有明町と共催により同年11月5日から11月18日にかけて調査を実施した。調査地は第1次調査によって製鉄遺構の指摘がされ、再調査まで埋戻されていた地点である。本調査と同様に縄文時代後期後半の遺物が多く出土している。また、炉状遺構の問題については晩期の所産であるものの、一方で、当遺構の直上まで牛蒡栽培の際の鉄滓が混入していた。

第２節　調査に至る経緯

国土交通省九州地方整備局雲仙復興工事事務所による島原中央道路建設で株式会社東洋機工製作所島原工場が道路用地となるため、株式会社東洋機工製作所有明工場の南側隣接地が代替地とされ、工場建設が予定された。

この事を受け、工場予定地を対象地として平成18年3月2日から3月20日までと平成18年6月12日から7月12日までの2回の範囲確認調査を実施した。試掘坑からは遺物が確認されて、その内、2箇所の試掘坑からは遺構が確認された。

株式会社東洋機工製作所と島原市教育委員会と協議を重ね、遺構を掘削工事しない箇所については保存することとし、やむを得ず工事により掘削する箇所については本格的な調査を実施することで合意した。

本調査は島原市文化財保護協会により、平成18年9月1日から平成19年3月2日まで実施した。また、確認調査・本調査の整理作業と報告書作成は2008(平成20)年3月まで行った。

第３節　発掘調査の経過と方法

遺跡名は小原下遺跡で、その遺跡の略号を「OBS」として台帳及び遺物整理の段階で用いた。調査地を包括した形で、調査グリッドの設定を行った。グリッドは国土座標第Ⅱ系を基準にX＝－17,676m、Y＝78960mの交点を始点とし、8m方眼を最小単位として設定した。南北行はアルファベットで表示し、始点から南へAからLの12行、東西列は算用数字2桁で表示し、始点から東へ1から11までの11列を使用した。各々のグリッドの名称は「行名称‐列名称」で表記し、発掘調査における遺構配置図や遺構図の作成、所属不明な遺構検出面で出土した遺物や表面採集等の取り上げ、報告文中における遺構説明など、全て今回設定したグリッドに基づいて行った。

遺構名の表示については次の表示を採用した。遺構番号は先頭に遺構分類番号を附記して、その後に続けて2桁の通し番号（溝のみ除く）を付して最終的な遺構名とした。この遺構名に使用する遺構分類略号には広域的かつ厳密に統一されたものがないため、ここで使用したものは島原市教育委員会及び市文化財保護協会による独自分類である。この独自遺構分類略号にはSA：柵列、塀、SB：掘立柱建物・竪穴住居、礎石建物、SC：石蓋墓、周溝墓、SD：溝、溝状遺構、SE：井戸、SK：土坑・埋甕、SR：周溝状遺構、ST：古墳、墳丘墓、SW：石垣、石積、SX：その他、不明遺構、P：小穴、柱穴がある。以上の要件で表記された遺構名は、例えば「SB01」、「SK02」のようになる。

調査はバックホウを用いて表土剥ぎを行った。その後、グリッドを設定して人力により遺構検出を行った。検出面までの包含層の遺物を取り上げた後に、1面目の中世の遺構面が確認されてピットを検出した。掘削後、この面を実測員によって縮尺1/20全体遺構の実測を行った。

1面目の記録保存後、2面目まで、人力で包含層を掘削した。出土した遺物はグリッドごとに取り上げた。その後、縄文時代後期の遺構面を人力で検出して、掘削の過程と掘削後に個別遺構図と遺物出土状況図(1/10、1/20)、堆積土層図(1/20)の作成を行った。遺構写真の撮影も随時行った。2面目の調査区全体写真は6×6cm判白黒フィルム、6×6cm判カラーリバーサルフィルムを用いて調査区の遺構検出後と遺構完掘後にラジコンヘリによる空中写真撮影を行った。

整理調査は島原市文化財保護協会の整理場で実施した。遺物の洗浄後に注記作業を行い、遺物実測を行った。最後に遺物を収蔵用のプラスティックコンテナに収納した。

出土資料及び全ての記録資料は平成20年度現在、島原市大野原遺跡展示館収蔵庫で保管・管理している。

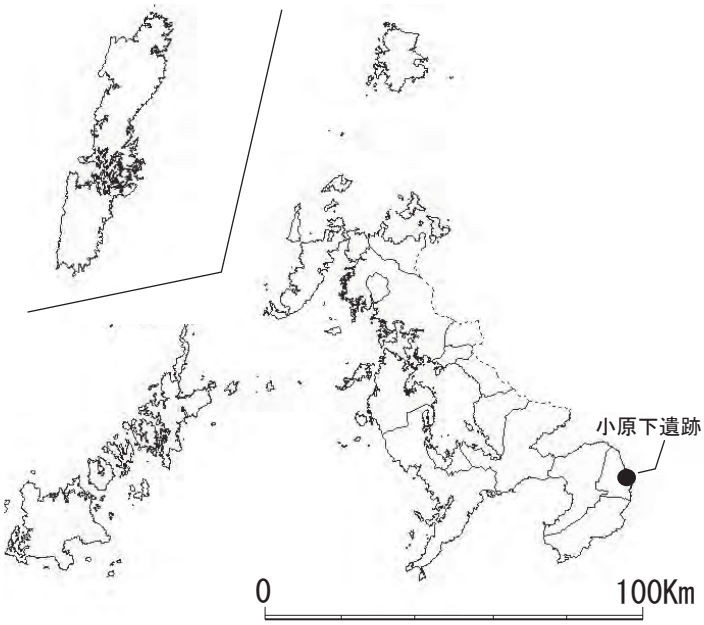
第Ⅱ章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境（第1図）

島原市の位置する島原半島は長崎県南東部の有明海と橘湾に胃袋状に突き出した半島である。半島の規模は東西24km、南北32km、面積463km^{2}で、中央部は雲仙岳を中心とした国立公園であり、海岸線一帯は島原半島県立自然公園となっている。半島は地質・地形的には北部の雲仙火山地域と南部の南島原火山地域に大別できる。半島の4分の3を占める雲仙火山群の溶岩円頂丘を中央として北部・東部・南東部に火山性扇状地が発達して、裾野は有明海に延びる。南部の南東原火山地域は第3記層を安山岩や玄武岩を主体とする溶岩が覆う火山性台地であり、起伏に富む地形をなしている。海岸線の総延長は130kmであり、半島の主要道路・鉄道（島原鉄道）は主に海岸線に沿って走るものと、主要道路の複線として広域農道のグリーンロードが走る。また、島原半島の1市16町あった行政区分は平成の市町村合併により島原市・雲仙市・南島原市の3市に合併された。

島原市は島原半島の北東部に位置し、北に雲仙市、南に南島原市と接する。有明海を隔てて東には熊本県が位置する。地勢は先述した通り、火山性の扇状地であり、遺跡が所在する島原市有明町は雲仙火山群を構成する舞岳（702m）を頂点として、東の有明海に向けて扇状地に広がる。また、舞岳を水源とする数条の河川は湯江川を除いては小河川であり、水田はこれらの河川の流域に沿って分布するが流域面積は貧弱で水田面積は狭小である。台地上の耕作地についても水利が悪く地下水を汲み上げて対処しても、畑作を営むのが限界である。しかし、クロボクと呼ばれる土壌は畑作に適しており県内有数の畑作地帯となっている。漁業では地元で有明ガネと呼ばれるカニ漁と、遠浅の海岸を利用した海苔養殖が盛んである。

小原下遺跡は島原市内の東に位置し、有明海の海岸の洪積世段丘上の島原市有明町大三東乙842・846番地に所在する。標高は約17～20mである。遺跡周辺は集落や工場、農場などが密集する。遺跡の北側に位置する段丘上には当遺跡と同時代の縄文時代後期の大野原遺跡が所在する。当遺跡は東に有明海が面しており、海を挟んで対岸の熊本県には縄文時代後期後半の標式遺跡である太郎迫遺跡・三万田遺跡・御領遺跡や上南部遺跡がある。これらの熊本県の大遺跡と当遺跡は海を隔てて直線距離にして約30kmである。



第１図　小原下遺跡位置図

【注釈】

この地理的環境については 宇土靖之・竹中哲朗編 2001 『一野遺跡Ⅱ』を基にした。

第２節　歴史的環境(第2図)

遺跡周辺の島原市有明町の歴史的環境は旧石器時代の遺跡は確認されていない。縄文時代については一野遺跡で縄文時代早期の一野式土器や弘法原土器(東九州の稲荷式土器に併行する型式)の円筒形土器が出土した。また、中期～晩期の遺物が僅かに出土している。その他、大野原遺跡で平成9・10年の発掘調査において縄文時代後期後半の多量の遺物や粘土貯蔵穴や焼土土坑が出土している。その他、縄文時代後期の遺跡としては当報告の小原下遺跡や中田遺跡がある。

弥生時代の遺跡については一野遺跡・大野原遺跡などで石棺・甕棺等が発見されている。また、妙法塚遺跡では壷棺や須玖Ⅰ式土器が出土している。

古墳時代については墳丘が僅かに残存し、玄室と前室の一部が残存する平山古墳があ

第２図　小原下遺跡周辺遺跡分布図

る。その他、一野遺跡で8基の古墳を検出して調査を行った。妙法塚古墳では石棺から5世紀前半代と考えられる鉄鏃が2個出土した。

古代については当遺跡より南東に近接する松尾遺跡があり、8世紀代の須恵器や土師器・甑・カマドの一部が出土した。大野原七反畑遺跡では8世紀前後の須恵器や土師器等に伴い柱穴群や井戸状の廃棄土坑が確認されている。大野原遺跡は縄文時代・弥生時代中期・古代の複合遺跡で、奈良時代の遺物が出土している。

中世については有明町の島原市立有明中学校や周辺宅地に位置する大野城跡がある。大野城跡は16世紀後半、龍造寺氏と有馬氏との沖田畷の戦いにおいて、高来の直轄地の最終端であり龍造寺氏の兵站基地であった。龍造寺軍敗退後、大野城の城主であった大野山城守はこの城の軍需物資を有馬晴信に提供することにより助命された。その他、大野城跡の南東には内空閑越中守(有馬家臣)の東空閑城があり、当遺跡の周辺には中世・戦国時代の城郭が点在する。

【注釈】

有明町　1987　『有明町史』上巻

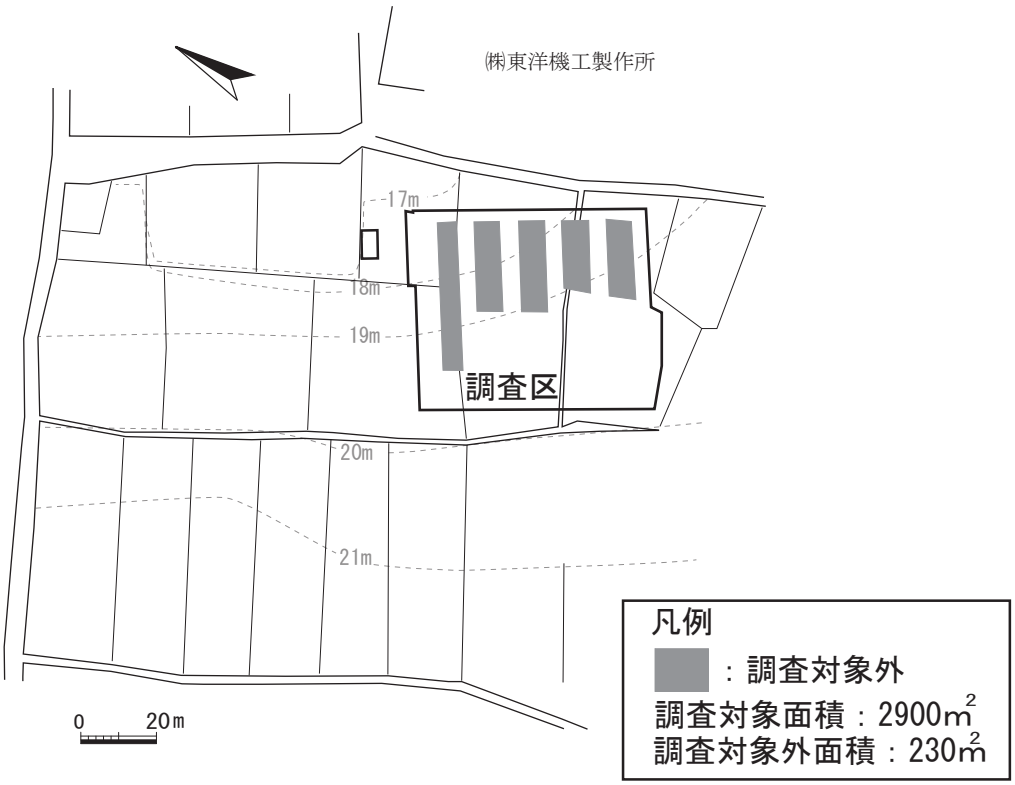
諫見富士郎　1993　『概要報告書　大野原七反畑遺跡』　有明町教育委員会

宇土靖之・竹中哲朗　2001　『一野遺跡Ⅱ』　有明町教育委員会

浦田和彦編　1992　『一野遺跡』　有明町教育委員会

松田毅一・川崎桃太訳　1979　『フロイス　日本史10』西九州編Ⅱ　中央公論社

長崎県教育委員会　1997　『原始古代の長崎』資料編Ⅱ



第３図　調査区位置図(S=1/5,000)

第３節　調査の概要（第3～5図）

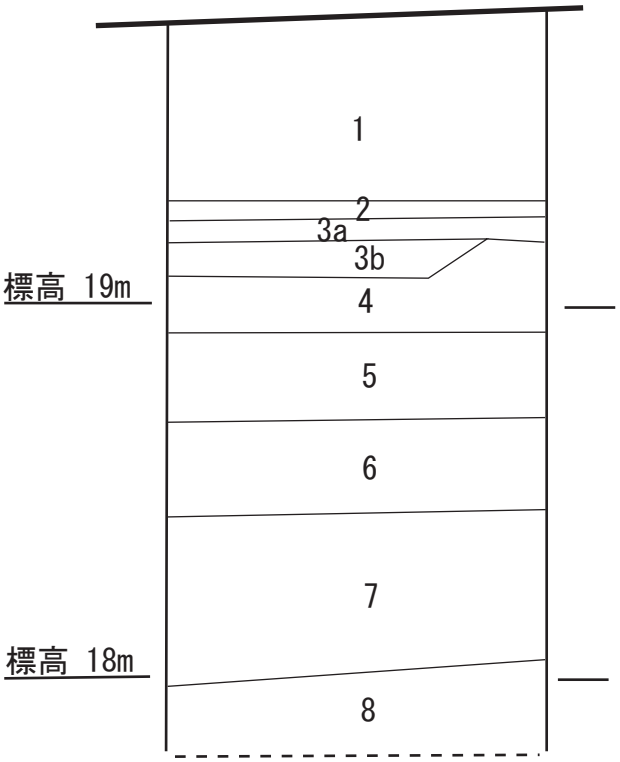
本調査では主に縄文時代後期中葉から後半にかけての時期の遺跡で、出土した遺物はコンテナ約300箱であった。その他、中世や弥生時代中期、縄文時代晩期から弥生時代早期の遺物も出土した。

調査で確認できた縄文時代の遺構は竪穴住居が39軒、土坑が24基、溝が3条、巨大な廃棄土坑と考えられる土器溜りが1箇所、その他の性格不明遺構が6基であった。

縄文時代後期の遺構検出面より上層の縄文時代包含層からは縄文時代中葉から後期後半の遺物を主に含み、縄文時代晩期から弥生時代早期の遺物、弥生時代中期の遺物が僅かに確認できた。

縄文時代後期後半の遺構及び包含層からは、深鉢・鉢・浅鉢以外に土偶・高坏・注口土器などの特殊遺物が多く出土した。

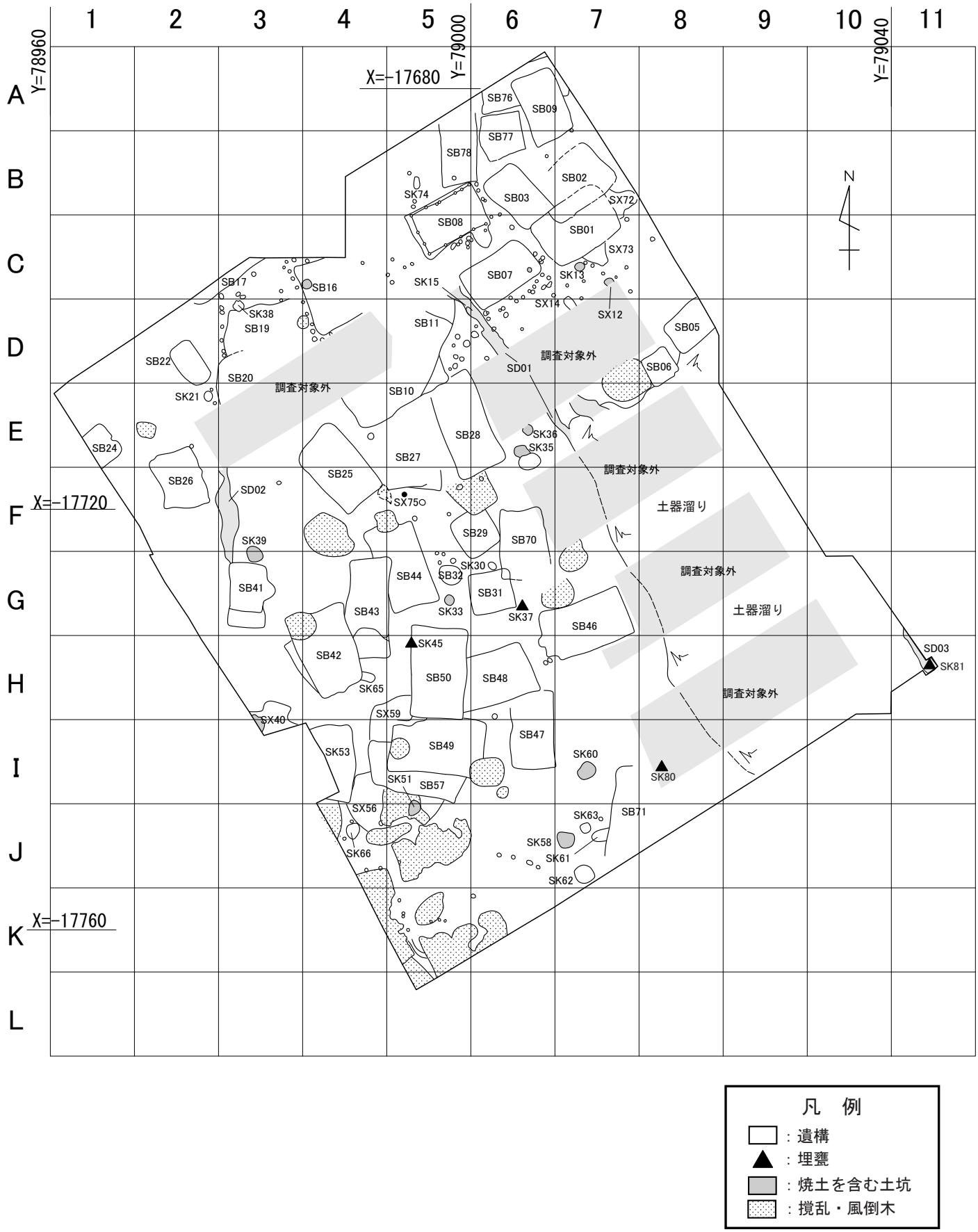
また、その上の層からは中世の包含層が確認できた。この地は、戦国大名の龍造寺隆信と政家親子の勢力範囲内で、肥前南端の地である。近辺には大野城があり、今回、出土した遺物も何らかの関係がある可能性もある。



基本土層注記

１層：淡褐色土・淡黒褐色土
　　表土・耕作土
２層：黒色土・淡黒色土
　　遺物包含層（縄文時代以降）
3a層：暗褐色土・明褐色土
　　縄文時代後・晩期包含層
3b層：茶色土・明赤褐色
　　縄文時代遺構埋土
４層：明黄褐色土・暗褐色土
　　僅かに遺物を含む　混入か
５層：明黄褐色土・暗褐色土
　　鉄分層
６層：黄白色土
　　ブロック状の塊　カシノミ層
７層：淡黒色土
　　カシノミ層
８層：赤褐色粘質土

第４図　小原下遺跡基本土層模式図(S=1/20)



凡　例

□：遺構

▲：埋甕

■：焼土を含む土坑

▨：撹乱・風倒木

第５図　小原下遺跡遺構配置図(S=1/500)

第Ⅲ章　遺構と遺物

第１節　縄文時代の遺構と遺物

本調査で確認できた縄文時代の遺構は竪穴住居が39軒、土坑が24基、溝が3条、巨大な廃棄土坑と考えられる土器溜りが1箇所、その他、性格不明遺構が6基であった。

竪穴住居は39軒の内、住居と特定できるものが19軒で、住居と特定にまで至らず可能性に留めるものが20軒である。

土坑は24基の内、焼土を含む土坑が11基で、焼土を含まない土坑が9基で、竪穴住居外から検出した埋甕を埋設する土坑が4基である。

溝は3条で、SD01は土器黙りに繋がっていた。

その他、性格不明土器は6基で、SD01関連遺構、石器集中遺構、大量に焼土を含む遺構などを検出した。

１　竪穴住居

SB01竪穴住居（第6図）

B･C－6･7グリッドに位置し、長方形を呈する竪穴住居である。検出面の標高は約17.5mで、規模は長径7.98m、短径5.38m、深さ0.22mである。この遺構の北東にSX72が付帯し、南東にSX73が隣接する。この付帯する遺構は竪穴住居への出入口施設の可能性がある。遺構の切り合い関係はSB02･03を切って検出した。

柱穴は多く確認できたが、いずれの柱穴が主柱穴になるかは判断つかなった。遺構の東側は段状（テラス）になっており、遺構東側隅には壁溝らしい溝が僅かに確認できた。遺構の南隅から焼石が確認でき、その周辺には炭化物が集中していた。地床炉の可能性がある。また遺構の東隅や北東より甕が立って確認できた。

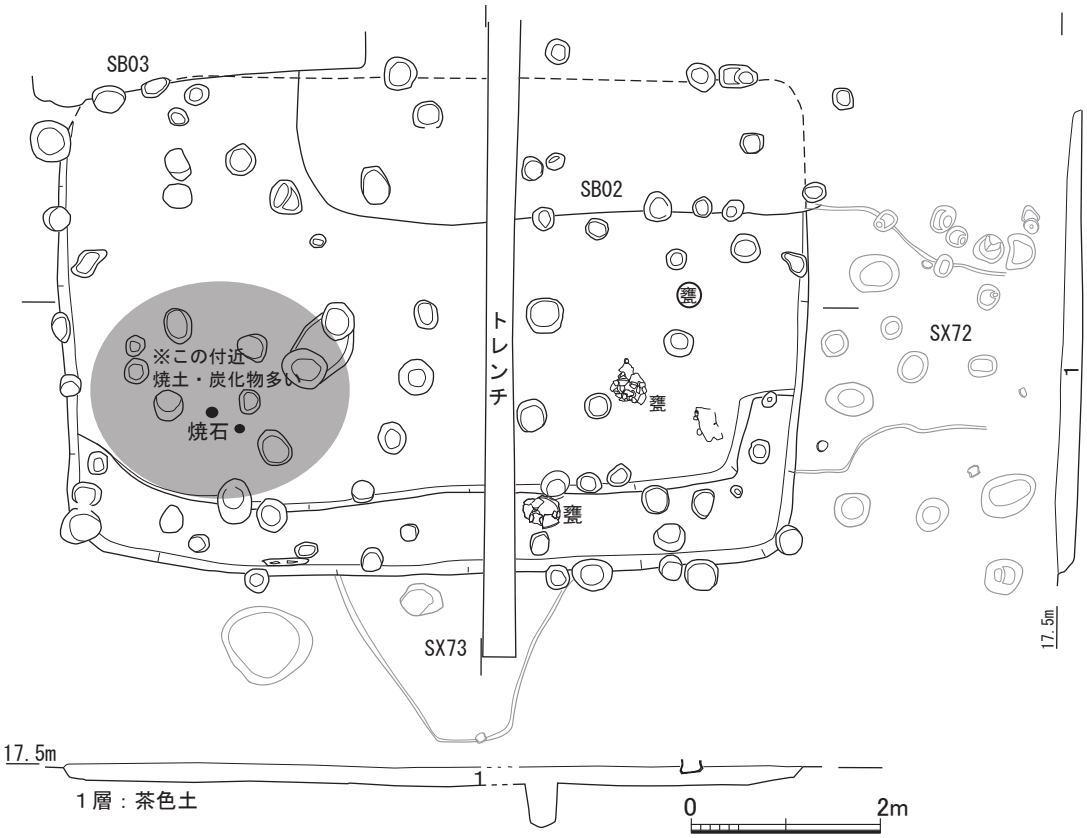
遺構からは太郎迫式土器から鳥井原式土器が出土した。大量の鉢や浅鉢以外に特殊遺物としては土偶・注口土器・Ｘ字形石器・土製円盤等が出土している。その他、軽石・磨石・叩石が大量に出土している。

SB01出土遺物（第7～11図）

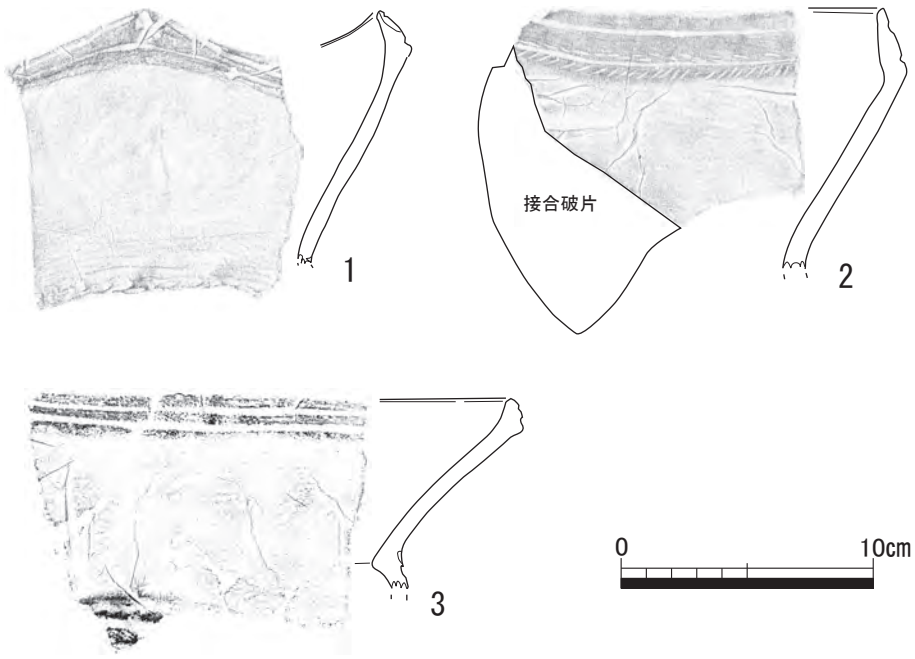
1は太郎迫式土器の鉢で、波状口縁の波頂部にハの字状の文様を施し、胴部の外面に刺突列点文を巡らせる。内面に赤色顔料が付着する。2は三万田式土器の鉢で、口縁部に沈線文と羽状文を施す。外面に煤が付着する。3は太郎迫式土器の鉢で、口縁部と胴部の外面に沈線文と擬似縄文を施す。内外面に赤色顔料が付着する。4は三万田式土器の浅鉢で、口縁部は2条の沈線が巡るのみである。

5は分銅形土偶で、腹・尻部である。縁辺部に沈線文を施すことから三万田式土器である。表面に凹点でヘソを表現し、裏面に沈線で尻を表現している。

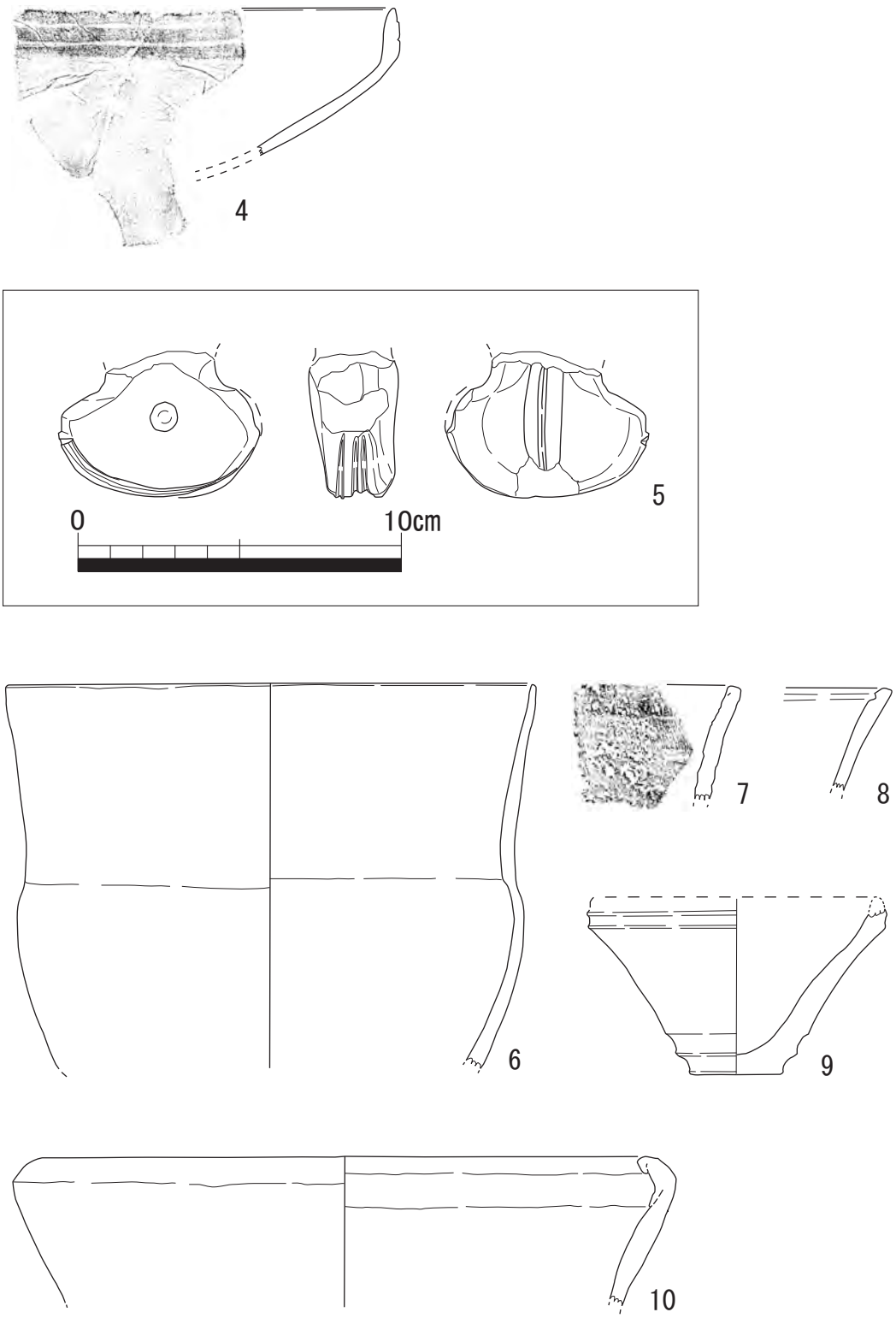
6は三万田式土器の鉢か深鉢で、内外面はナデ調整による無文土器である。外面に煤が付着する。7は縄文時代後期後半の深鉢で、内外面にナデ調整を行い、空隙が見られる。8は三万田式土器の鉢で、口縁部の内面に沈線文が巡る。9は鳥井原式土器の鉢で、口縁部と底部に凹線文どうしが接し、視覚的に稜を見せる稜線文を施す。内面に黒斑が見られる。10は鳥井原式土器の鉢か深鉢で内外面はナデ調整による無文土器である。口縁部は内湾する。11は浅く凹線が見られることから鳥井原式土器の可能性がある高坏の脚部であ



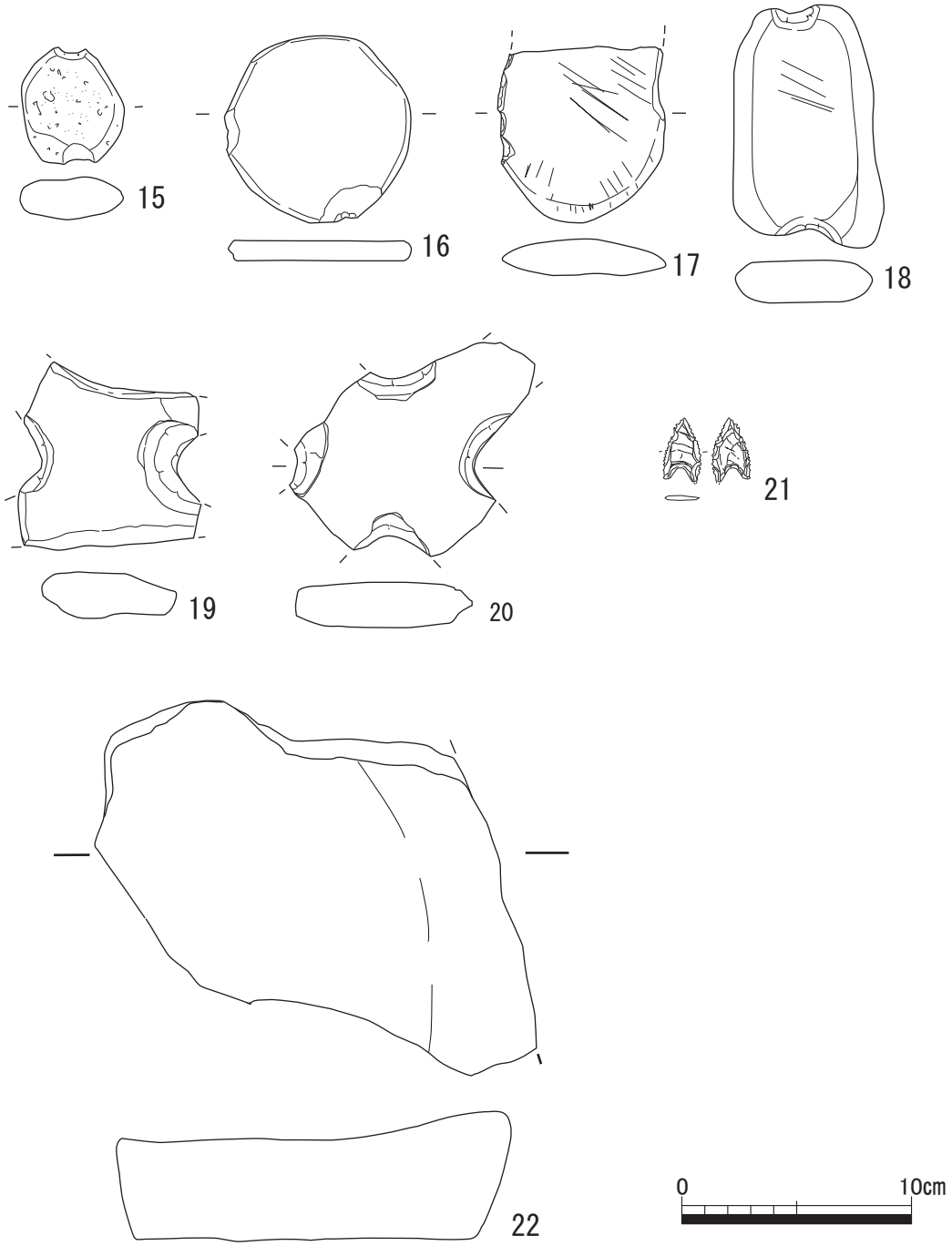
第６図　SB01竪穴住居実測図(S=1/80)



第７図　SB01出土遺物実測図(S=1/3)



第８図　SB01出土遺物実測図(S=1/3・１/2)



第９図　SB01出土遺物実測図(S=1/3)

る。透かしが見られる。

12～14は縄文時代後期後半の注口土器の注口部である。

15は軽石製の浮子である。16は片岩製の石製円盤の石錘である。18は砂岩製の石斧を石錘に転用したものである。

17は蛇紋岩製の磨製石斧である。

19・20は砂岩製のＸ字形石器である。

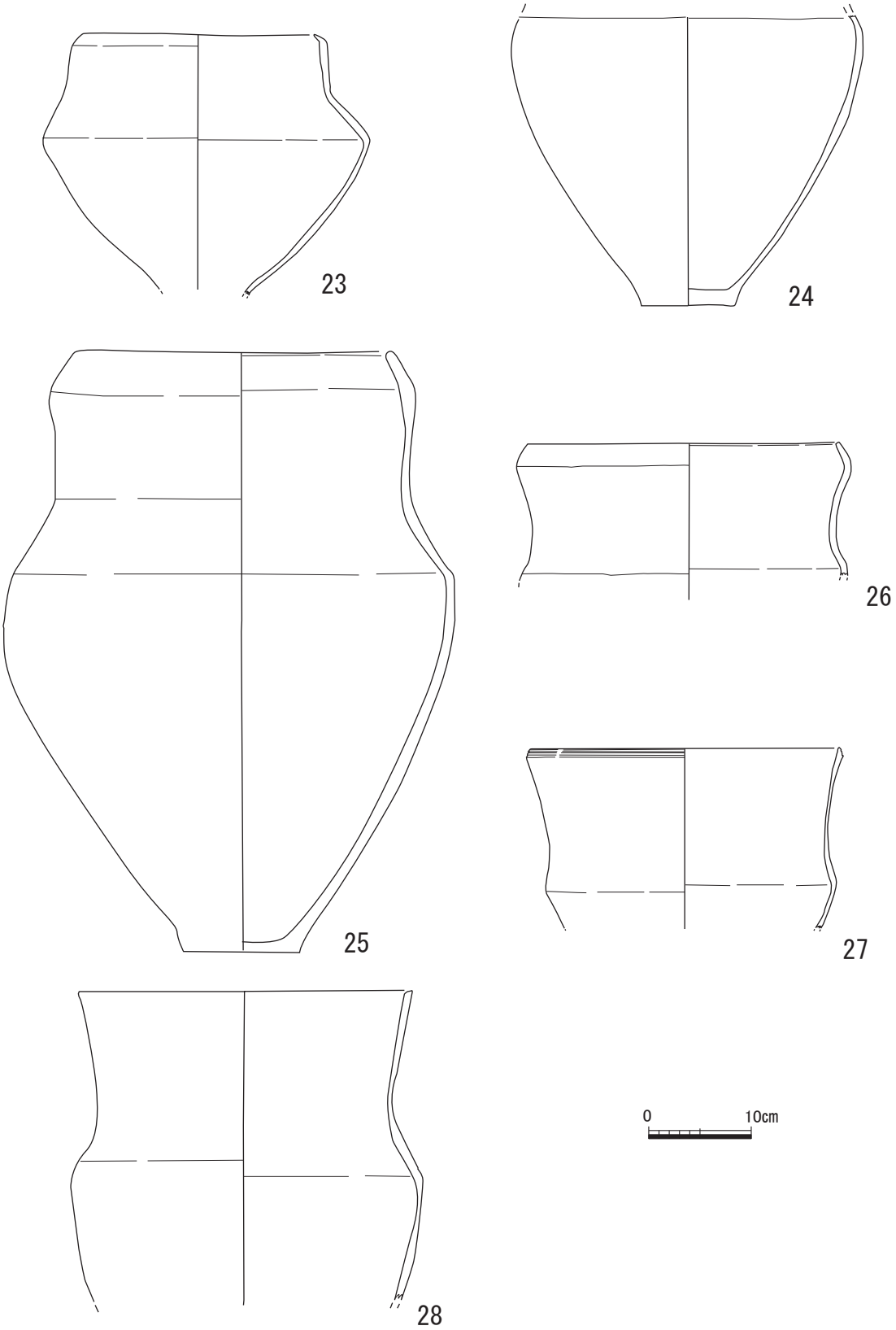
21は安山岩製の石鏃である。側縁部に鋸歯状に加工を施す。

22は砂岩製の石皿である。

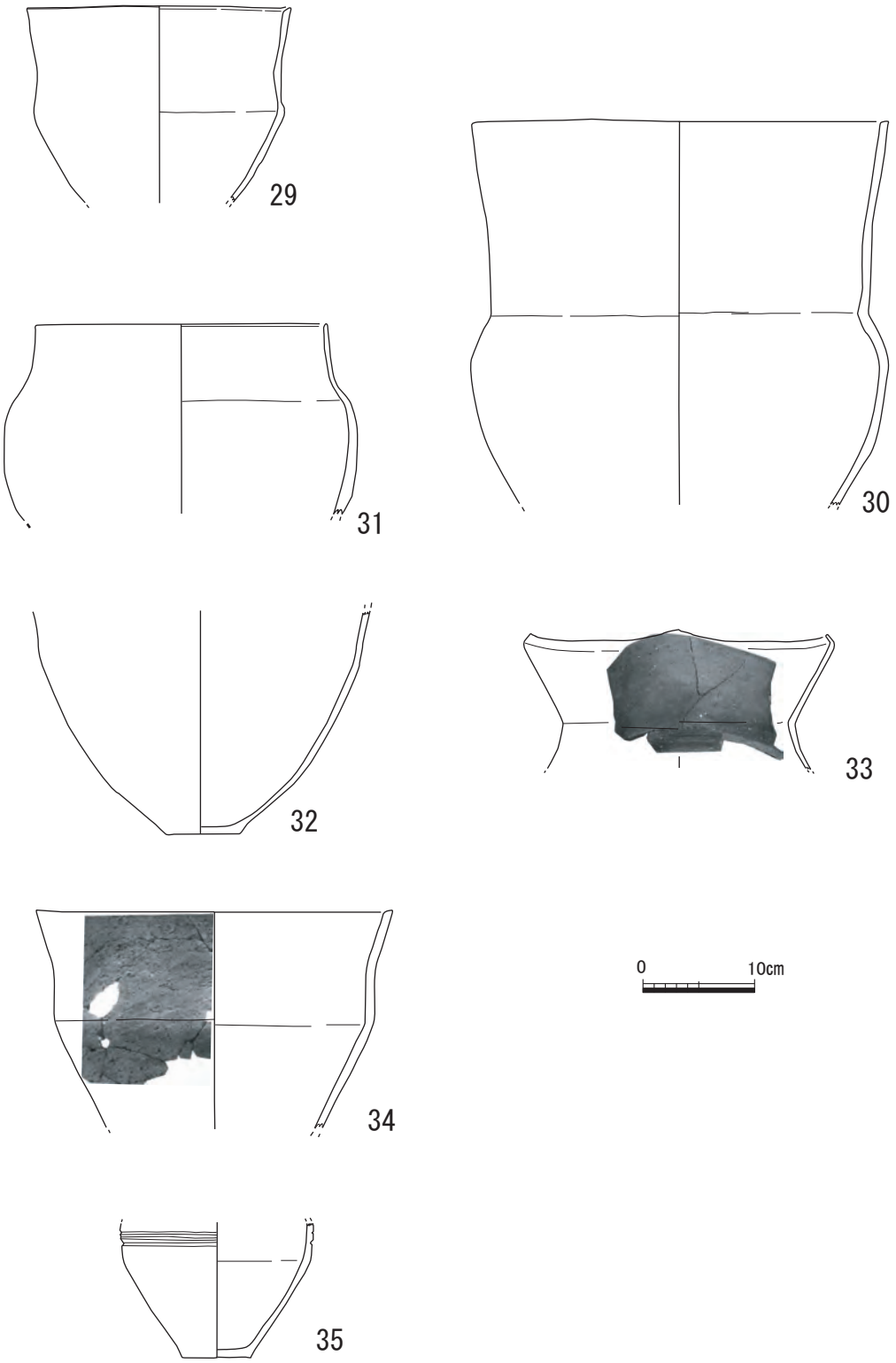
23～32・34・35は住居内で貯蔵・貯水等として用いられたと考えられる埋甕や煮炊用の大型の鉢や深鉢である。

23～26・28～31は三万田式土器か鳥井原式土器の大型土器である。23は鉢で、外面はナデで、精製もしくは半精製の無文土器である。24は深鉢で、外面はナデで、半精製の無文土器である。25・26は深鉢で、外面はミガキで、精製の無文土器である。26は立った状態で出土した埋甕である。28は大型の深鉢で、内外面はケズリ後にナデ調整を行う精製の無文土器である。29は深鉢で、内外面はケズリ後にナデ調整を行う半精製の無文土器である。30は大型の深鉢で、外面はケズリで内面はナデの粗製の条痕文土器である。31は大型の深鉢で、内外面はケズリ後にナデ調整を行う半精製の無文土器である。

27は太郎迫式土器の鉢で、口縁部に沈線文が巡る。内外面はナデで半精製の無文土器である。32は縄文時代後期後半の大型の深鉢で、外面はミガキ調整で内面はナデの精製の土器である。33は太郎迫式土器の精製の鉢で、口縁部の胴部の外面に沈線文を巡らせて、縄文を施す。外面に赤色顔料が見られる。34は縄文時代後期後半の大型の深鉢で、外面をケズリによる擦過状の調整を残す粗製の条痕文土器である。35は三万田式土器の精製の深鉢で、胴部に沈線文を巡らせる。



第10図　SB01出土遺物実測図(S=1/6)



第11図　SB01出土遺物実測図(S=1/6)

SB02竪穴住居(第12図)

B･C－6･7グリッドに位置し、長方形を呈する竪穴住居である。検出面の標高は約17ｍで、規模は長径7.28ｍ、残存短径2.2ｍ、深さ0.03ｍである。遺構の切り合い関係はSB01･03に切られ検出した。柱穴は多く確認できたが、いずれの柱穴が主柱穴になるかは判断つかなった。

太郎迫式土器を含む鉢や浅鉢が大量に出土した。他住居に比べて注口土器以外は特殊遺物が少ない。石器は剥片石器やスクレーパーが出土している。

SB02出土遺物(第13図)

1は縄文時代後期後半の注口土器の注口部である。外面にミガキ調整を行う。

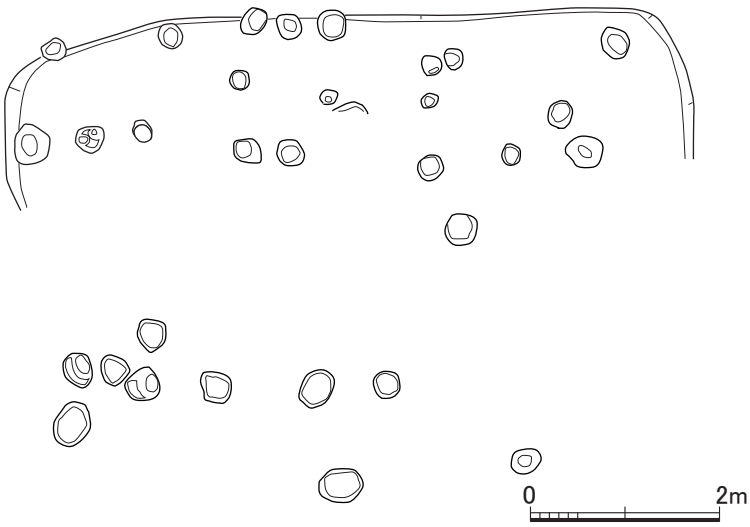
SB03竪穴住居(第14図)

B･C－6グリッドに位置し、長方形を呈する竪穴住居である。検出面の標高は約17ｍで、規模は長径7.4ｍ、短径3.2ｍ、深さは0.01ｍである。遺構の切り合い関係はSB02を切り、SB01に切られて検出した。柱穴は確認できなかった。

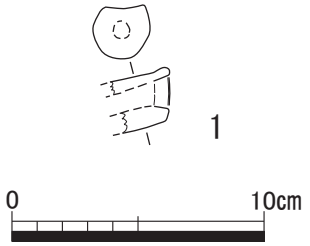
遺構からは縄文時代後期後半の日常用遺物の土器や石器が多く、土製円盤なども出土している。石器は磨石などが出土している。

SB03出土遺物(第15図)

1は太郎迫式土器の鉢で、胴部の外面に刺突列点文を巡らせ、沈線文と縄文を施す。X字文も見られる。2は三万田式土器の浅鉢で、胴部の外面に沈線文と細線文を施す。外面に赤色顔料が付着する。3は鳥井原式土器の鉢で、口縁部の外面に凹線文と細線文を施す。外面に赤色顔料が付着する。4は鳥井原式土器の鉢で、口縁部の外面に凹線文と貝殻による凹点を施す。5は鳥井原式土器の浅鉢で、外面に凹線文と凹点を施す。



第12図　SB02竪穴住居実測図(S=1/80)



第13図　SB02出土遺物実測図(S=1/3)

SB05竪穴住居(第16図)

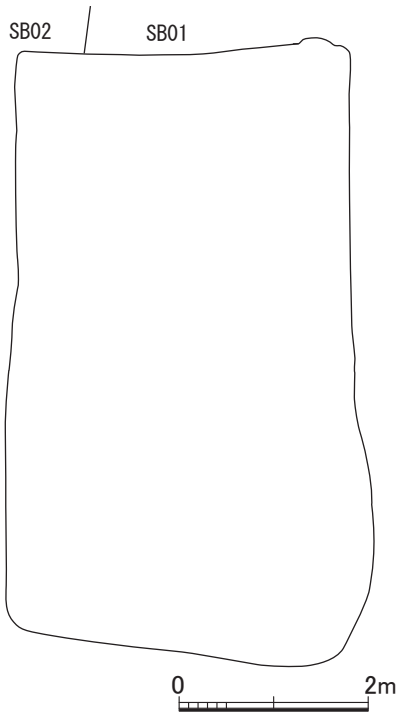
C･D－８グリッドに位置し、長方形を呈する竪穴住居の可能性がある遺構である。検出面の標高は約17.5mで、規模は残存長径4.49m、短径3.35m、深さ0.15mである。他遺構との切り合い関係は認められない。柱穴は壁側付近のみ確認できたが、遺構内からは確認できなかった。いずれの柱穴が主柱穴になるかは判断つかなった。

遺構からは縄文時代後期後半の日常用遺物の土器や石器が多く、特殊遺物はあまり見られない。

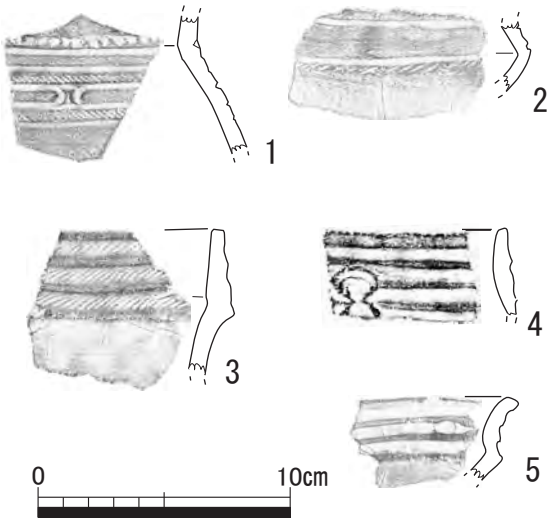
SB06竪穴住居(第17図)

D･E－8グリッドに位置し、長方形を呈する竪穴住居の可能性がある遺構である。検出面の標高は約17.5mで、規模は長径2.94m、短径2.86m、深さ0.14mである。他遺構との切り合い関係は認められない。柱穴は僅かに確認でき、東西に並ぶ柱穴が主柱穴だと思われる。

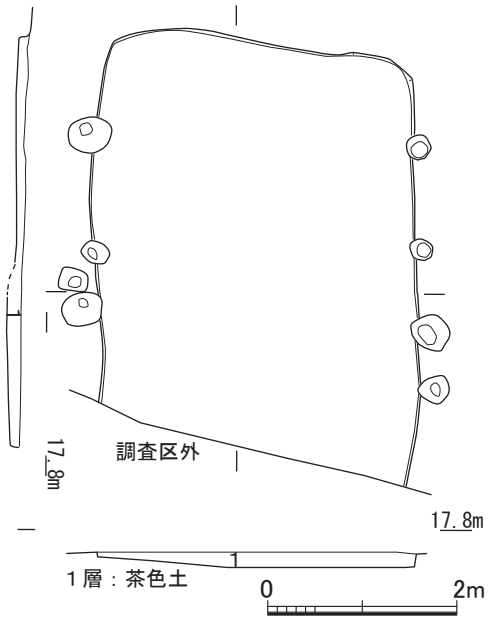
遺構からは縄文時代後期後半の日常用遺物の土器や石器が多く、特殊遺物は見られない。



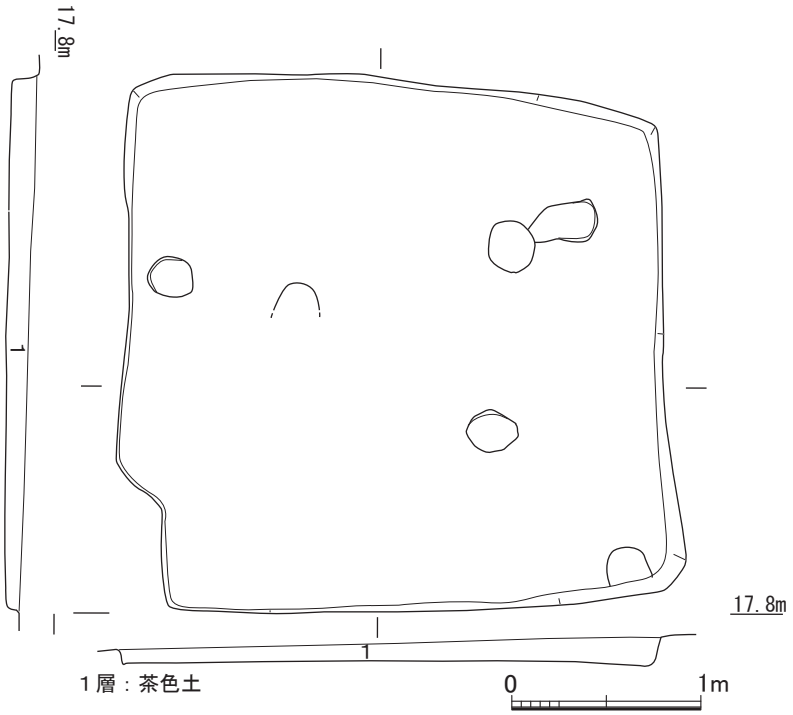
第14図　SB03竪穴住居実測図(S=1/80)



第15図　SB03出土遺物実測図(S=1/3)



第16図　SB05竪穴住居実測図(S=1/80)



第17図　SB06竪穴住居実測図(S=1/40)

SB07竪穴住居(第18図)

C･D－5･6グリッドに位置し、長方形を呈する竪穴住居である。検出面の標高は約17.5mで、規模は長径7.03m、短径4.12m、深さ0.30mである。他遺構との切り合い関係は認められない。柱穴は多く確認できたが、いずれの柱穴が主柱穴になるかは判断つかなった。遺構の南側は段状（テラス）になっていた。また、遺構の南東隅に焼土が確認できた。遺構の北東隅には石皿が出土した。

遺構からは太郎迫式土器が一括で確認できたことから、その頃の遺構である。特殊遺物としては注口土器・高坏・Ｘ字形石器などが出土した。その他、石器は磨製石斧・石鏃・剥片石器、多くの磨石・叩石が出土した。

SB07出土遺物(第19図)

1～7は太郎迫式土器の一括遺物である。1は鉢で、波状口縁の波頂部の外面にＶ字状の刻目を入れる。口縁部の外面に沈線文と縄文を施し、内面に赤色顔料が付着する。2は鉢で、口縁部の外面に沈線文と縄文を施す。3は鉢で、胴部の外面に刺突列点文を巡らせ、沈線と縄文を施す。4は鉢で、胴部の外面に刺突列点文を巡らせて、沈線文と縄文を施す。またＸ字文を施す。外面に赤色顔料が付着し、胴部に補修孔がある。5は鉢で、胴部の外面に沈線文を巡らせる。6は鉢で、内外面にミガキ調整を行う精製無文土器である。7は上記の遺物と共伴して出土したため、太郎迫式土器の底部と考えられる。平底である。

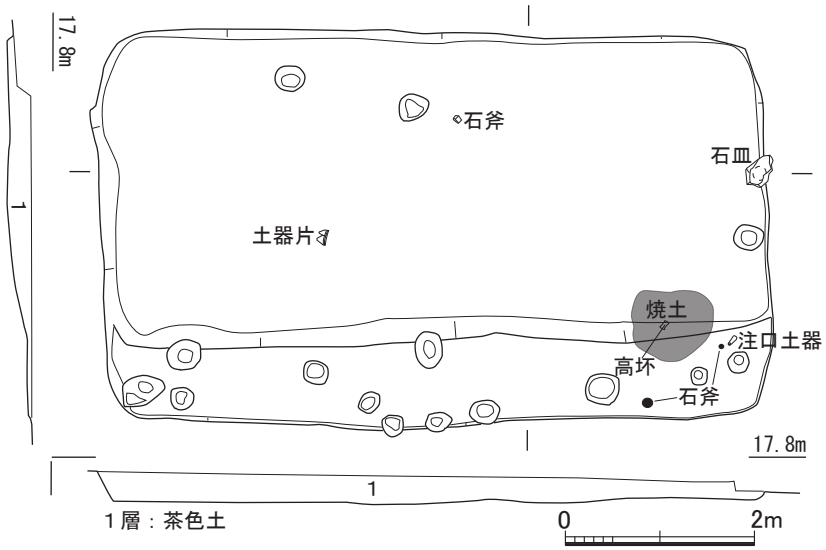
8は黒曜石製の石鏃である。

SB08竪穴住居(第20図)

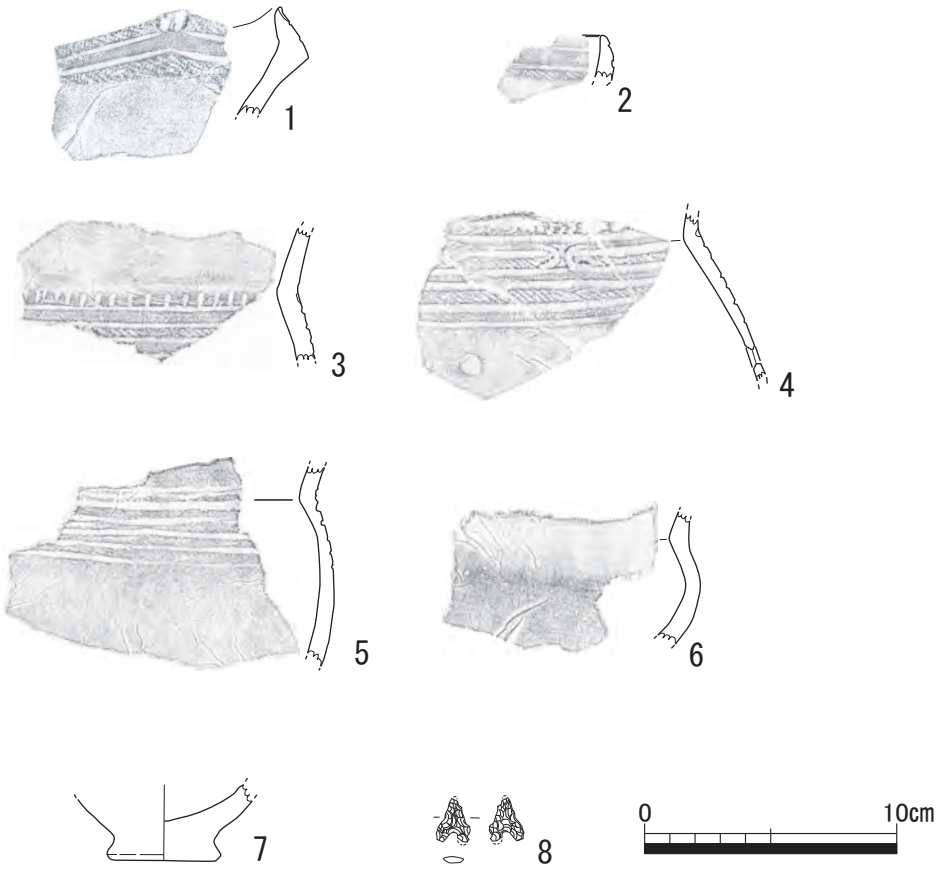
B･C－5･6グリッドに位置し、長方形を呈する竪穴住居である。検出面の標高は約17.5mで、規模は長径7.00m、短径4.80m、深さ0.19mである。他遺構との切り合い関係は認められない。遺構の南東隅には遺構への入口と思われる遺構が付帯していた。遺構の西側には段状（テラス）が確認できた。柱穴は疎らに確認できたが、いずれの柱穴が主柱穴になるかは判断つかなった。

遺構の周囲には柱穴が巡り、SB08竪穴住居に伴うものか、4間×3間の掘立柱建物の柱穴のいずれかと考えられる。

遺構からは縄文時代後期後半の日常用遺物の土器や石器が多く、特殊遺物はあまり見られない。石器は磨石・叩石・スクレーパー・剥片石器などが出土した。



第18図　SB07竪穴住居実測図(S=1/80)



第19図　SB07出土遺物実測図(S=1/3)

SB09竪穴住居(第21図)

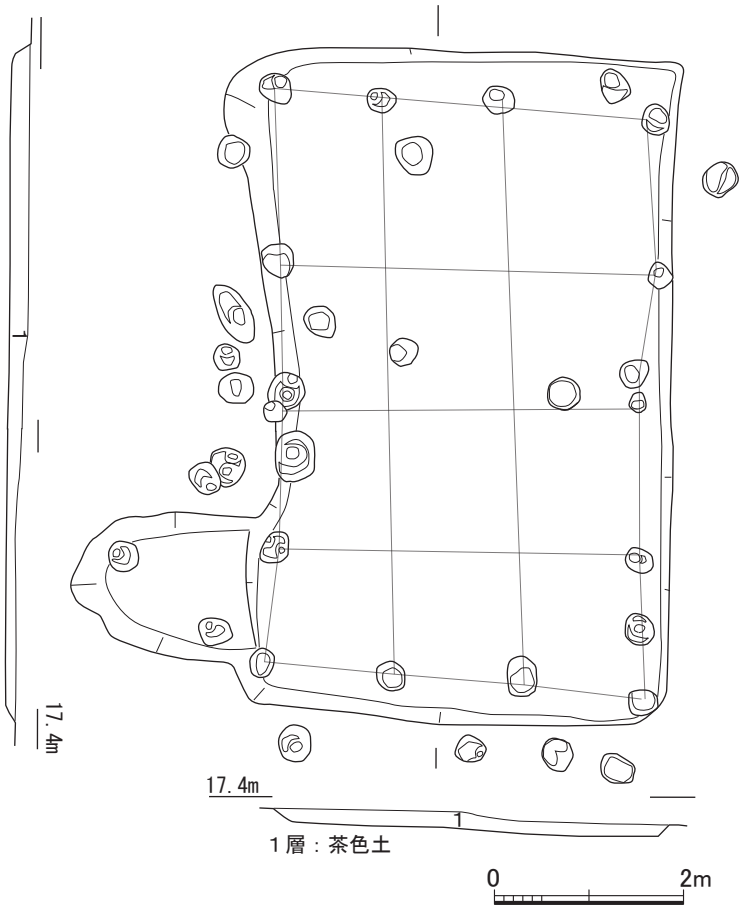
A･B-6･7グリッドに位置し、長方形を呈する竪穴住居である。検出面の標高は約17mで、規模は長径6.78m、短径4.20m、深さ0.22mである。遺構の切り合い関係はSB76を切って検出した。壁面が綺麗に立ち上がる。柱穴は疎らに確認できたが、いずれの柱穴が主柱穴になるかは判断つかなった。

遺構からは三万田式土器や鳥井原式土器の鉢や浅鉢が出土した。精製の無文土器が多い。特殊遺物は土偶の腕部が出土した。石器は磨石・叩石・スクレーパーや石鏃などが出土した。

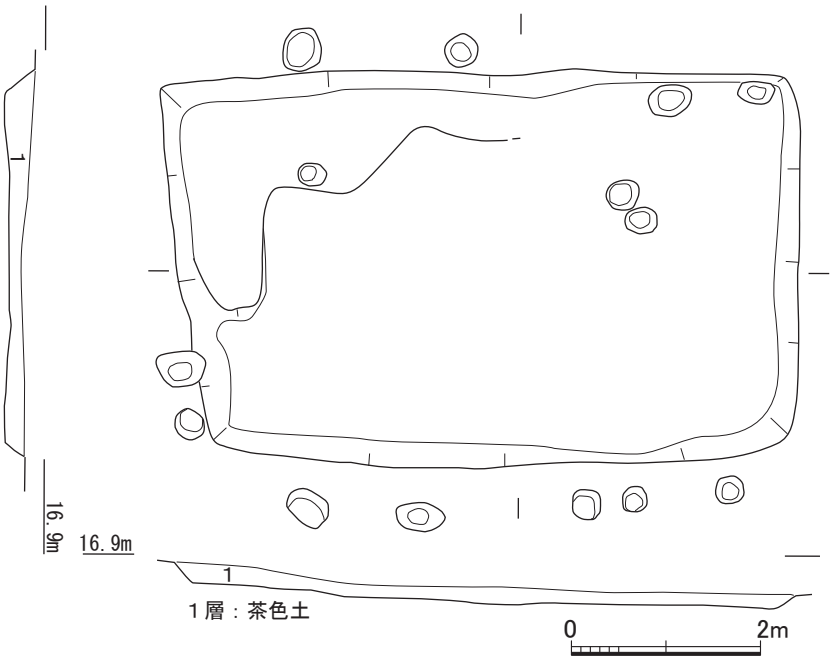
SB09出土遺物(第22図)

1は人形土偶の腕部である。ナデ調整である。赤色顔料らしいものが付着する。

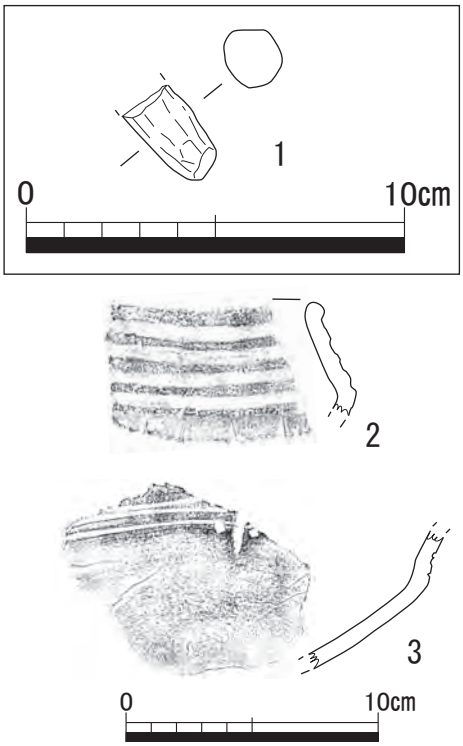
2は鳥井原式土器の鉢で、口縁部の外面に凹線を施す。3は三万田式土器の浅鉢で、胴部の外面に細線と刺突の組み合わせによる文様を施す。



第20図　SB08竪穴住居実測図(S=1/80)



第21図　SB09竪穴住居実測図(S=1/80)



第22図　SB09出土遺物実測図(S=1/3・1/2)

SB10竪穴住居(第23図)

D･E－4･5グリッドに位置し、長方形を呈する竪穴住居である。検出面の標高は約18mで、規模は長径9.72m、残存短径4.00m、深さ0.30mである。SB11との切り合い関係は不明である。柱穴は疎らに確認できたが、いずれの柱穴が主柱穴になるかは判断つかなった。

遺構からは太郎迫式土器の鉢が多くを占める。特殊遺物としては異形土器・高坏が出土した。石器は石皿・スクレーパー・石鏃・石斧・磨石・叩石・軽石が出土した。

SB10出土遺物(第24図)

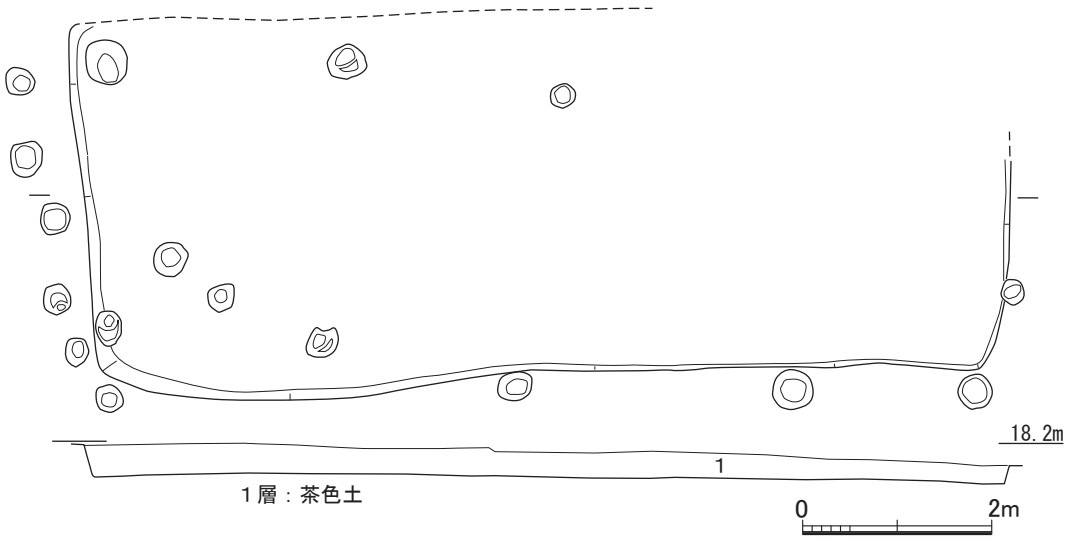
1・2は太郎迫式土器の鉢で、波状口縁の波頂部にV字状の刻目を施す。口縁部と胴部の外面に沈線文と縄文を施して、胴部の外面に刺突列点文を巡らせる。3は太郎迫式土器の鉢で、口唇部に縄文を施し、内外面はミガキ調整を施す。

4は異形土器の脚部である。透かしを施して、赤色顔料が付着する。

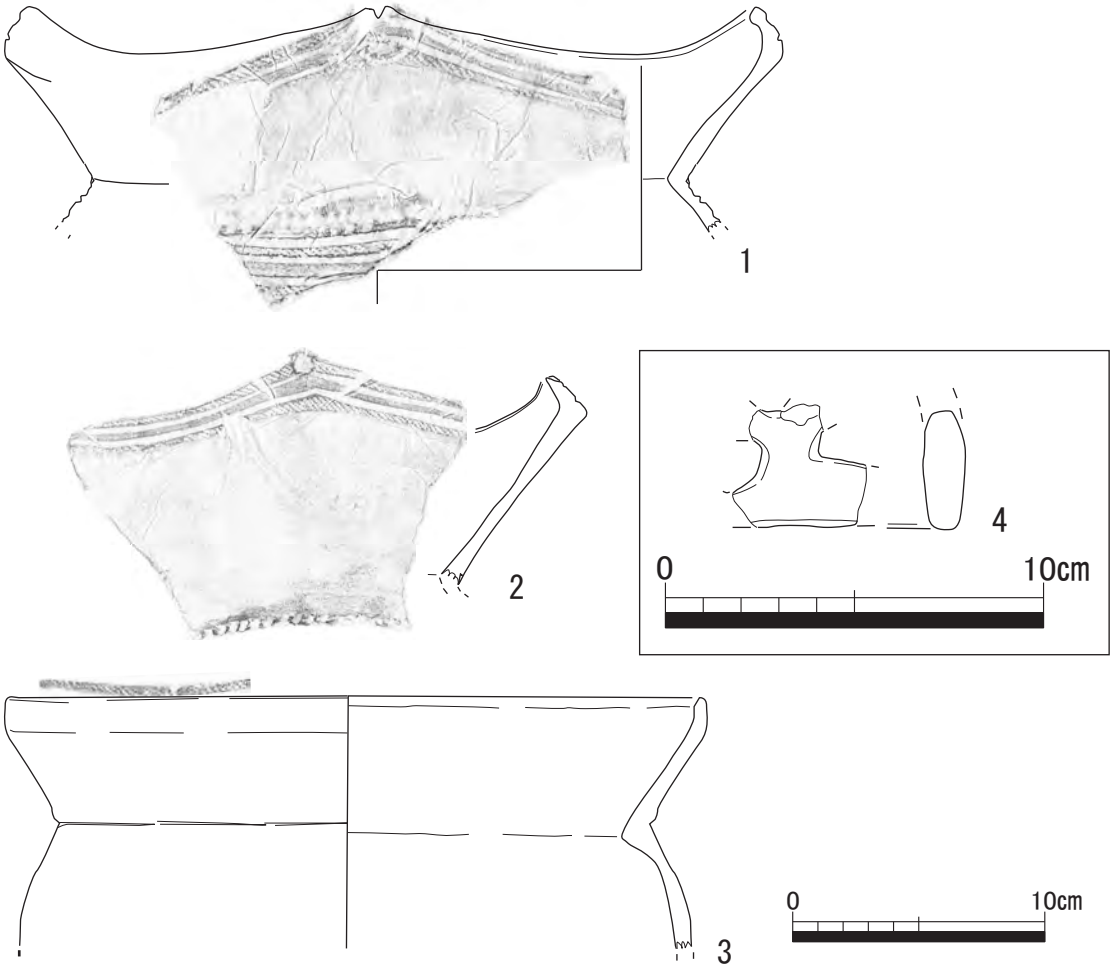
SB11竪穴住居(第25図)

D･E－4･5グリッドに位置し、長方形を呈する竪穴住居である。検出面の標高は約18mで、規模は残存長径7.30m、残存短径5.10m、深さ0.20mである。SB10との切り合い関係は不明である。柱穴は疎らに確認できたが、いずれの柱穴が主柱穴になるかは判断つかなった。

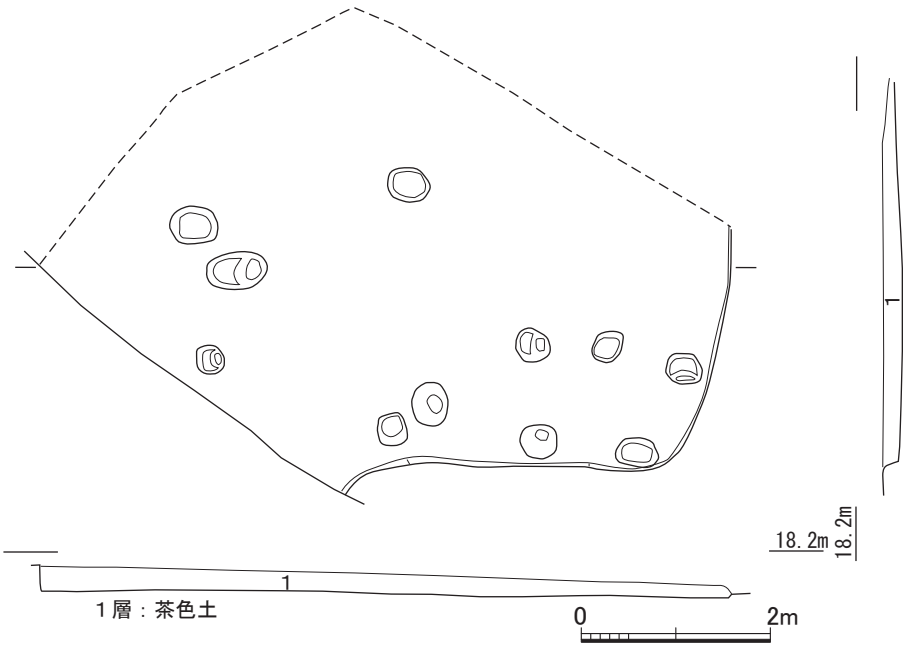
遺構の床面付近からは太郎迫式土器が出土して、三万田式土器が混入していた。粗製土器が多い。石器は磨石やスクレーパー・軽石製浮子・台石などが出土している。



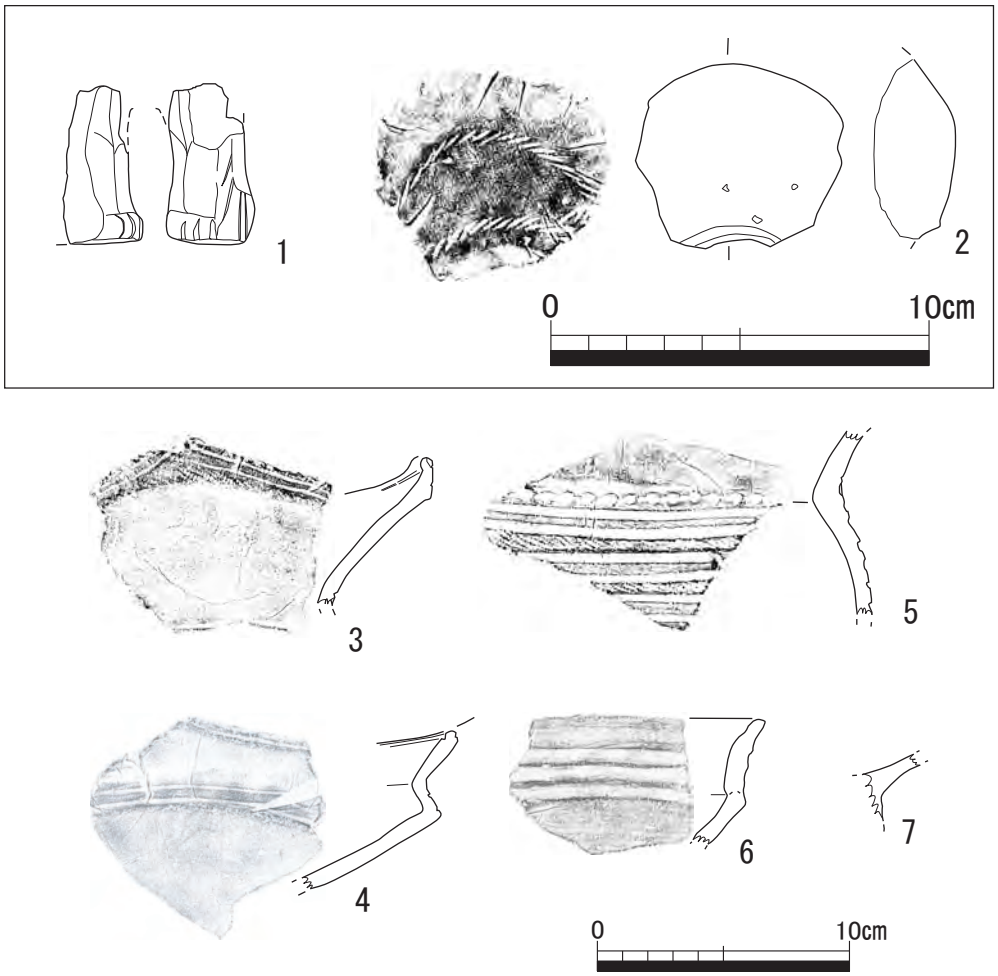
第23図　SB10竪穴住居実測図(S=1/80)



第24図　SB10出土遺物実測図(S=1/3・1/2)



第25図　SB11竪穴住居実測図(S=1/80)



第26図　SB11出土遺物実測図(S=1/3・1/2)

SB11出土遺物(第26図)

1は人形土偶の脚部で、指が確認できる。脚部の縁辺部に細線による文様を施す。内側は股へ向って欠損している。表面に赤色顔料が確認できる。2は人形土偶の頭部と思われる。表面は丁寧なミガキ調整を行い、細線文を施す。表面に刺突が3箇所確認できて、目・鼻・口の何れかを表現している可能性がある。頸部も残存しており、凹線か沈線らしく弧を描く。1・2は何れも細線文を施すことから三万田式土器に共伴する時期の土偶である。

3は太郎迫式土器の鉢で、波状口縁の波頂部の外面にV字状の刻目を入れる。口縁部の外面に沈線文と縄文を施し、胴部の外面に刺突列点文を巡らせる。4は三万田式土器の浅鉢で、波状口縁である。口縁部の内外面に沈線文を施し、胴部の外面にも沈線文を施す。外面に赤色顔料が付着する。5は太郎迫式土器の鉢で胴部の外面に刺突列点文を巡らせ、沈線文と縄文を施す。割れ口付近にX字文が確認できる。6は鳥井原式土器の浅鉢で、凹線文というより稜線文に近い文様を施す。外面に赤色顔料が付着する。

7は縄文時代後期後半の高坏で、ミガキによる調整を施す。赤色顔料が付着する。

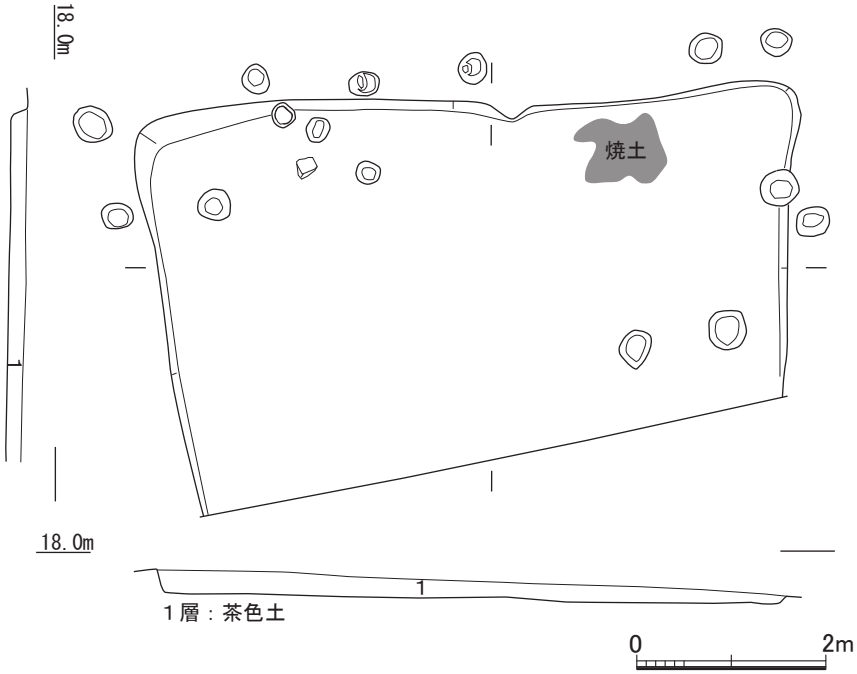
SB16竪穴住居(第27図)

C･D－3･4グリッドに位置し、長方形を呈する竪穴住居である。検出面の標高は約18mで、規模は長径7.00m、残存短径4.64m、深さ0.22mである。他遺構との切り合い関係は認められない。柱穴は疎らに確認できたが、遺構内のいくつかの柱穴が主柱穴になる可能性がある。遺構の西側に焼土が確認できた。

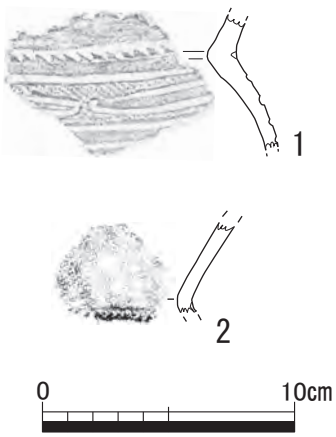
遺構からは西平式土器・太郎迫式土器を多く含む。僅かに三万田式土器が混じる。石器は石匙・磨石・打製石斧などが出土した。

SB16出土遺物(第28図)

1は西平式土器の鉢で、胴部の外面に刺突列点文を巡らせて、沈線文と縄文を施す。2は



第27図　SB16竪穴住居実測図(S=1/80)

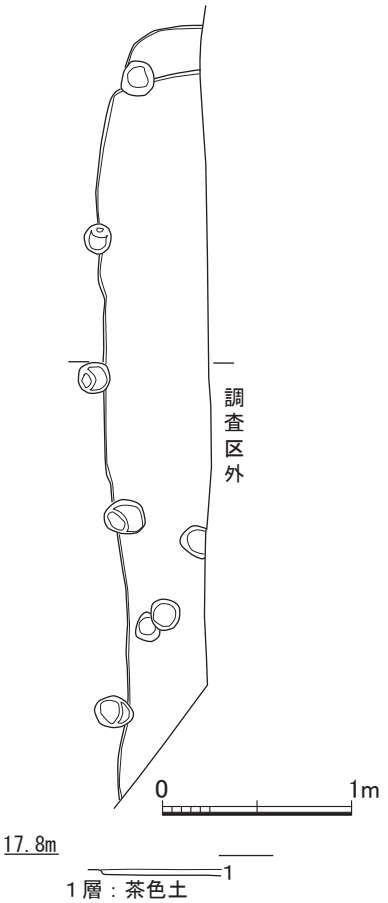


第28図　SB16出土遺物実測図(S=1/3)

西平式土器か太郎迫式土器の胴部で、胴部の外面に刺突列点文を巡らせる。

SB17竪穴住居(第29図)

C･D－2･3グリッドに位置し、長方形と思われる竪穴住居の可能性がある遺構である。検出面の標高は約17.5mで、規模は残存長径8.22m、残存短径1.14m、深さ0.06mである。他遺構との切り合い関係は認められない。柱穴は疎らに確認できたが、いずれの柱穴が主柱穴になるかは判断つかなった。



第29図　SB17竪穴住居実測図(S=1/40)

SB19竪穴住居(第30図)

D－3グリッドに位置し、不定形を呈する竪穴住居の可能性がある遺構である。検出面の標高は約18mで、規模は長径7.22m、短径5.92m、深さ0.16mである。遺構の切り合い関係はSB20に切られ検出した。柱穴は多く確認できたが、いずれの柱穴が主柱穴になるかは判断つかなった。遺構の北側隅に石皿が確認できた。

遺構からは三万田式土器・鳥井原式土器が出土した。

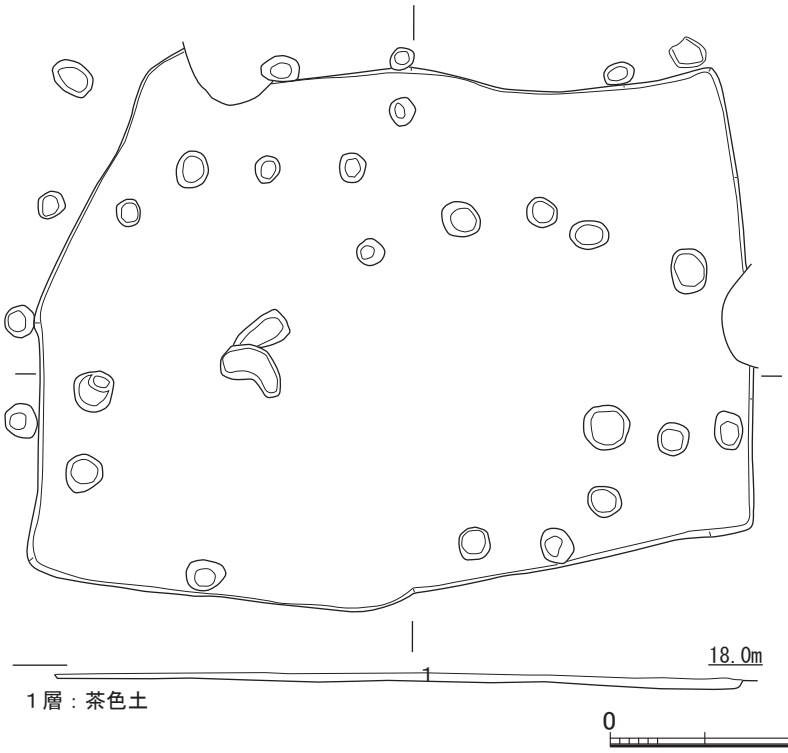
SB19出土遺物(第31図)

1は太郎迫式土器の鉢で、胴部の外面に刺突列点文を巡らせて、沈線文と縄文を施す。また、X字文を施す。2は三万田式土器の浅鉢で、胴部の外面に沈線文を施す。外面に煤が付着する。

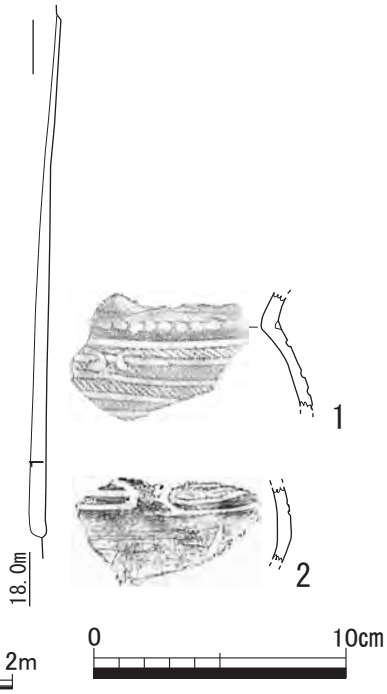
SB20竪穴住居(第32図)

D･E－2･3グリッドに位置し、隅丸方形を呈する竪穴住居の可能性がある遺構である。検出面の標高は約18mで、規模は残存長径6.78m、残存短径4.48m、深さ0.18mである。遺構の切り合い関係はSB19を切って検出した。柱穴は疎らに確認できたが、いずれの柱穴が主柱穴になるかは判断つかなった。

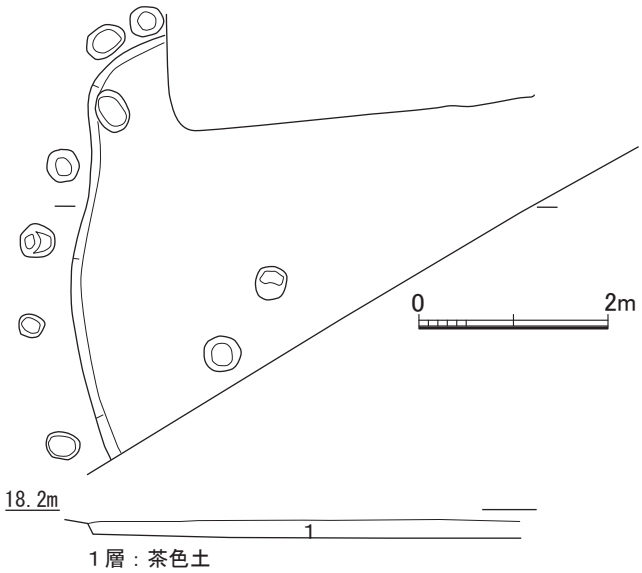
遺構からは縄文時代後期後半の土器が出土し、石器は磨石・叩石が出土した。



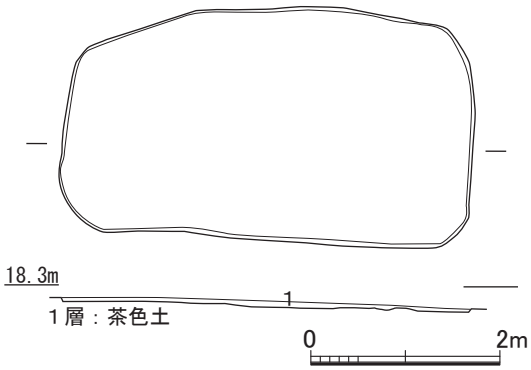
第30図　SB19竪穴住居実測図(S=1/80)



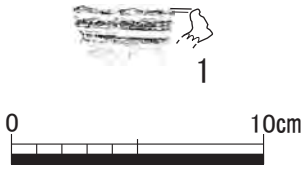
第31図　SB19出土遺物実測図(S=1/3)



第32図　SB20竪穴住居実測図(S=1/80)



第33図　SB22竪穴住居実測図(S=1/80)



第34図　SB22出土遺物実測図(S=1/3)

SB22竪穴住居(第33図)

D･E－2グリッドに位置し、隅丸方形を呈する竪穴住居の可能性がある遺構である。検出面の標高は約18mで、規模は長径4.34m、短径2.50m、深さ0.04mである。他遺構との切り合い関係は認められない。柱穴は確認できなかった。

遺構からは太郎迫式土器が出土した。特殊遺物はあまり見られない。

SB22出土遺物(第34図)

1は太郎迫式土器の鉢で、沈線文を施す。

SB24竪穴住居(第35図)

E･F－1グリッドに位置し、隅丸方形を呈する竪穴住居の可能性がある遺構である。検出面の標高は約18.5mで、規模は長径3.64m、残存短径2.34m、深さ0.05mである。他遺構との切り合い関係は認められない。柱穴は確認できなかった。

SB25竪穴住居(第36図)

E･F－3･4グリッドに位置し、長方形を呈する竪穴住居である。検出面の標高は約18mで、規模は長径8.13m、短径4.98m、深さ0.14mである。他遺構との切り合い関係は認められない。柱穴は疎らに確認でき、遺構内の南北に並ぶ柱穴が主柱穴になる可能性がある。遺構の中央付近から石皿が確認できた。

遺構からは遺構のレベルの高い所から出土した太郎迫式土器を除いて、鳥井原式土器が多く出土した。石器は磨石・叩石・石核が出土した。

SB25出土遺物(第37図)

1は鳥井原式土器の鉢で、口縁部の外面に凹線を施し、赤色顔料が付着する。2は鳥井原式土器の浅鉢で、口縁部の外面に凹点らしい文様と凹線を施す。

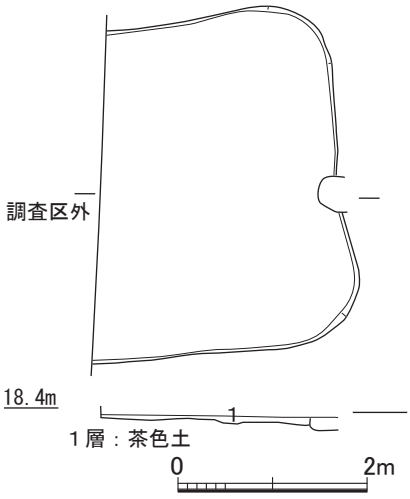
SB26竪穴住居(第38図)

E･F－2グリッドに位置し、長方形を呈する竪穴住居の可能性がある遺構である。検出面の標高は約18.5mで、規模は長径5.74m、短径4.44m、深さ0.02mである。他遺構との切り合い関係は認められない。柱穴は確認できなかった。埋土はしまりがなく、農耕といった生業に伴う遺構の可能性がある。

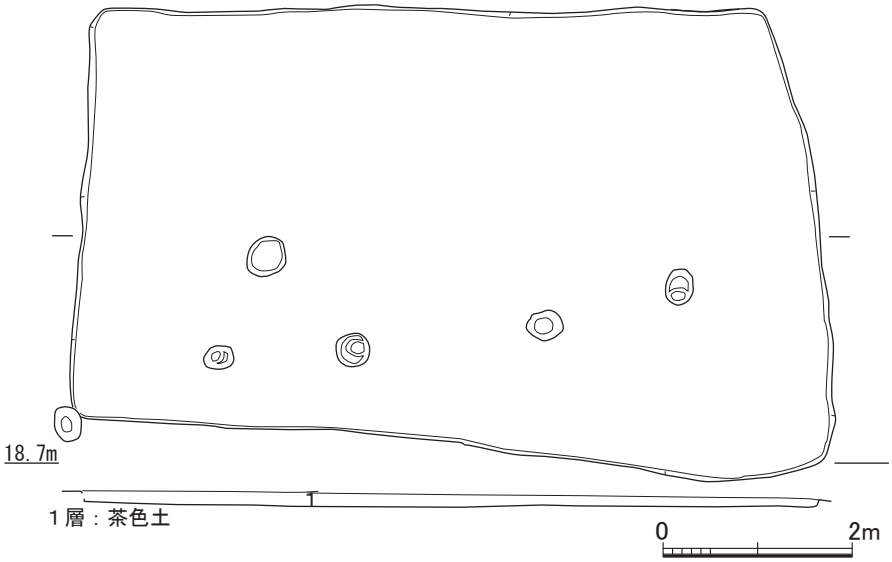
1点のみ三万田式土器と判別できるものがあったが、それ以外は後期後半の小破片であった。縄文時代晩期から弥生時代早期の突帯文土器が1点混入していた。

SB26出土遺物(第39図)

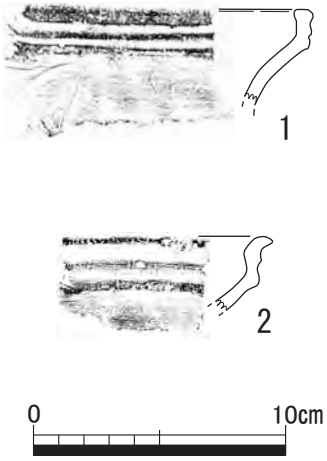
1は縄文時代後期後半の土器の底部である。内面のみに赤色顔料が付着することから、顔料を貯蔵する容器の可能性もある。



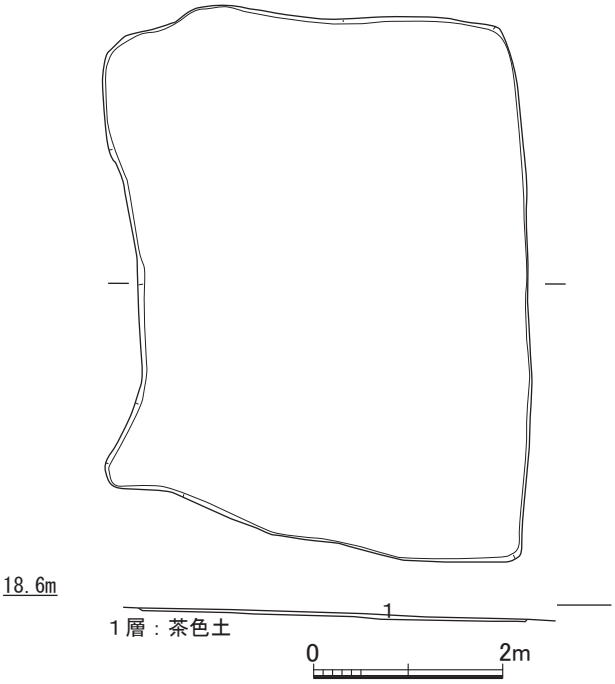
第35図　SB24竪穴住居実測図(S=1/80)



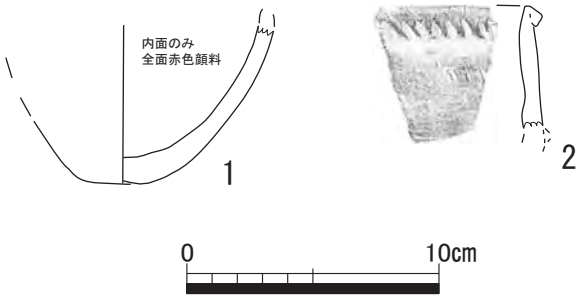
第36図　SB25竪穴住居実測図(S=1/80)



第37図　SB25出土遺物実測図(S=1/3)



第38図　SB26竪穴住居実測図(S=1/80)



第39図　SB26出土遺物実測図(S=1/3)

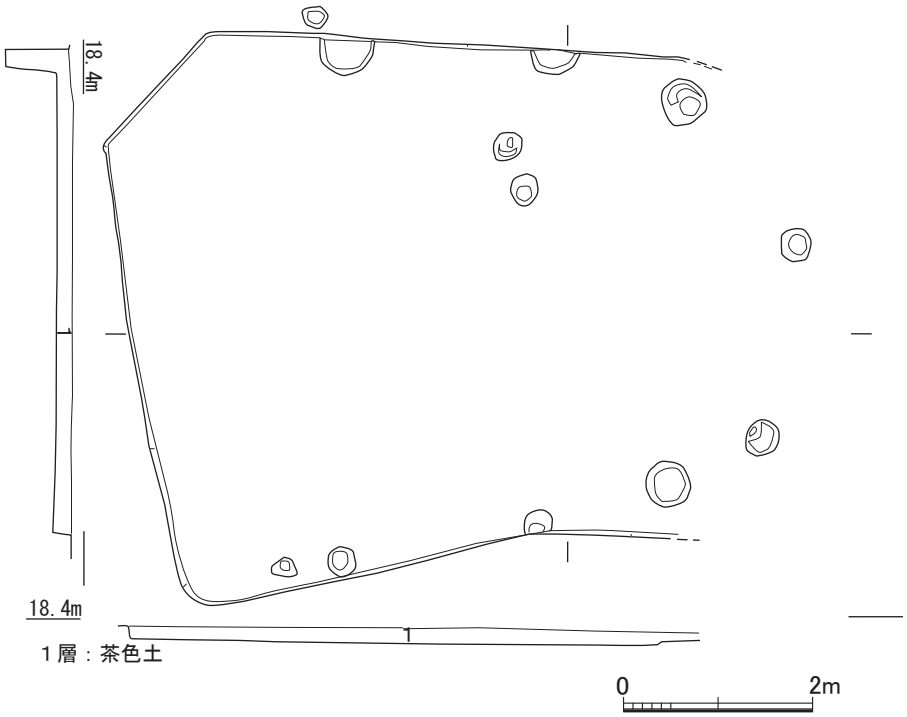
SB27竪穴住居(第40図)

E･F－4･5グリッドに位置し、ほぼ長方形を呈する竪穴住居の可能性がある遺構である。検出面の標高は約18.5mで、規模は長径6.17m、短径6.08m、深さ0.18mである。他遺構との切り合い関係は認められない。柱穴は疎らに確認できたが、いずれの柱穴が主柱穴になるかは判断つかなった。

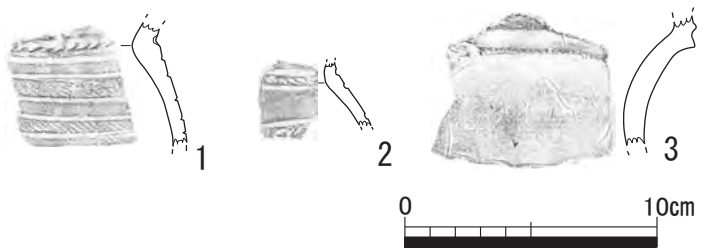
出土遺物は太郎迫式土器を多く含む。石器は磨石・叩石・スクレーパー・台石が出土した。

SB27出土遺物(第41図)

1は太郎迫式土器の鉢で、胴部の外面に沈線文と縄文を施す。2は注口土器の肩部で、沈線文と細線文を施す。3は鳥井原式土器の鉢で、口縁部の外面に凹線どうしが接することで稜をなす稜線文を施す。



第40図　SB27竪穴住居実測図(S=1/80)



第41図　SB27出土遺物実測図(S=1/3)

SB28竪穴住居(第42図)

D～F－5･6グリッドに位置し、長方形を呈する竪穴住居である。検出面の標高は約18mで、規模は長径8.96m、短径4.98m、深さ0.31mである。他遺構との切り合い関係は認められない。柱穴は疎らに確認でき、南北に並ぶ柱穴が主柱穴になる可能性がある。遺構の中央より焼土が確認できた。地床炉かと思われる。

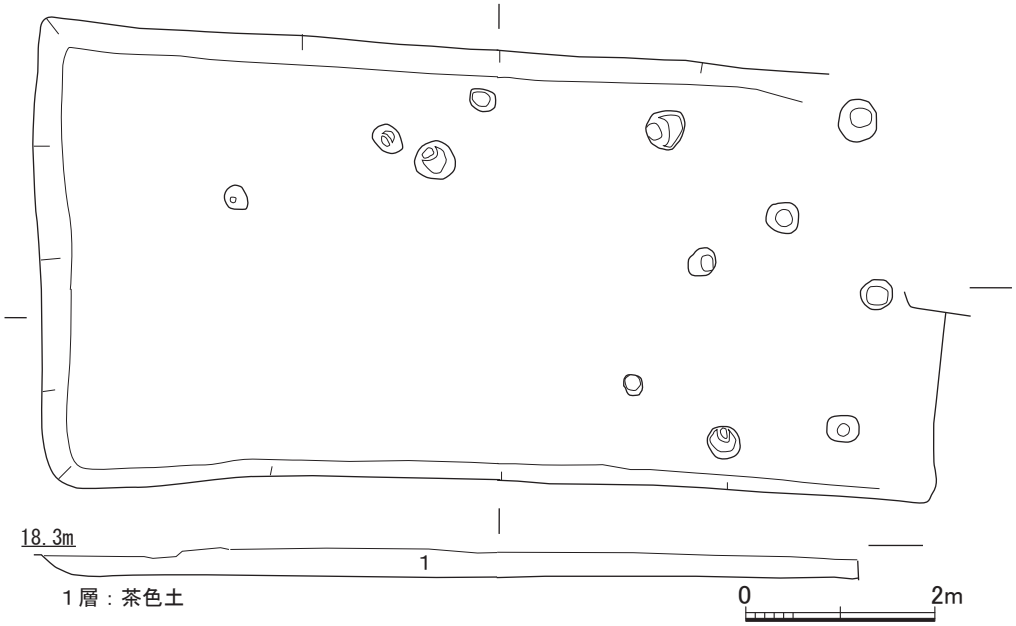
遺構からは三万田式土器が多く、太郎迫式土器が混じる。特殊遺物としては舟形土器・注口土器・高坏が出土した。石器は打製石斧・石錘・軽石・磨石・スクレーパーなどである。

SB28出土遺物(第43図)

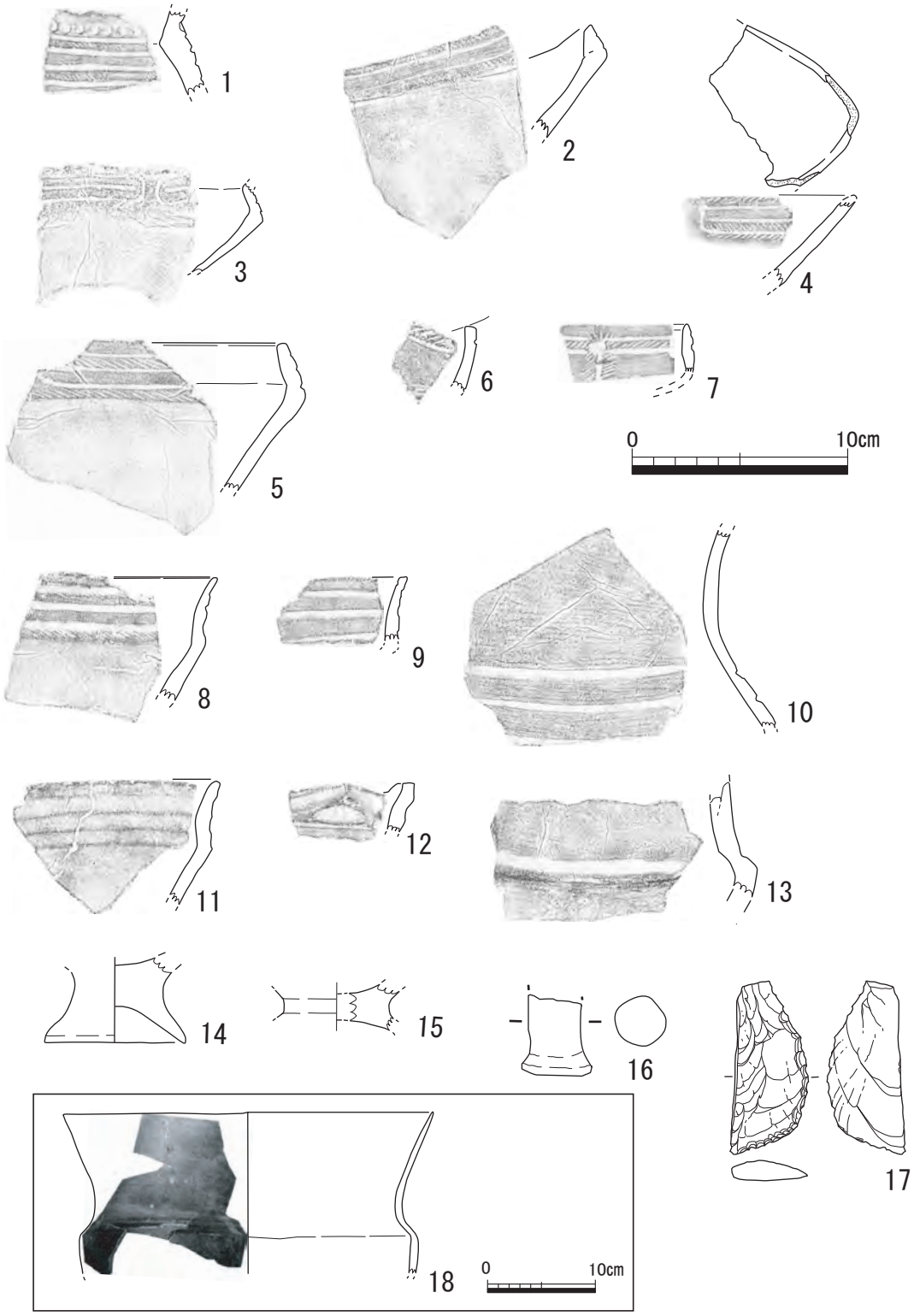
1は太郎迫式土器の鉢で、胴部の外面に刺突列点文を巡らせて、沈線文と縄文を施す。2は太郎迫式土器の波状口縁の鉢で、口縁部の外面に沈線文と縄文を施す。3は三万田式土器の浅鉢で、胴部の外面に沈線文を施す。4は三万田式土器の舟形土器で、口縁部に沈線文と細線文を施す。外面に赤色顔料が付着する。5は三万田式土器の鉢で、口縁部に沈線文と細線文を施す。6は三万田式土器の波状口縁の鉢で、口縁部に沈線文と細線文を施す。7は三万田式土器の高坏の口縁部と考えられる。口縁部に凹点、沈線文と細線文を施す。8は鳥井原式土器の浅鉢で、口縁部に凹線文と細線文を施す。9は鳥井原式土器の鉢で、口縁部に凹線文を施す。10・13は鳥井原式土器の鉢で、胴部に凹線文を施す。11は鳥井原式土器の鉢で、口縁部に凹線文どうしで接することで稜をなす稜線文を施す。内外面に赤色顔料が付着する。12は鳥井原式土器の波状口縁の鉢で、口縁部に凹線文と凹点を施す。18は鳥井原式土器の精製のやや大型の鉢で、胴部に凹線文を巡らせて細線文を施す。

14・16は縄文時代後期後半の高坏の脚部である。16は赤色顔料が付着する。15は高坏の脚部で、凹線らしきものが巡るため鳥井原式土器と考えられる。

17は玄武岩製のスクレーパーである。



第42図　SB28竪穴住居実測図(S=1/80)



第43図　SB28出土遺物実測図(S=1/3・1/6)

SB29竪穴住居(第44図)

F･G－5･6グリッドに位置し、隅丸方形を呈する竪穴住居の可能性がある遺構である。検出面の標高は約18.5mで、規模は長径4.18m、短径3.92m、深さ0.22mである。他遺構との切り合い関係は認められない。柱穴は疎らに確認でき、東西に並ぶ柱穴が主柱穴であろ

う。

遺構からは縄文時代後期後半の日常用遺物の小破片の土器や石器が多く、特殊遺物はあまり見られない。石器は石鏃・砥石・軽石・剥片石器・磨石などが出土した。

SB31竪穴住居(第45図)

G‐5･6グリッドに位置し、長方形を呈する竪穴住居の可能性がある遺構である。検出面の標高は約18.5mで、規模は長径4.20m、短径3.94m、深さ0.18mである。SB70との切り合い関係は不明である。柱穴は四隅と中央に2個柱穴が確認でき、それらが主柱穴であろう。中央が擂鉢状に15cm程窪んでいた。

遺構からは鳥井原式土器が多く出土した。石器はスクレーパー・磨石などである。

SB31出土遺物(第46図)

鳥井原式土器の鉢で、口縁部に凹線文を施す。

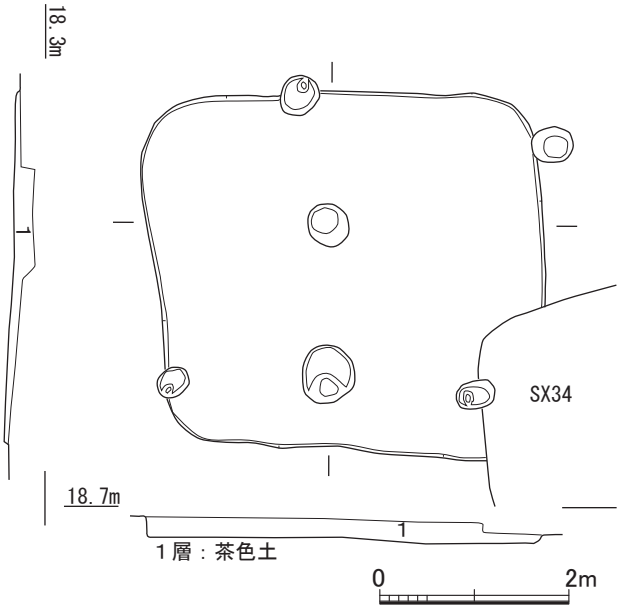
SB32竪穴住居(第47図)

G-5グリッドに位置し、楕円形を呈する竪穴住居の一部の可能性がある遺構である。検出面の標高は約18.5mで、規模は長径4.10m、短径4.02m、深さ0.14mである。他遺構との切り合い関係は不明である。中央が擂鉢状に10cm程窪んでいた。

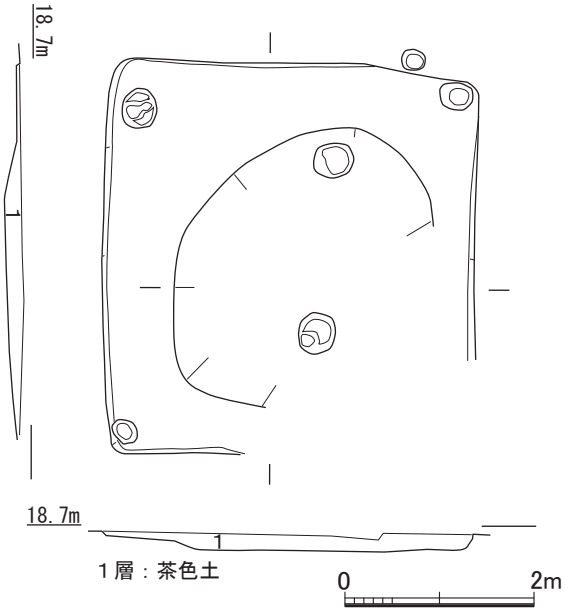
遺構より太郎迫式土器が一括で確認できた。石器の出土量は少ない。

SB32出土遺物(第48図)

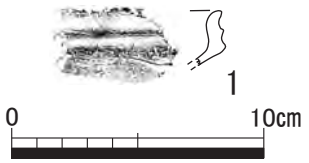
太郎迫式土器の波状口縁の鉢で、口縁部と胴部の外面に沈線文と縄文を施し、胴部の外面に刺突列点文を巡らせる。



第44図　SB29竪穴住居実測図(S=1/80)



第45図　SB31竪穴住居実測図(S=1/80)



第46図　SB31出土遺物実測図(S=1/3)

SB41竪穴住居(第49図)

G－3グリッドに位置し、長方形を呈する竪穴住居の可能性がある遺構である。検出面の標高は約19mで、規模は長径4.70m、短径4.64m、深さ0.02mである。他遺構との切り合い関係は認められない。柱穴は確認できなかった。

SB42竪穴住居(第50図)

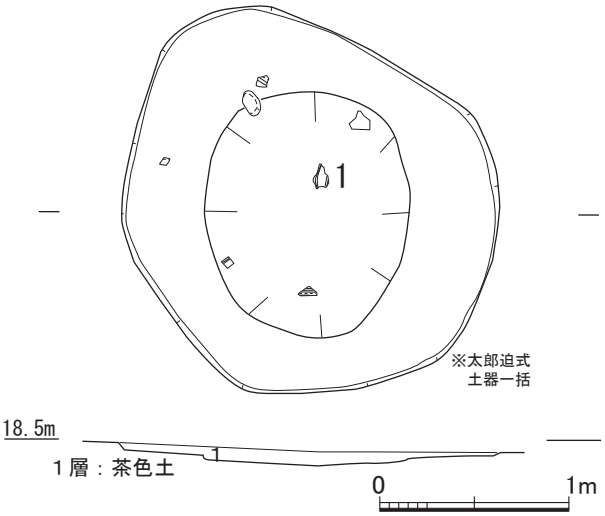
G･H－3･4グリッドに位置し、長方形を呈する竪穴住居である。検出面の標高は約19mで、規模は長径8.32m、短径5.64m、深さ0.04mである。遺構の切り合い関係はSB43を切り検出した。また、遺構の隅を風倒木に切られていた。柱穴は疎らに確認できたが、いずれの柱穴が主柱穴になるかは判断つかなった。遺構の南付近から石皿が出土した。

遺構からは太郎迫式土器が出土した。石器は剥片石器・磨石などである。

SB43竪穴住居(第51図)

G･H－3･5グリッドに位置し、長方形を呈する竪穴住居である。検出面の標高は約19mで、規模は長径7.58m、短径4.18m、深さ0.18mである。遺構の切り合い関係はSB44を切り、SB42に切られ検出した。柱穴は疎らに確認できたが、いずれの柱穴が主柱穴になるかは判断つかなった。遺構の南側は風倒木に切られていた。

遺構からは縄文時代後期後半の日常用遺物の小破片の土器や石器が多く、特殊遺物は異形土器が出土した。石器はスクレーパー・石錘・磨石・石皿などが出土した。

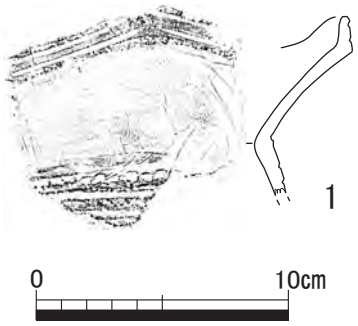


第47図　SB32竪穴住居実測図(S=1/40)

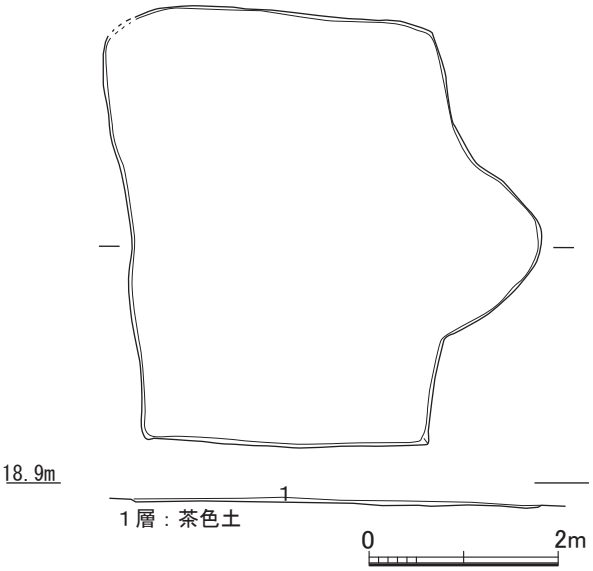
SB43出土遺物(第52図)

1は異形土器の脚部で、凹線文を施すことから鳥井原式土器である。外面はミガキ調整を行う。

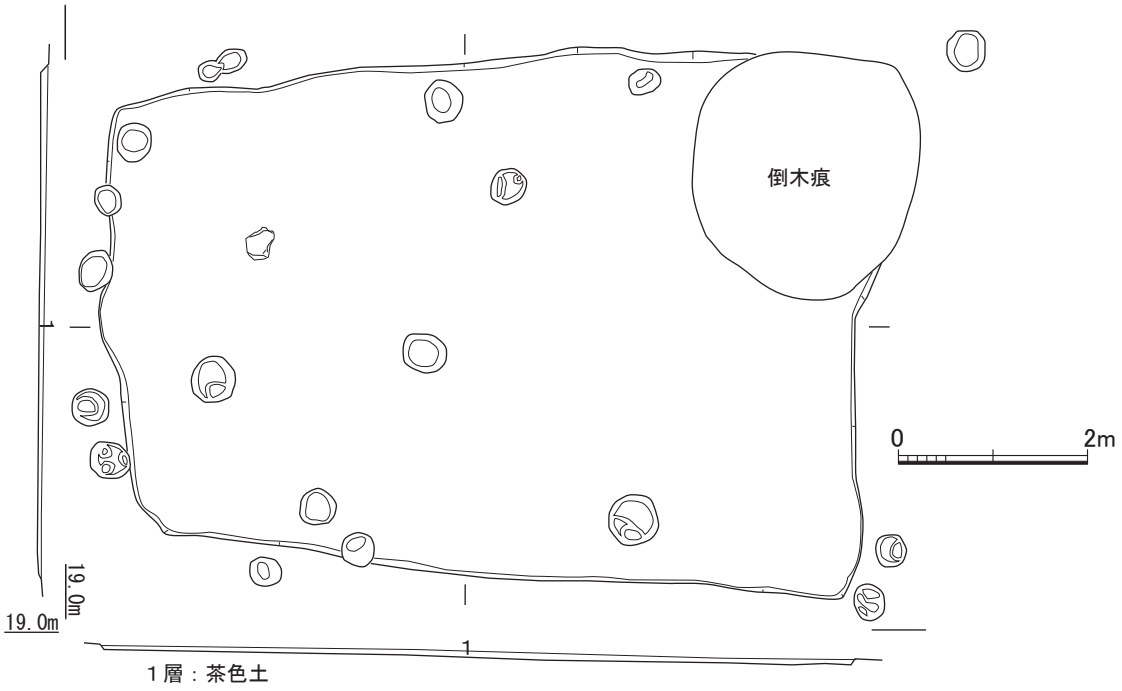
2は舟形土器で、波状口縁部の外面に貼付文と沈線文を施す。文様から、三万田式土器と思われる。外面はミガキを施す。



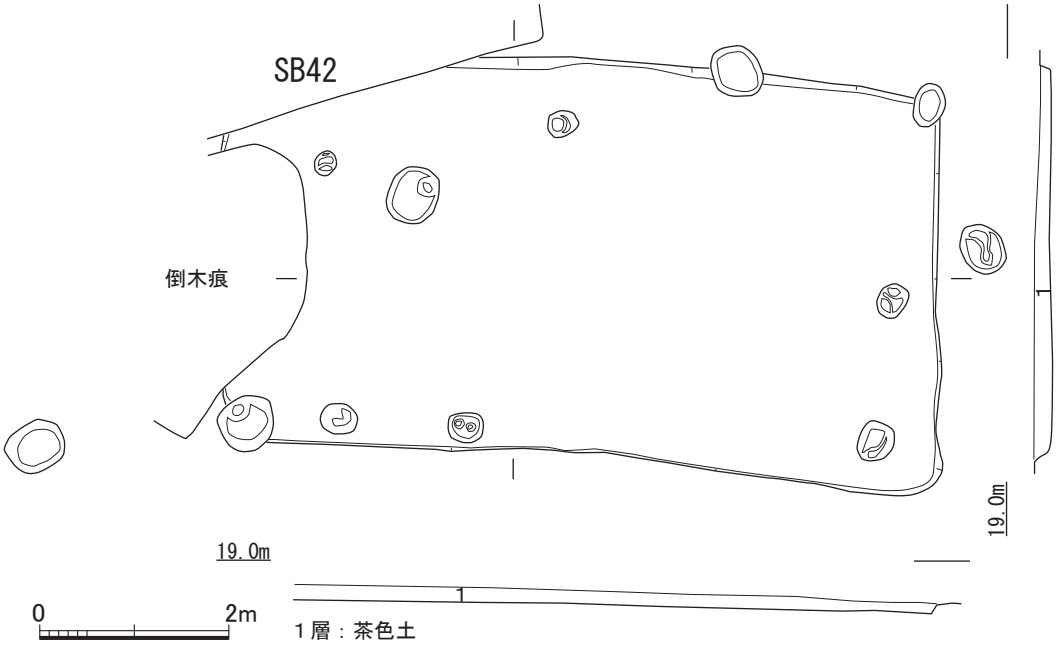
第48図　SB32出土遺物実測図(S=1/3)



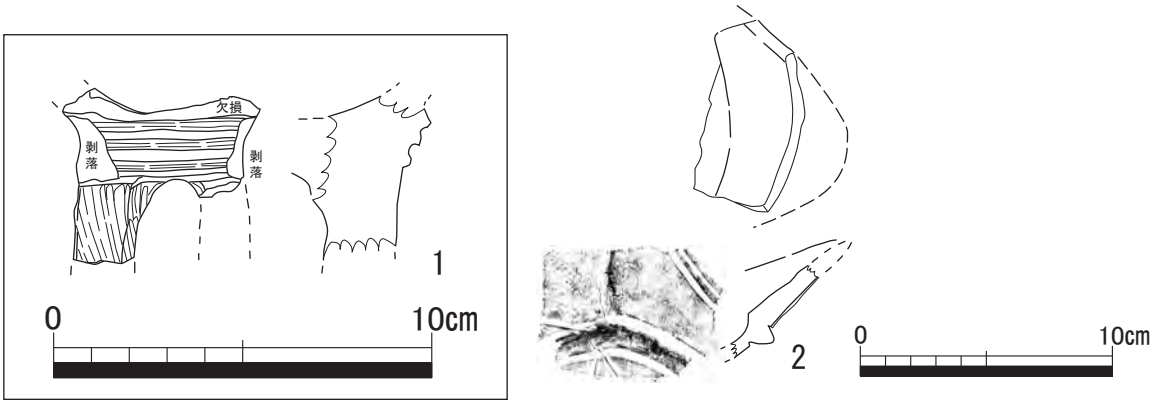
第49図　SB41竪穴住居実測図(S=1/80)



第50図　SB42竪穴住居実測図(S=1/80)



第51図　SB43竪穴住居実測図(S=1/80)



第52図　SB43出土遺物実測図(S=1/3・1/2)

SB44竪穴住居(第53図)

F･G－4･5グリッドに位置し、長方形を呈する竪穴住居である。検出面の標高は約18.5mで、規模は長径8.40m、短径4.81m、深さ0.10mである。遺構の切り合い関係はSB43に切られ検出した。柱穴は疎らに確認できたが、いずれの柱穴が主柱穴になるかは判断つかなった。

遺構からは鳥井原式土器が出土し、太郎迫式土器が僅かに確認できる。石器は打製石斧・磨製石斧・磨石・叩石・スクレーパーか双角状石器と思われるものなどが出土した。

SB44出土遺物(第54図)

太郎迫式土器の鉢で、口縁部に沈線文と擬似縄文を施す。

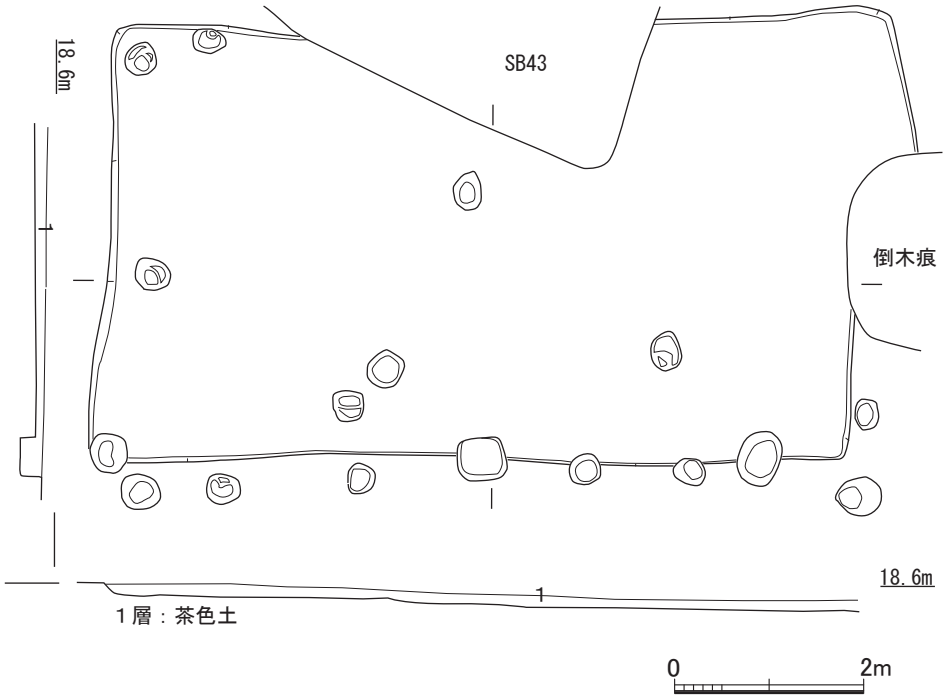
SB46竪穴住居(第55図)

G･H－6･7グリッドに位置し、長方形を呈する竪穴住居である。検出面の標高は約18.5mで、規模は長径8.41m、短径5.06m、短径0.33mである。他遺構との切り合い関係は認められない。柱穴は疎らに確認できたが、北東隅の主柱穴を除いて、いずれの柱穴が主柱穴になるかは判断つかなった。また、集石周辺には焼土と炭化物が確認できた。恐らく、住居の廃棄に伴い、集石の炉が壊された痕跡だと考えられる。遺構からは石皿が出土した。

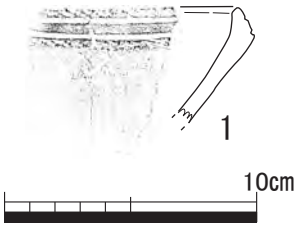
遺構からは剥片石器・叩石・磨石・スクレーパーなどが出土した。

SB46出土遺物(第56図)

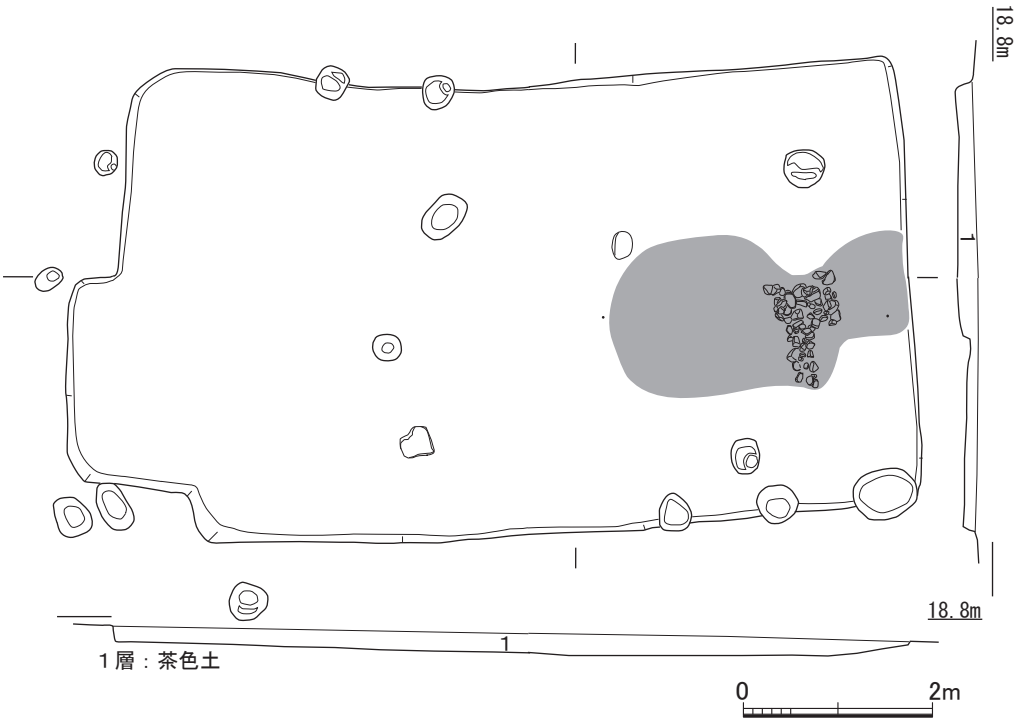
1は太郎迫式土器の鉢で、波状口縁部の波頂部にV字状の刻目を入れる。口縁部の外面に沈線文を施す。2は太郎迫式土器の鉢で、胴部の外面に縄文と沈線文を施す。また、X字文を施す。3は鞴の羽口である。過去の調査で縄文時代の製鉄遺構の可能性も指摘されているが、遺物の胎土から恐らく、包含層からの混入と考えられる。



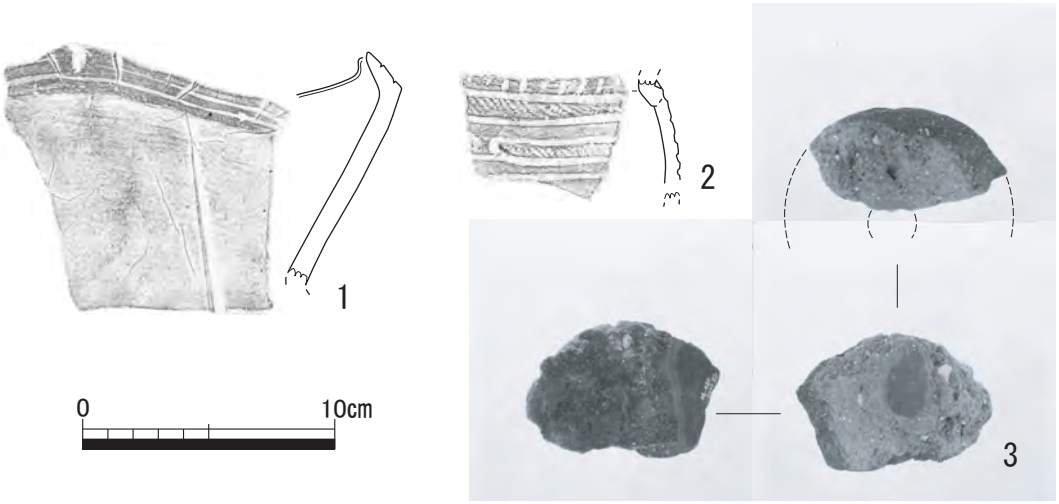
第53図　SB44竪穴住居実測図(S=1/80)



第54図　SB44出土遺物実測図(S=1/3)



第55図　SB46竪穴住居実測図(S=1/80)



第56図　SB46出土遺物実測図(S=1/3)

SB47竪穴住居(第57図)

H･I－6･7グリッドに位置し、長方形を呈する竪穴住居である。検出面の標高は約19mで、規模は長径7.44m、短径4.28m、深さ0.06mである。遺構の切り合い関係はSB48に切られ検出した。柱穴は疎らに確認できたが、いずれの柱穴が主柱穴になるかは判断つかなった。

遺構からは太郎迫式土器が出土するが、遺物は少ない。

SB47出土遺物(第58図)

1は太郎迫式土器の鉢で、外面に沈線文を施す。赤色顔料が付着する。2は三万田式土器の鉢で、波状口縁部の外面に沈線文を施す。また、V字状の刻目が退化した文様が見られる。

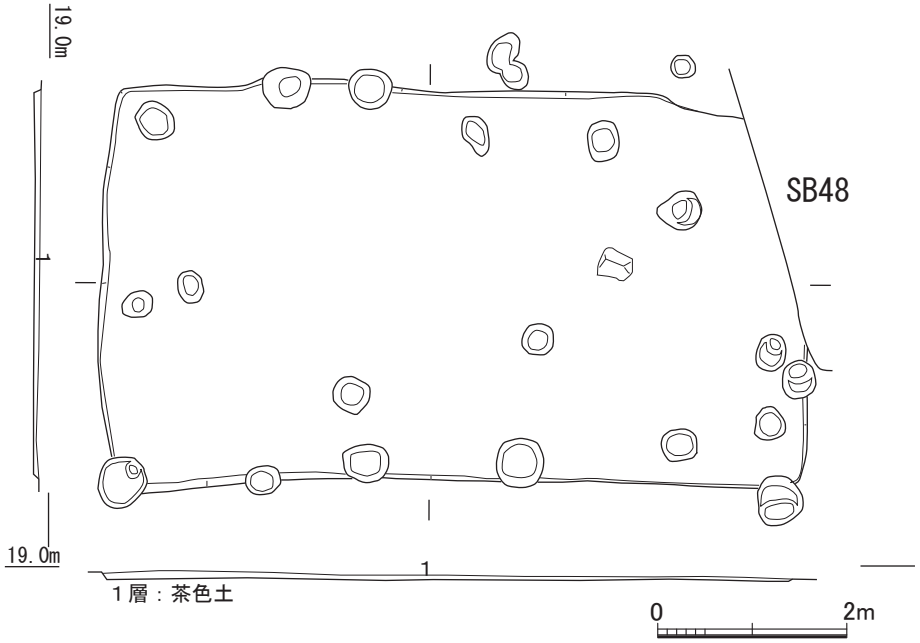
SB48竪穴住居(第59図)

H－5･6グリッドに位置し、長方形を呈する竪穴住居である。検出面の標高は約19mで、規模は残存長径7.70m、短径4.96m、深さ0.10mである。遺構の切り合い関係はSB47を切り検出した。柱穴は疎らに確認できたが、いずれの柱穴が主柱穴になるかは判断つかなった。遺構からは炉の可能性がある集石を検出した。集石の礫は焼けていた。また、その付近から石皿が出土した。

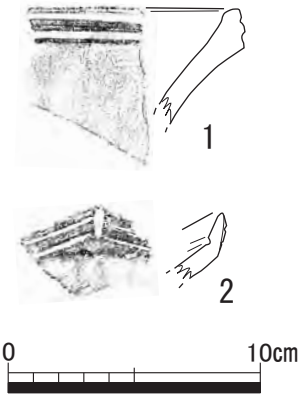
遺構からは太郎迫式土器が多く出土し、石器は打製石斧が出土した。

SB48出土遺物(第60図)

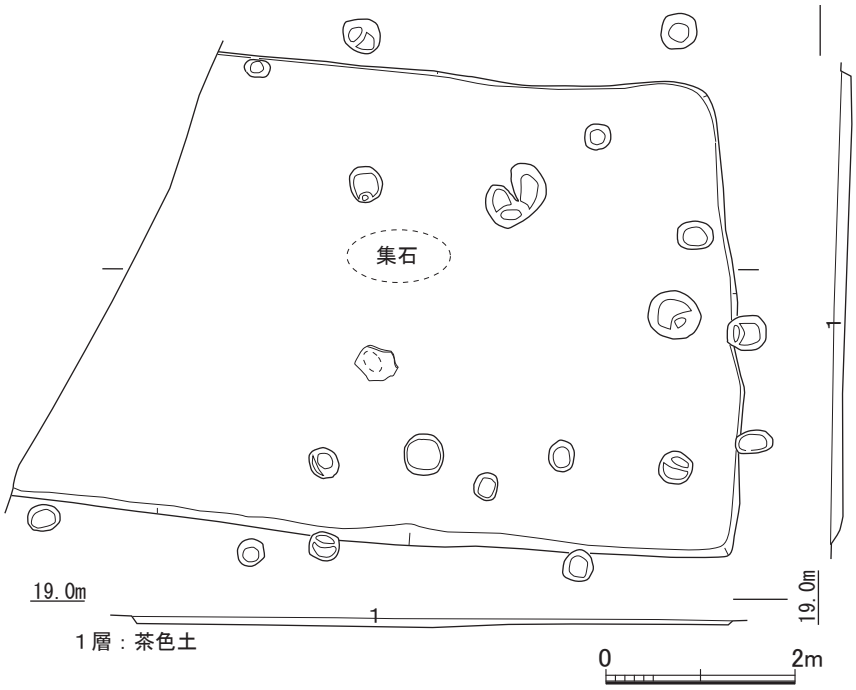
1は太郎迫式土器の鉢で、口縁部の外面に沈線文と縄文を施す。胴部の外面に刺突列点文を巡らせる。



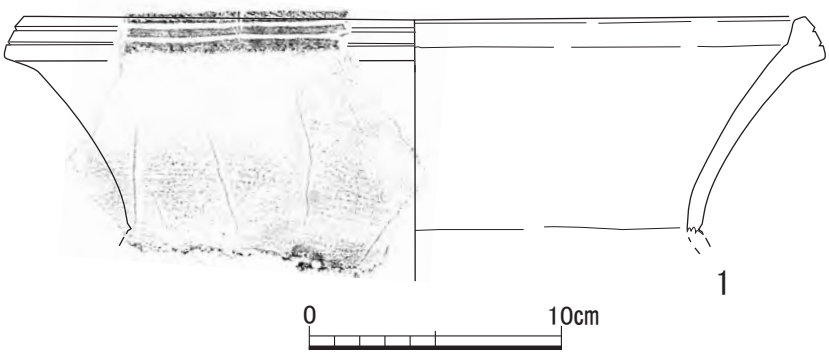
第57図　SB47竪穴住居実測図(S=1/80)



第58図　SB47出土遺物実測図(S=1/3)



第59図　SB48竪穴住居実測図(S=1/80)



第60図　SB48出土遺物実測図(S=1/3)

SB49竪穴住居(第61図)

H･I－5･6グリッドに位置し、長方形を呈する竪穴住居である。検出面の標高は約19mで、規模は長径9.20m、短径5.48m、深さ0.10mである。遺構の切り合い関係はSB50に切られ、その他周辺の遺構を切り検出した。柱穴は疎らに確認できたが、いずれの柱穴が主柱穴になるかは判断つかなった。遺構からは炉の可能性がある焼けた集石を検出した。

遺構からは太郎迫式土器が多く出土し、石器は磨製石斧・磨石・叩石・台石などが出土した。

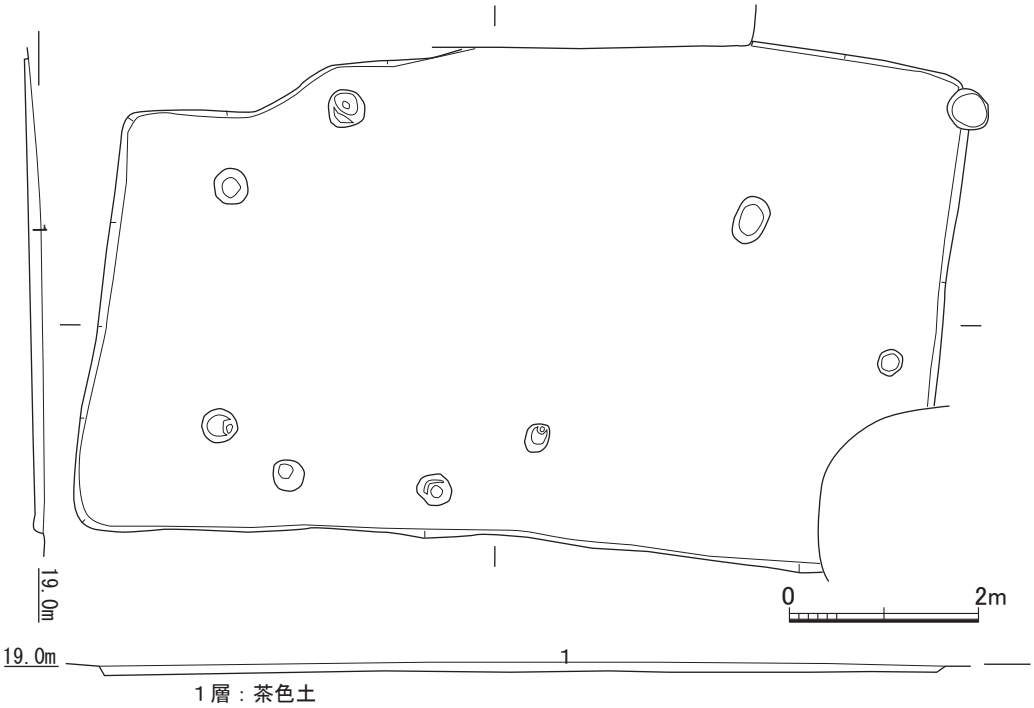
SB49出土遺物(第62図)

1は太郎迫式土器の鉢で、波状口縁部の外面に沈線文と縄文を施す。

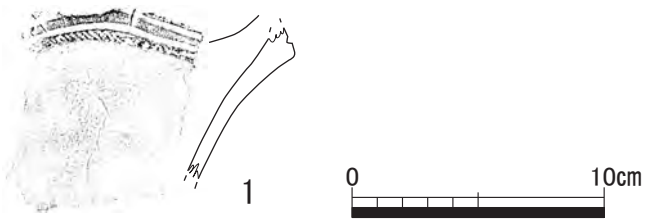
SB50竪穴住居(第63図)

G･H－5グリッドに位置し、長方形を呈する竪穴住居である。検出面の標高は約19mで、規模は長径8.20m、短径5.28m、深さ0.18mである。遺構の切り合い関係は周辺の遺構を切り検出した。柱穴は疎らに確認でき、中央に主柱穴を1個のみ確認できた。

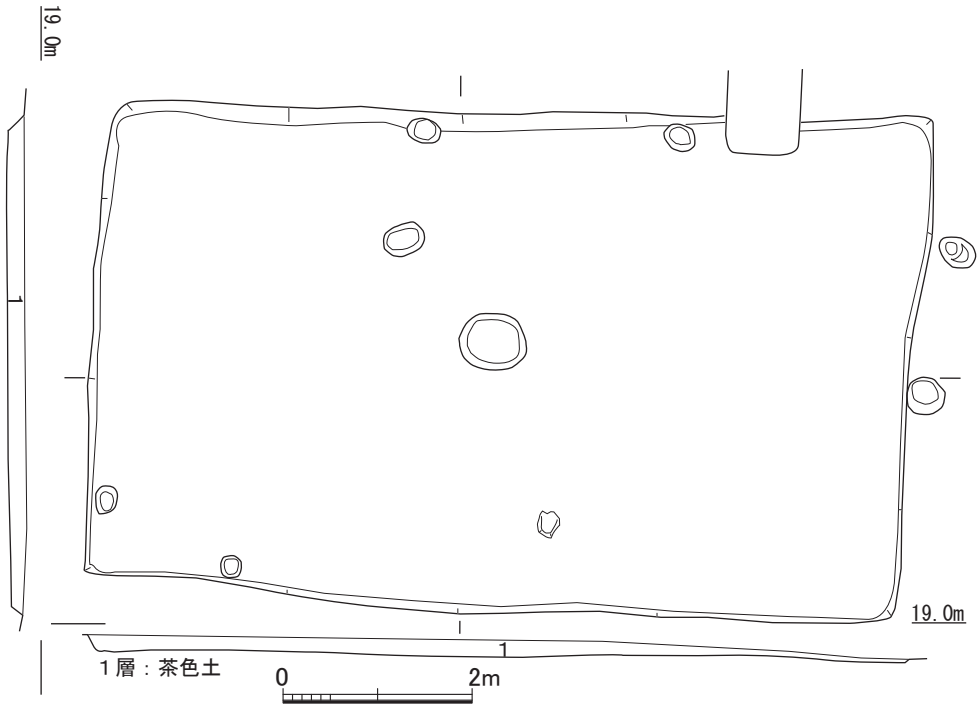
遺構からは石皿・磨石・叩石・打製石斧が出土した。



第61図　SB49竪穴住居実測図(S=1/80)



第62図　SB49出土遺物実測図(S=1/3)



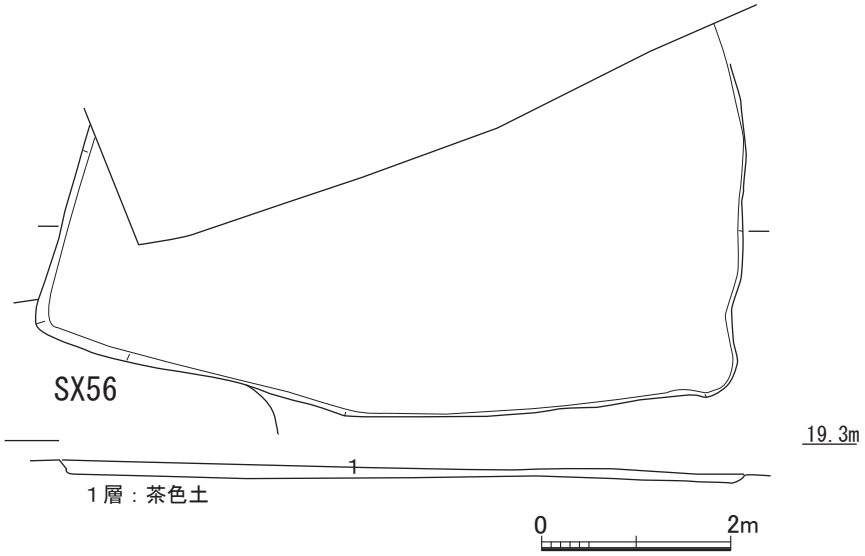
第63図　SB50竪穴住居実測図(S=1/80)

SB53竪穴住居(第64図)

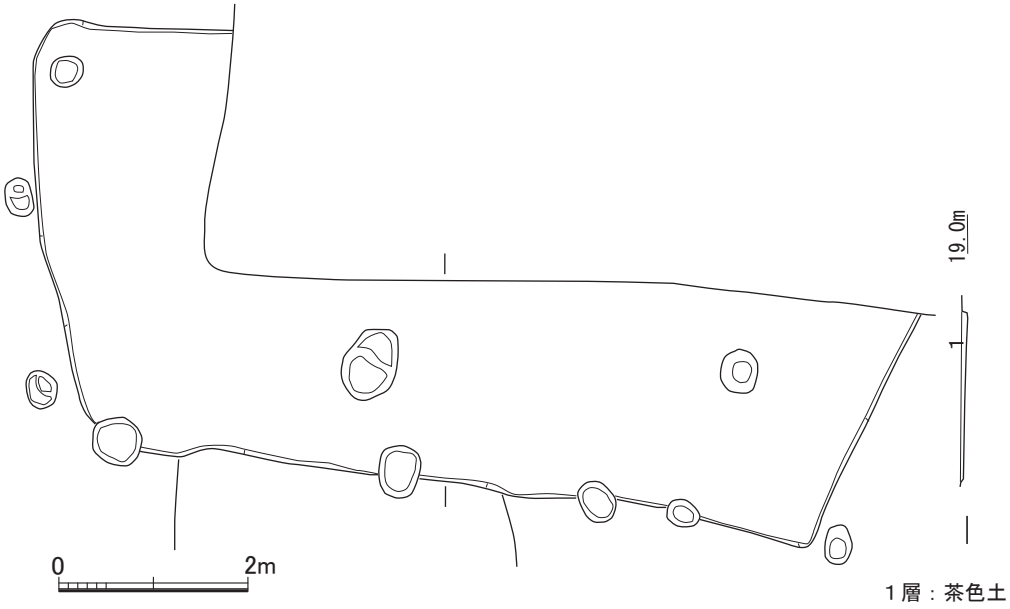
Ⅰ‐4グリッドに位置し、長方形を呈する竪穴住居の可能性がある遺構である。検出面の標高は約19mで、規模は長径7.42m、残存短径3.98m、深さ0.01mである。遺構の切り合い関係はSX56を切り検出した。柱穴は確認できなかった。

SB57竪穴住居(第65図)

Ⅰ‐4･5グリッドに位置し、長方形を呈する竪穴住居の可能性がある遺構である。検出面の標高は約19mで、規模は長径9.46m、短径4.50m、深さ0.04mである。遺構の切り合い関係はSB49に切られて検出した。柱穴は疎らに確認できたが、いずれの柱穴が主柱穴になるかは判断つかなった。



第64図　SB53竪穴住居実測図(S=1/80)



第65図　SB57竪穴住居実測図(S=1/80)

SB70竪穴住居(第66図)

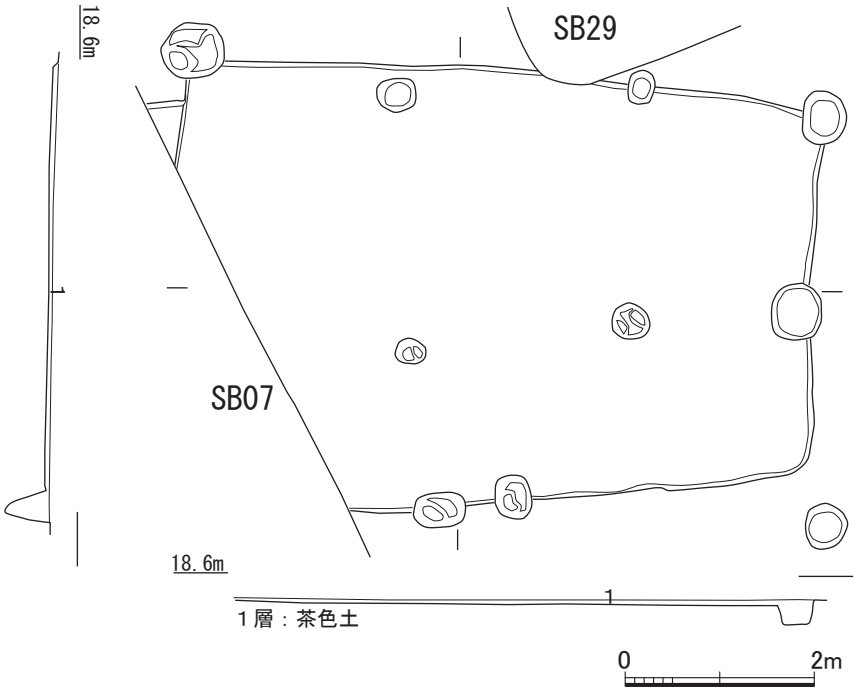
F･G－6グリッドに位置し、長方形を呈する竪穴住居の可能性がある遺構である。検出面の標高は約18.5mで、規模は長径6.90m、短径4.74m、深さ0.04mである。SB31との切り合い関係は不明である。柱穴は疎らに確認できたが、いずれの柱穴が主柱穴になるかは判断つかなった。

SB71竪穴住居(第67図)

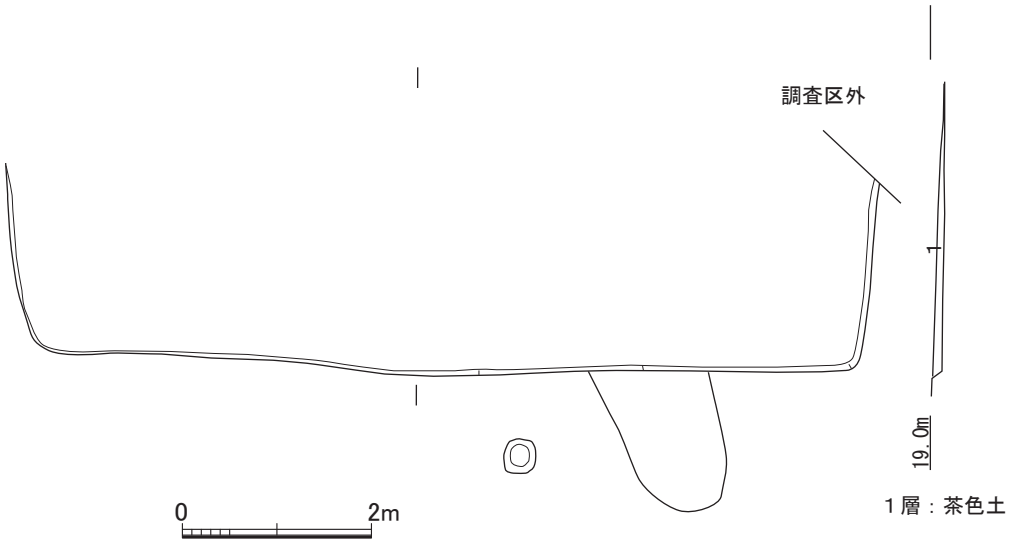
I･J－7グリッドに位置し、長方形を呈する竪穴住居の可能性がある遺構である。検出面の標高は約19mで、規模は長径9.92m、残存短径2.08m、深さ0.09mである。遺構の切り合い関係はSK61を切り検出した。柱穴は確認できなかった。

SB76竪穴住居(第68図)

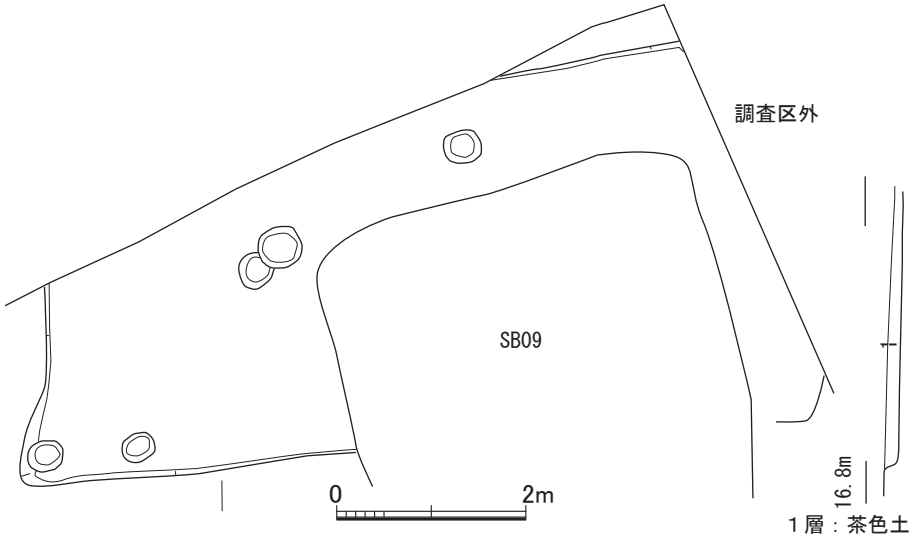
A－6グリッドに位置し、長方形を呈する竪穴住居の可能性がある遺構である。検出面の標高は約16.5mで、規模は長径8.62m、短径4.60m、深さ0.14mである。遺構の切り合い関係はSB09に切られ検出した。柱穴は疎らに確認できたが、いずれの柱穴が主柱穴になるかは判断つかなった。



第66図　SB70竪穴住居実測図(S=1/80)



第67図　SB71竪穴住居実測図(S=1/80)



第68図　SB76竪穴住居実測図(S=1/80)

SB77竪穴住居(第69図)

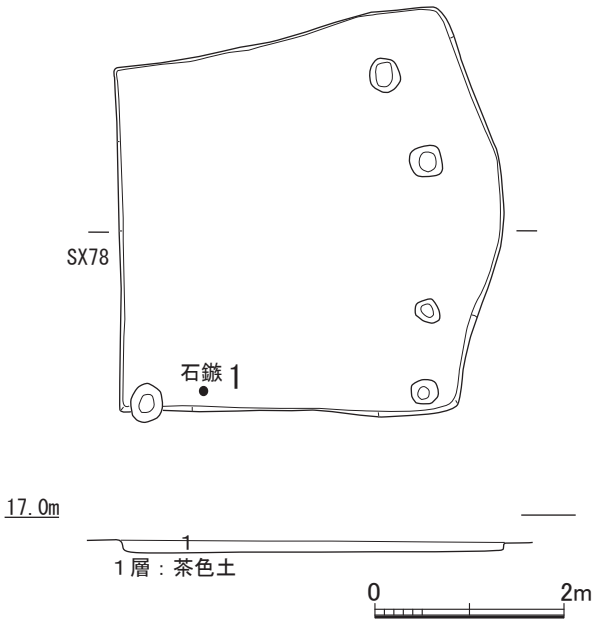
A･B－6グリッドに位置し、長方形を呈する竪穴住居の可能性がある遺構である。検出面の標高は約17mで、規模は長径4.32m、短径4.16m、深さ0.12mである。他遺構との切り合い関係は認められない。柱穴は疎らに確認できたが、いずれの柱穴が主柱穴になるかは判断つかなった。

SB77出土遺物(第70図)

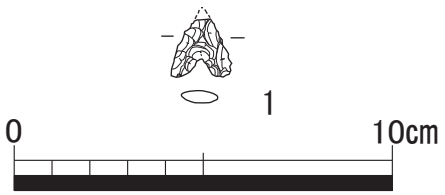
1は黒曜石製の石鏃である。

SB78竪穴住居(第71図)

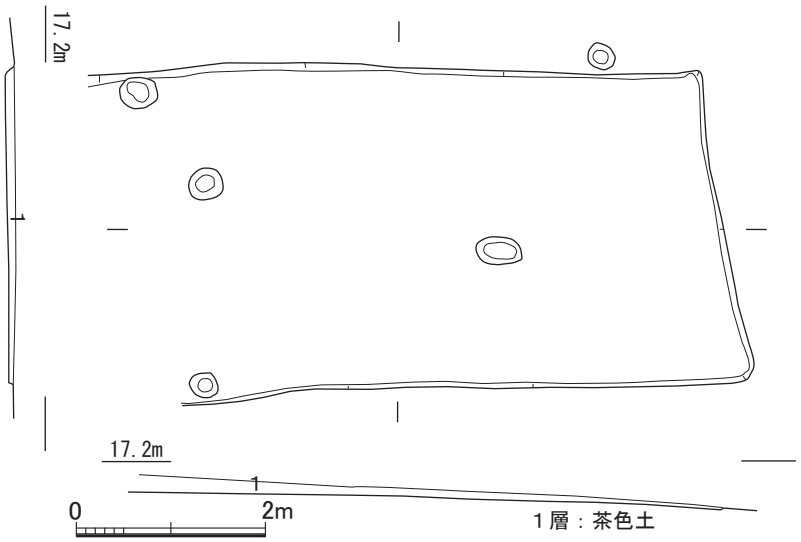
A･B－5･6グリッドに位置し、長方形を呈する竪穴住居の可能性がある遺構である。検出面の標高は約17mで、規模は残存長径6.14m、短径3.46m、深さ0.10mである。他遺構との切り合い関係は認められない。柱穴は疎らに確認できたが、いずれの柱穴が主柱穴になるかは判断つかなった。



第69図　SB77竪穴住居実測図(S=1/80)



第70図　SB77出土遺物実測図(S=1/2)



第71図　SB78竪穴住居実測図(S=1/80)

２　土坑

SK12土坑(第72図)

C－7グリッドに位置し、円形を呈する焼土を含む土坑である。検出面の標高は約17.5mで、規模は長径0.88m、残存短径0.62m、深さ0.14mである。他遺構との切り合い関係は認められない。

遺構からは縄文時代後期後半の小破片が出土した。遺物は少量である。

SK13土坑(第73図)

C－7グリッドに位置し、楕円形を呈する焼土を含む土坑である。検出面の標高は約17.5mで、規模は長径0.96m、短径0.84m、深さ0.18mである。他遺構との切り合い関係は認められない。

遺構からは太郎迫式土器が1点見られ、粗製土器が多い。特殊遺物は注口土器である。石器は磨製石斧・磨石・叩石が出土した。

SK13出土遺物(第74図)

1は縄文時代後期後半の注口土器の注口部である。赤色顔料が付着する。

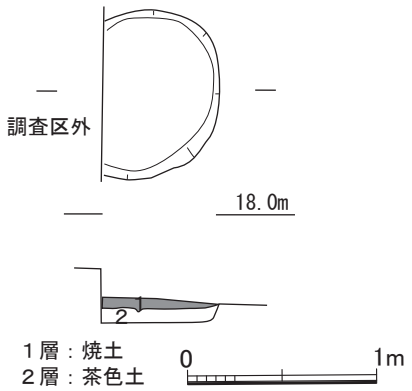
SK14土坑(第75図)

C･D－7グリッドに位置し、楕円形を呈する土坑である。検出面の標高は約18.5mで、規模は長径0.82m、残存短径1.20m、深さ0.20mである。他遺構との切り合い関係は認められない。

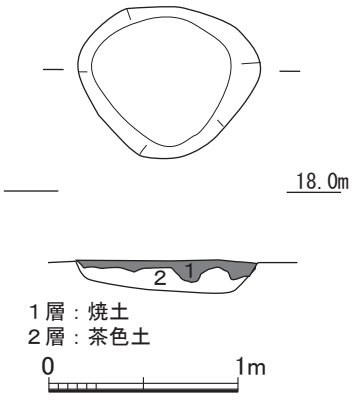
遺構からは太郎迫式土器片が出土した。石器は剥片石器が出土した。

SK15土坑(第76図)

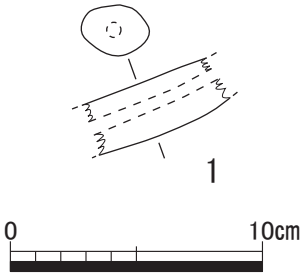
D－5･6グリッドに位置し、楕円形を呈する焼土を含む土坑である。検出面の標高は約18.5mで、規模は長径1.50m、残存短径1.20m、深さ0.32mである。他遺構との切り合い関係は認められない。



第72図　SK12土坑実測図(S=1/40)



第73図　SK13土坑実測図(S=1/40)



第74図　SK13出土遺物実測図(S=1/3)

SK21土坑(第77図)

E－2グリッドに位置し、楕円形を呈する土坑である。検出面の標高は約18mで、規模は長径0.98m、短径0.74m、深さ0.15mである。他遺構との切り合い関係は認められない。遺構からは土版状の線刻土器が出土しており、祭祀として用いられた遺構の可能性がある。

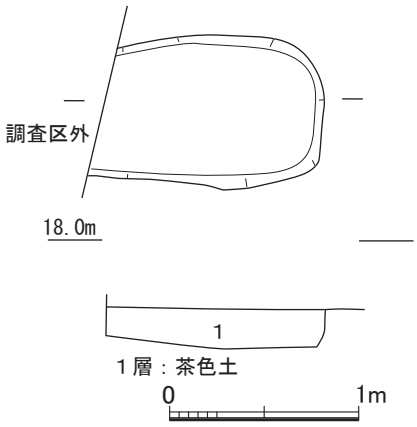
SK21出土遺物(第78図)

1は外面に北久根山式土器か辛川式土器の文様があり、これらの時期の深鉢を転用した土製品である。その後に伝世して用いられていた可能性もある。

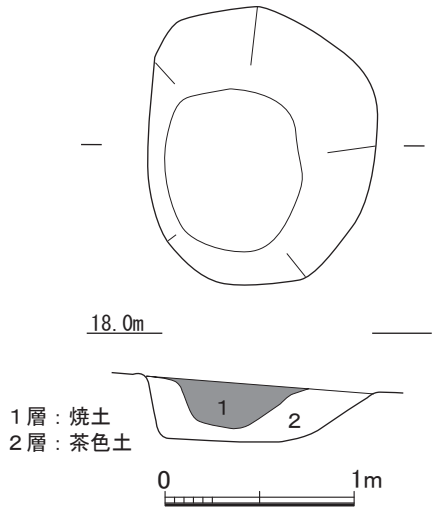
SK30土坑(第79図)

G－6グリッドに位置し、楕円形を呈する土坑である。検出面の標高は約18.5mで、規模は長径0.88m、残存短径0.72m、深さ0.32である。他遺構との切り合い関係は認められない。

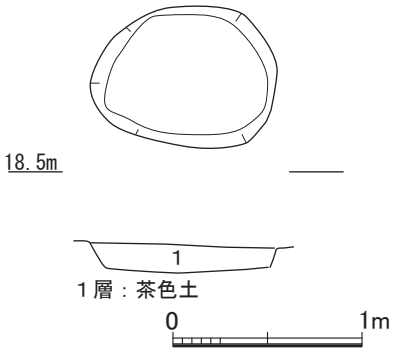
遺構からは縄文時代後期後半の粗製土器が多く出土した。



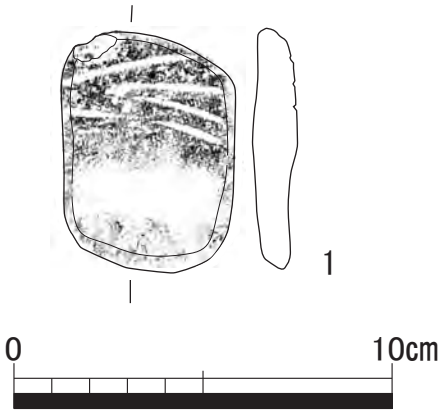
第75図　SK14土坑実測図(S=1/40)



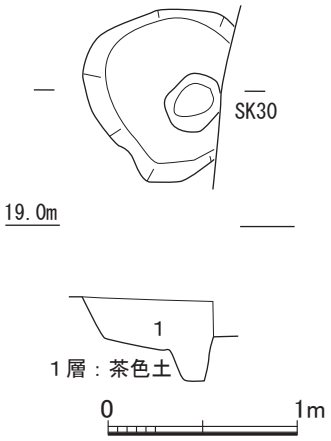
第76図　SK15土坑実測図(S=1/40)



第77図　SK21土坑実測図(S=1/40)



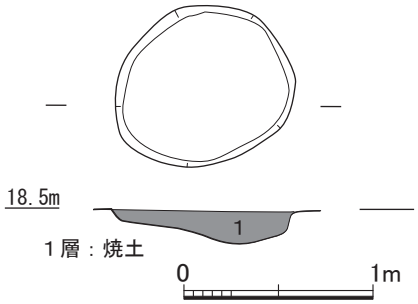
第78図　SK21出土遺物実測図(S=1/2)



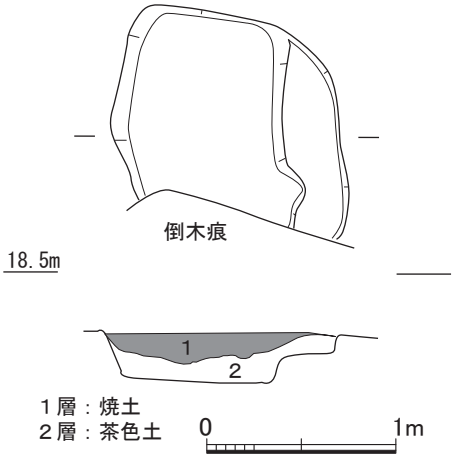
第79図　SK30土坑実測図(S=1/40)

SK33土坑(第80図)

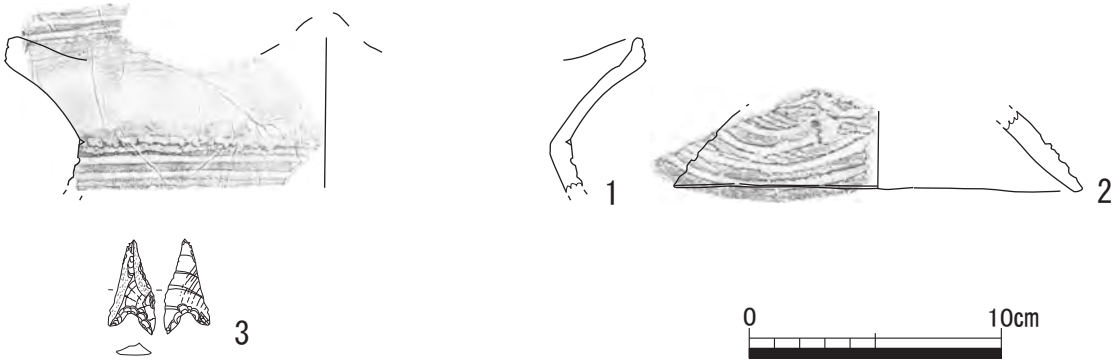
G－5グリッドに位置し、円形を呈する焼土を含む土坑である。検出面の標高は約18.5mで、規模は長径0.96m、短径0.84m、深さ0.16mである。他遺構との切り合い関係は認められない。他の遺構に比べて焼土の残存状況が悪かった。



第80図　SK33土坑実測図(S=1/40)



第81図　SK35土坑実測図(S=1/40)



第82図　SK35出土遺物実測図(S=1/3)

SK35土坑(第81図)

E‐6グリッドに位置し、楕円形を呈する焼土を含む土坑である。検出面の標高は約18mで、規模は長径1.18m、短径1.22m、深さ0.26mである。他遺構との切り合い関係は認められない。

遺構からは太郎迫式土器が出土した。石器は磨石や石鏃が出土した。

SK35出土遺物(第82図)

1は太郎迫式土器の波状口縁の鉢で、口縁部と胴部の外面に沈線文を施し、胴部の外面に刺突列点文を巡らせる。

2は北久根山式～太郎迫式土器の高坏の脚部で、外面に沈線文と縄文を施す。

3は黒曜石の石鏃である。

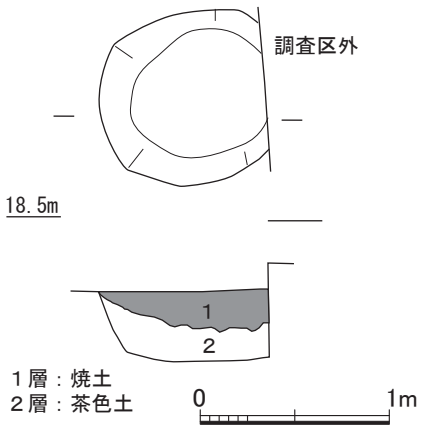
SK36土坑(第83図)

E‐6グリッドに位置し、円形を呈する焼土を含む土坑である。検出面の標高は約18mで、規模は残存長径0.84m、短径0.80m、深さ0.38mである。他遺構との切り合い関係は認められない。

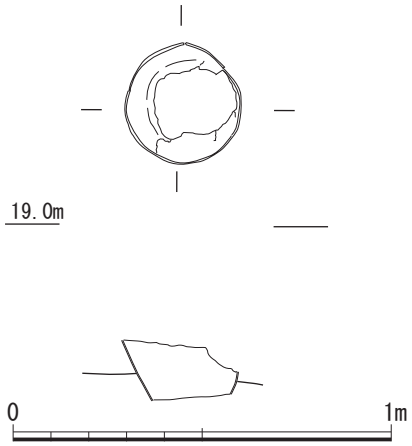
遺構からは縄文時代後期後半の小破片が出土した。

SK37土坑(第84図)

G‐6グリッドに位置し、いわゆる埋甕である。遺構の性格は埋甕か煮炊き用の甕かは判別し難い。検出面の標高は約18.5mで、規模は長径0.32m、短径0.31m、深さ0.06mである。他遺構との切り合い関係は認められない。



第83図　SK36竪穴住居実測図(S=1/40)



第84図　SK37土坑実測図(S=1/20)

SK38土坑(第85図)

D－3グリッドに位置し、楕円形を呈する土坑である。遺構の形状から落とし穴の可能性もある。検出面の標高は約17.5mで、規模は径0.96m、深さ0.55mである。他遺構との切り合い関係は認められない。

SK39土坑(第86図)

F･G－3グリッドに位置し、ほぼ円形を呈する焼土を含む土坑である。検出面の標高は約18.5mで、規模は径1.52m、深さ0.18mである。他遺構との切り合い関係は認められない。

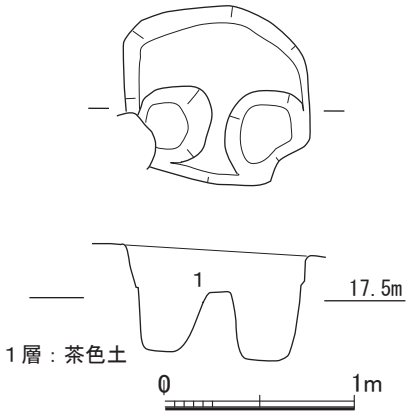
遺構からは縄文時代後期後半の遺物が少量出土した。

SK45土坑(第87図)

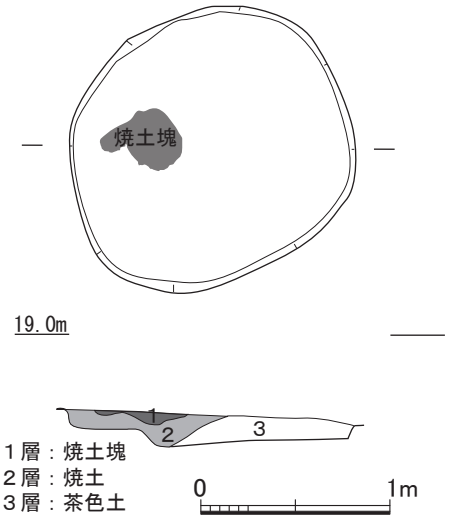
H－5グリッドに位置し、隅丸方形を呈する土坑からいわゆる埋甕を確認した。遺構の性格は甕棺墓である。検出面の標高は約18.5mで、規模は長径1.74m、短径0.31m、深さ0.31mである。SB50との切り合い関係は不明である。埋甕は鳥井原式土器で、胴部と底部の中間付近に握り拳大の円礫が落ち込んで出土した。

SK45出土遺物(第88図)

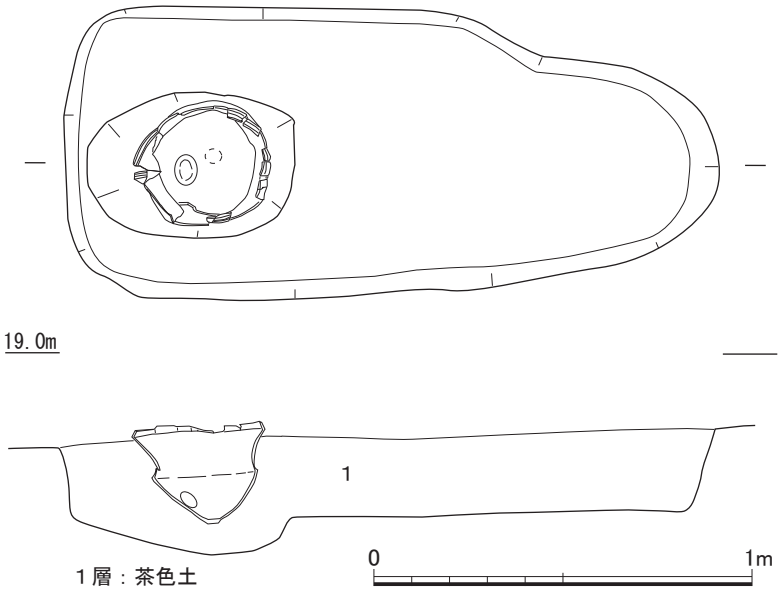
1は鳥井原式土器の大型の鉢で、埋甕として用いられていた。口縁部の外面に凹線を巡らせる。



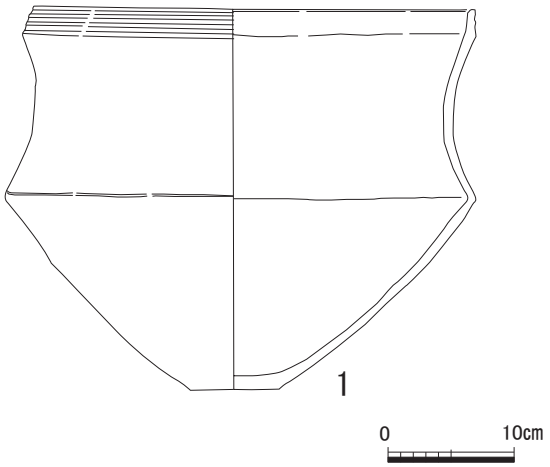
第85図　SK38土坑実測図(S=1/40)



第86図　SK39土坑実測図(S=1/40)



第87図　SK45土坑実測図(S=1/20)



第88図　SK45出土遺物実測図(S=1/6)

SK58土坑(第89図)

J‐7グリッドに位置し、楕円形を呈する焼土を含む土坑である。検出面の標高は約19mで、規模は長径1.60m、短径1.42m、深さ0.14mである。他遺構との切り合い関係は認められない。

遺構からは太郎迫式土器が多く出土した。石器はスクレーパーが出土した。

SK58出土遺物(第90図)

1は三万田式土器の鉢で、沈線文を施す。外面に赤色顔料が付着する。

SK60土坑(第91図)

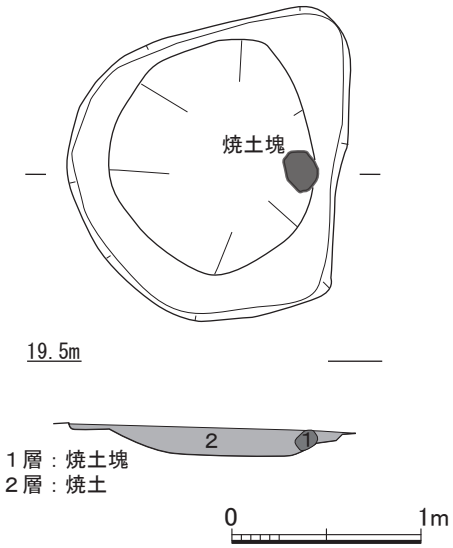
I‐7グリッドに位置し、楕円形を呈する焼土を含む土坑である。検出面の標高は約19mで、規模は長径1.60m、短径1.52m、深さ0.26mである。他遺構との切り合い関係は認められない。

遺構からは縄文時代後期後半の小破片の遺物が出土した。

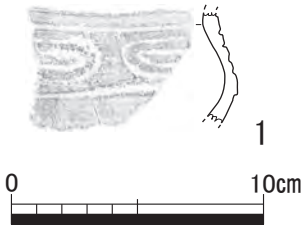
SK61土坑(第92図)

J‐7グリッドに位置し、楕円形を呈する焼土を含む土坑である。検出面の標高は約19mで、規模は残存長径1.52m、短径1.18m、深さ0.04mである。遺構の切り合い関係はSB71に切られ検出した。

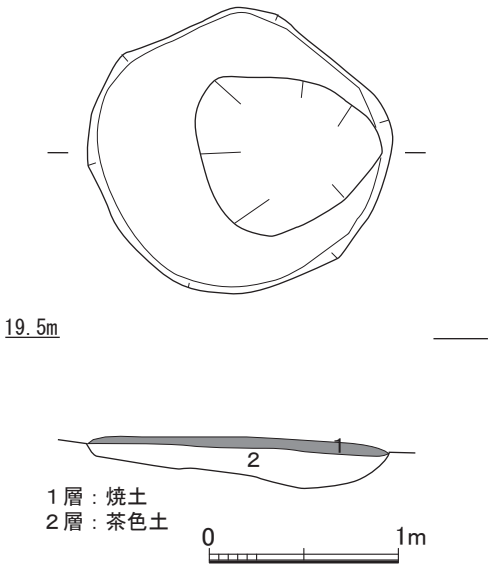
遺構からは縄文時代後期後半の小破片の遺物が出土した。



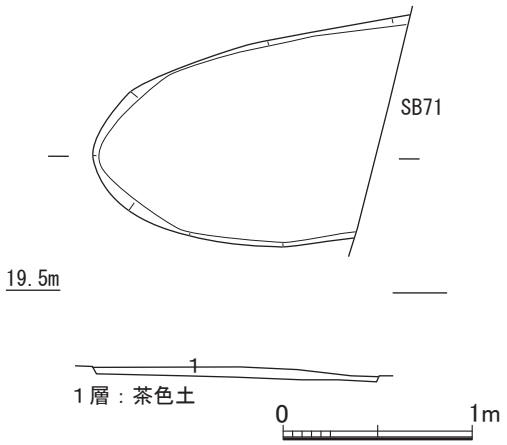
第89図　SK58土坑実測図(S=1/40)



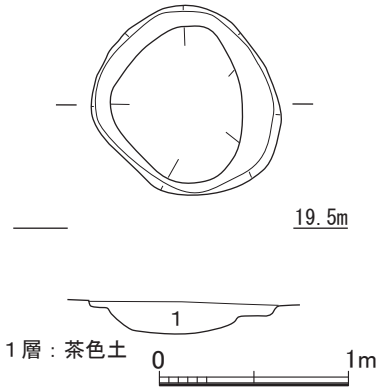
第90図　SK58出土遺物実測図(S=1/3)



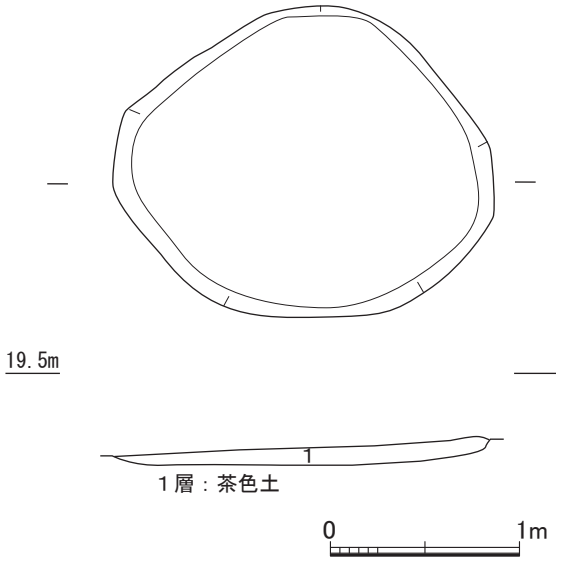
第91図　SK60土坑実測図(S=1/40)



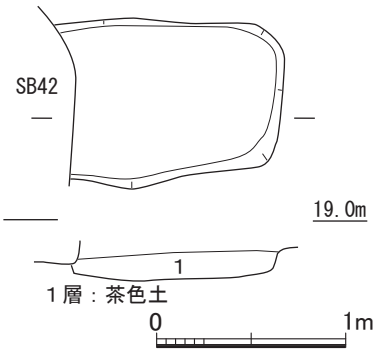
第92図　SK61土坑実測図(S=1/40)



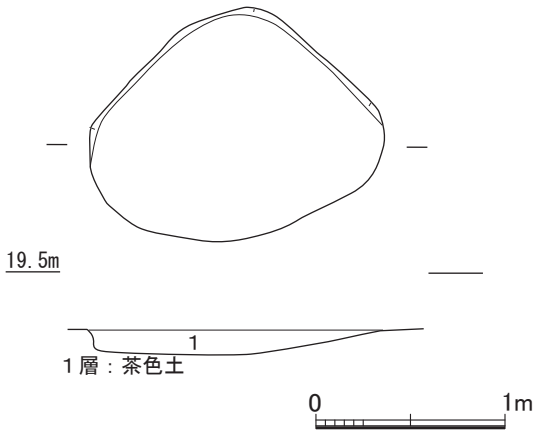
第94図　SK63土坑実測図(S=1/40)



第93図　SK62土坑実測図(S=1/40)



第95図　SK65土坑実測図(S=1/40)



第96図　SK66土坑実測図(S=1/40)

SK62土坑(第93図)

J‐7グリッドに位置し、楕円形を呈する土坑である。検出面の標高は約19mで、規模は長径2.00m、短径1.70m、深さ0.10mである。他遺構との切り合い関係は認められない。

遺構からは太郎迫式土器が少量出土した。

SK63土坑(第94図)

J‐7グリッドに位置し、楕円形を呈する土坑である。検出面の標高は約19mで、規模は径1.00m、深さ0.18mである。他遺構との切り合い関係は認められない。

遺構からは縄文時代後期後半の小破片の遺物が出土した。

SK65土坑(第95図)

H‐4グリッドに位置し、隅丸方形を呈する土坑である。検出面の標高は約19mで、規模は残存長径1.12m、短径0.90mである。遺構の切り合い関係はSK45に切られる。

遺構からは太郎迫式土器が出土した。

SK66土坑(第96図)

J‐4グリッドに位置し、楕円形を呈する土坑である。検出面の標高は約19mで、規模は長径1.54m、短径1.24m、深さ0.12mである。他遺構との切り合い関係は認められない。

遺構からは小破片の太郎迫式土器が僅かに確認できた。

SK74土坑(第97図)

B‐5グリッドに位置し、楕円形を呈する土坑である。検出面の標高は約18mで、規模は長径1.20m、短径0.54m、深さ0.22mである。他遺構との切り合い関係は認められない。

遺構からは縄文時代後期後半の小破片の遺物が出土した。

SK79土坑(第98図)

楕円形を呈する土坑である。検出面の標高は約17mで、規模は長径1.86m、短径1.22m、深さ0.04mである。他遺構との切り合い関係は認められない。

SK80土坑(第99図)

I･J‐7グリッドに位置し、楕円形を呈する土坑内にいわゆる埋甕を確認した。遺構の性格は甕棺墓である。検出面の標高は約19mで、規模は長径1.10m、短径1.08m、深さ0.57mである。SX71に切られている。

SK80出土遺物(第100図)

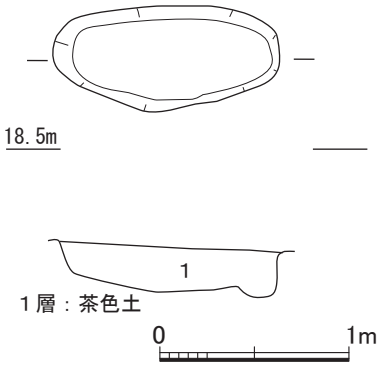
１は三万田式土器か鳥井原式土器の大型の深鉢で、埋甕として用いられていた。内外面は条痕調整を文様としてのこした粗製条痕文土器である。

SK81土坑(第101図)

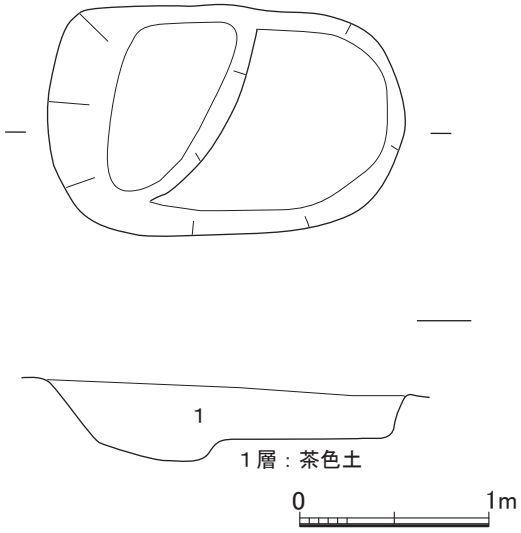
H－11グリッドに位置し、楕円形を呈する土坑内にいわゆる埋甕を確認した。遺構の性格は甕棺墓である。検出面の標高は約17.5mで、規模は長径1.08m、短径0.99m、深さ0.38mである。他遺構との切り合い関係は認められない。

SK81出土遺物(第102図)

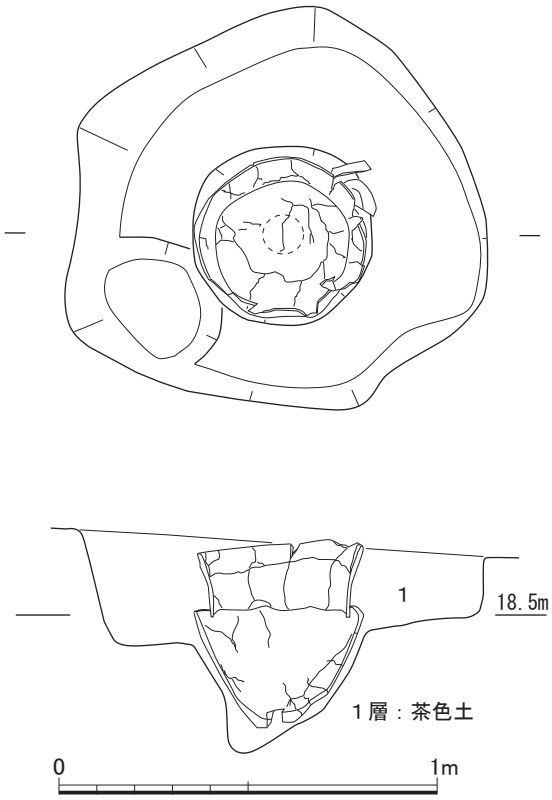
1は鳥井原式土器の精製の大型の深鉢で、埋甕として用いた。口縁部と胴部の外面に凹線文を巡らせる。



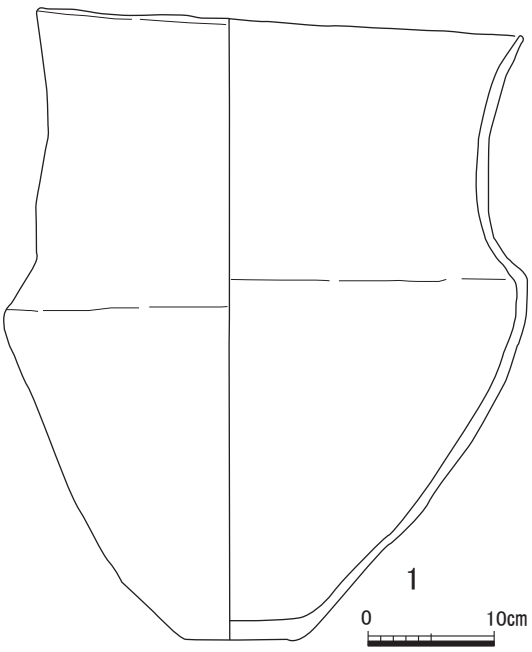
第97図　SK74土坑実測図(S=1/40)



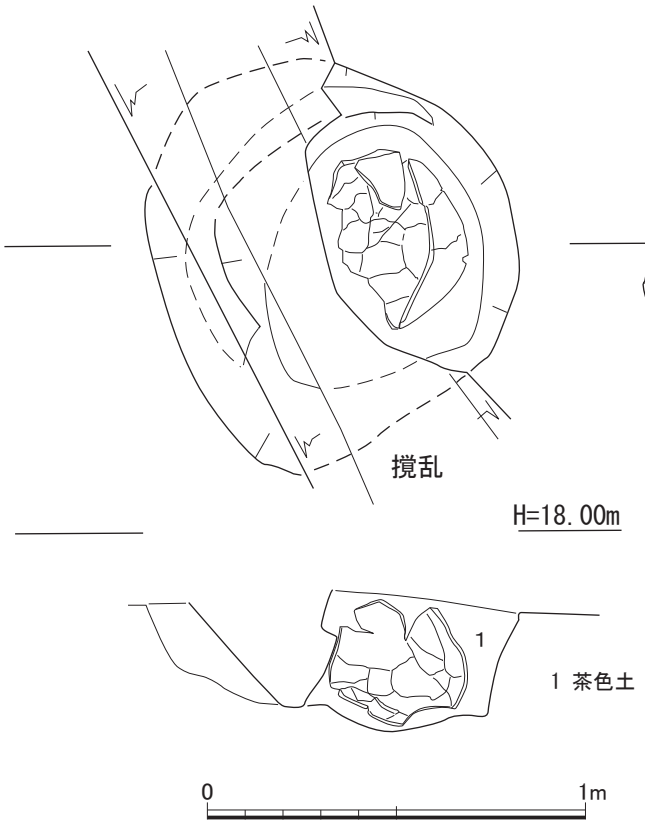
第98図　SK79土坑実測図(S=1/40)



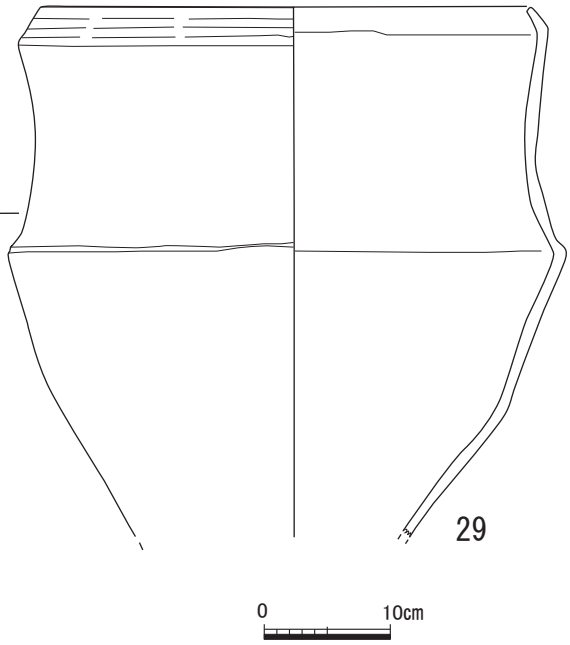
第99図　SK80土坑実測図(S=1/20)



第100図　SK80出土遺物実測図(S=1/6)



第101図　SK81土坑実測図(S=1/20)



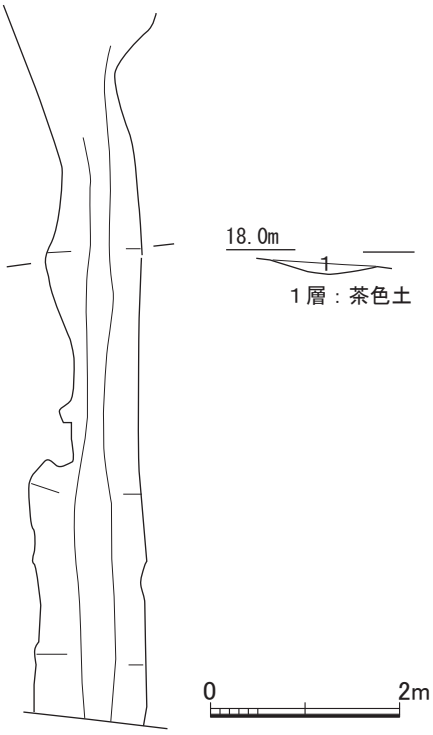
第102図　SK81出土遺物実測図(S=1/6)

３　溝

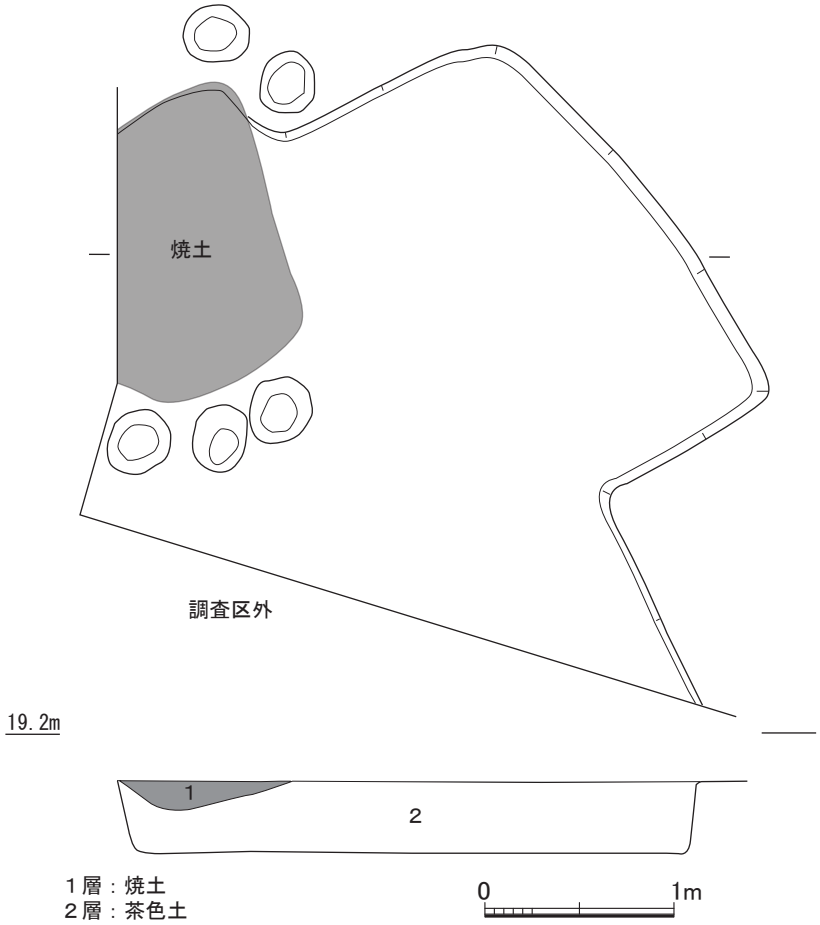
SD01溝(第103図)

C～E－5～9グリッドに位置し、直線的に確認できた溝で、長さ約19m、幅1.2m、深さ0.38～0.10mである。他遺構との切り合い関係は認められず、SB07とSB11の間を走り調査区南東隅の土器黙り付近で途切れる。

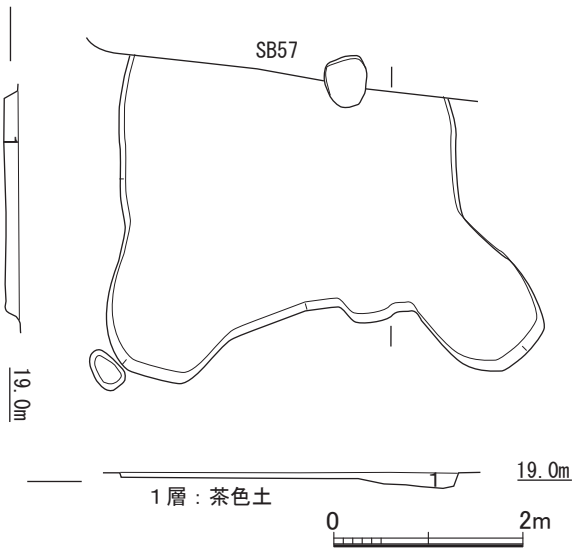
集落の排水等の用途がある溝の可能性がある。



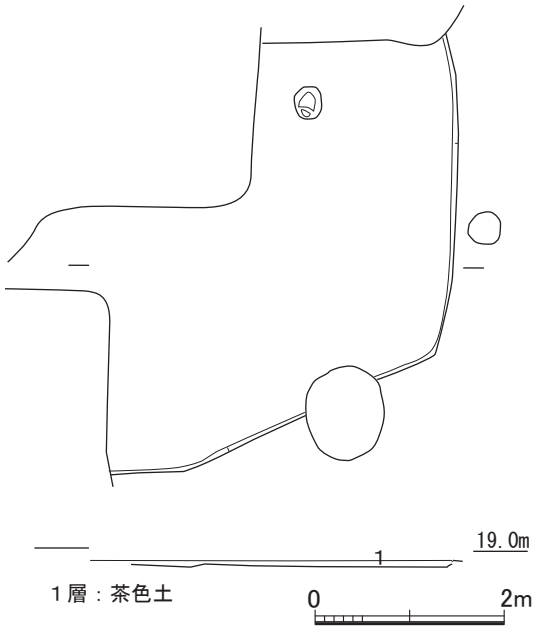
第103図　SD01溝実測図(S=1/80)



第104図　SX40不明遺構実測図(S=1/40)



第105図　SX56不明遺構実測図(S=1/80)



第106図　SX59不明遺構実測図(S=1/80)

４　不明遺構

SX40不明遺構(第104図)

H･I－3グリッドに位置し、不定形を呈する不明遺構である。検出面の標高は約19mで、規模は長径4.22m、残存短径3.44m、深さ0.38mである。他遺構との切り合い関係は認められない。遺構は焼土を大量に含んでおり、その周囲を柱穴が囲んでいた。何らかの施設の可能性がある。

SX56不明遺構(第105図)

I･J－4グリッドに位置し、不定形を呈する不明遺構である。検出面の標高は約19mで、規模は長径4.58m、残存短径3.42m、深さ0.16mである。遺構の切り合い関係はSB57に切られる。

SX59不明遺構(第106図)

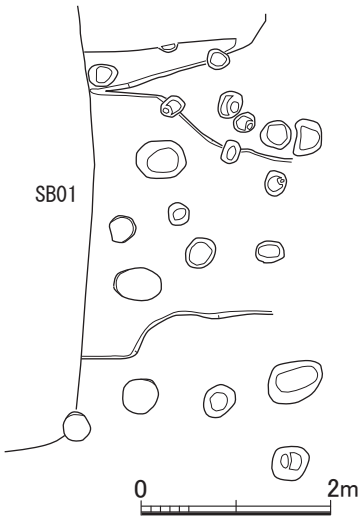
H･I－4･5グリッドに位置し、不定形を呈する不明遺構である。検出面の標高は約19mで、規模は残存長径4.74m、残存短径4.60m、深さ0.04mである。遺構の切り合い関係は周辺の遺構に切られる。

SX72不明遺構(第107図)

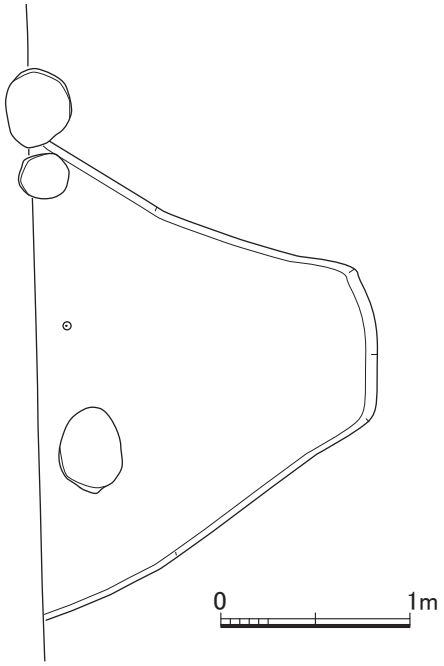
B･C－7グリッドに位置し、不定形を呈しSX01に付帯する出入口施設の可能性がある遺構である。検出面の標高は約17.5mで、規模は長径2.80、残存短径2.14mである。

SX73不明遺構(第108図)

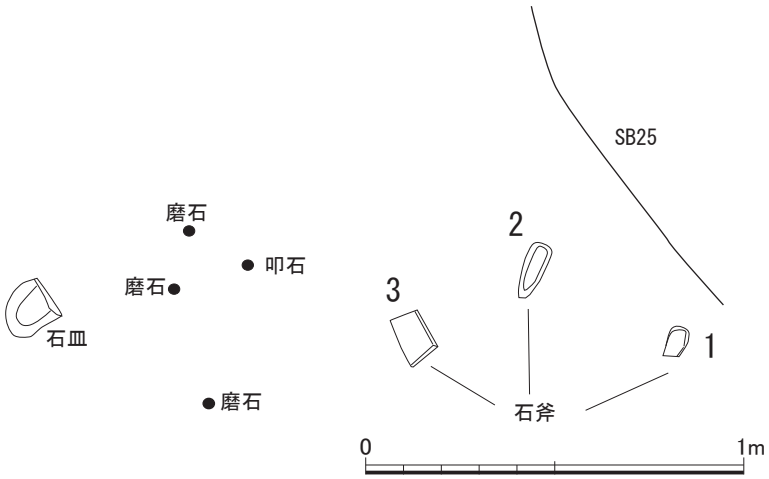
C－7グリッドに位置し、不定形を呈するSX01に隣接する遺構である。検出面の標高は約17.5mで、規模は長径2.50m、短径1.80mである。



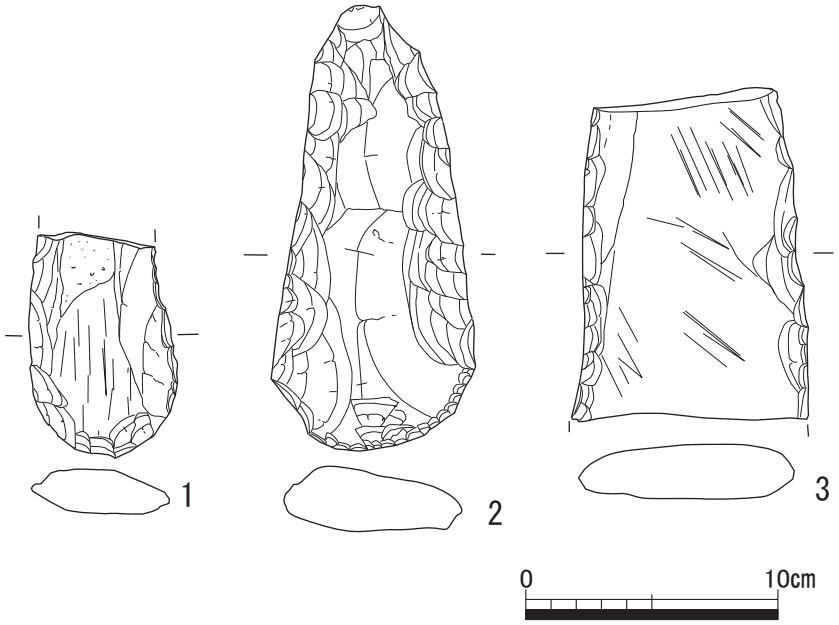
第107図　SX72不明遺構実測図(S=1/80)



第108図　SX73不明遺構実測図(S=1/40)



第109図　SX75不明遺構実測図(S=1/80)



第110図　SX75出土遺物実測図(S=1/3)

SX75不明遺構(第109図)

F‐5グリッドに位置し、長軸約1.8m、短軸1.2mの範囲で確認できた石器が集中する遺構である。

SX75出土遺物(第110図)

1～3は安山岩製の打製石斧である。2のみ欠損がない。

5　土器溜り

土器溜り(第5図)

調査区の南東隅一帯のD～I-7～11グリッドに広がる巨大な土器溜りである。この付近は確認できた範囲は約40m×30mで調査区外へ広がる。この範囲に出土する遺物は膨大な量の土器・石器が検出でき、竪穴住居で完形で出土する石皿や台石が一方で破損して無造作に出土した。その他の遺物の同様で、この様な状況から考えられるのが集落の内側に位置する巨大な共同で使用していた廃棄土坑と考えられる。

６　包含層

包含層

調査区全体的に遺構検出面より上層で出土した遺物である。調査区内は現代の撹乱（トレンチャー）及びそれ以前の時代の削平により、遺構検出より上層に持ち上がったものだと考えられる。

包含層出土遺物（第111～114図）

①深鉢・鉢・浅鉢形土器

3・4は縄文時代後期中葉の北久根山式土器の深鉢の口縁部で、貼付文が付く。2はその後に転用されて使用されることにより全体が磨耗していった何らかの工具の可能性がある。

1～16・20は縄文時代後期後半の太郎迫式・三万田式・鳥井原式土器の鉢か浅鉢である。

1・5～8は太郎迫式土器である。1は鉢で、波状口縁部の波頂部の外面に字状の刻目を入れる。口縁部と胴部の外面に沈線文と縄文を施す。胴部の外面には刺突列点文を巡らせ、Ｘ字文を施す。5は鉢で、波状口縁部の波頂部の外面に沈線文を施して、ノ字状の貼付文が付く。6は鉢で、胴部の外面に沈線文と縄文を施す。また、羽状文を施す。7は鉢で、胴部には刺突列点文を巡らせ、胴部の外面に沈線文と縄文、Ｘ字文を施す。8は鉢で、胴部の外面には刺突列点文を巡らせ、沈線文と縄文を施す。また、Ｘ字文を施す。

2・10～14・16・20は三万田式土器である。2は波状口縁の鉢で、口縁部と胴部の外面に沈線文を施す。10は浅鉢で、口縁部に沈線文と細線文を施す。補修孔が見られる。11は浅鉢で、口縁部に沈線文と羽状文を施す。外面に赤色顔料が付着する。12は浅鉢で、外面はナデ調整による無文土器である。13は鉢か浅鉢で、波状口縁の波頂部に穿孔を入れて、内外面に沈線文を施す。14は特殊な浅鉢で、胴部の屈曲部の外面に突帯が付く。外面に沈線文と細線文を施す。16は底部で、外面に沈線文を施す。20は底部で、外面に沈線文が格子状に施す数少ない資料である。69は三万田式土器の精製のやや大型の深鉢で、胴部に僅かに沈線が巡る。

15は鳥井原式土器の底部で、凹線文を施す。

9は縄文時代後期後半の深鉢で、口縁部の内外面はケズリ調整による条痕文である。補修孔が見られる。

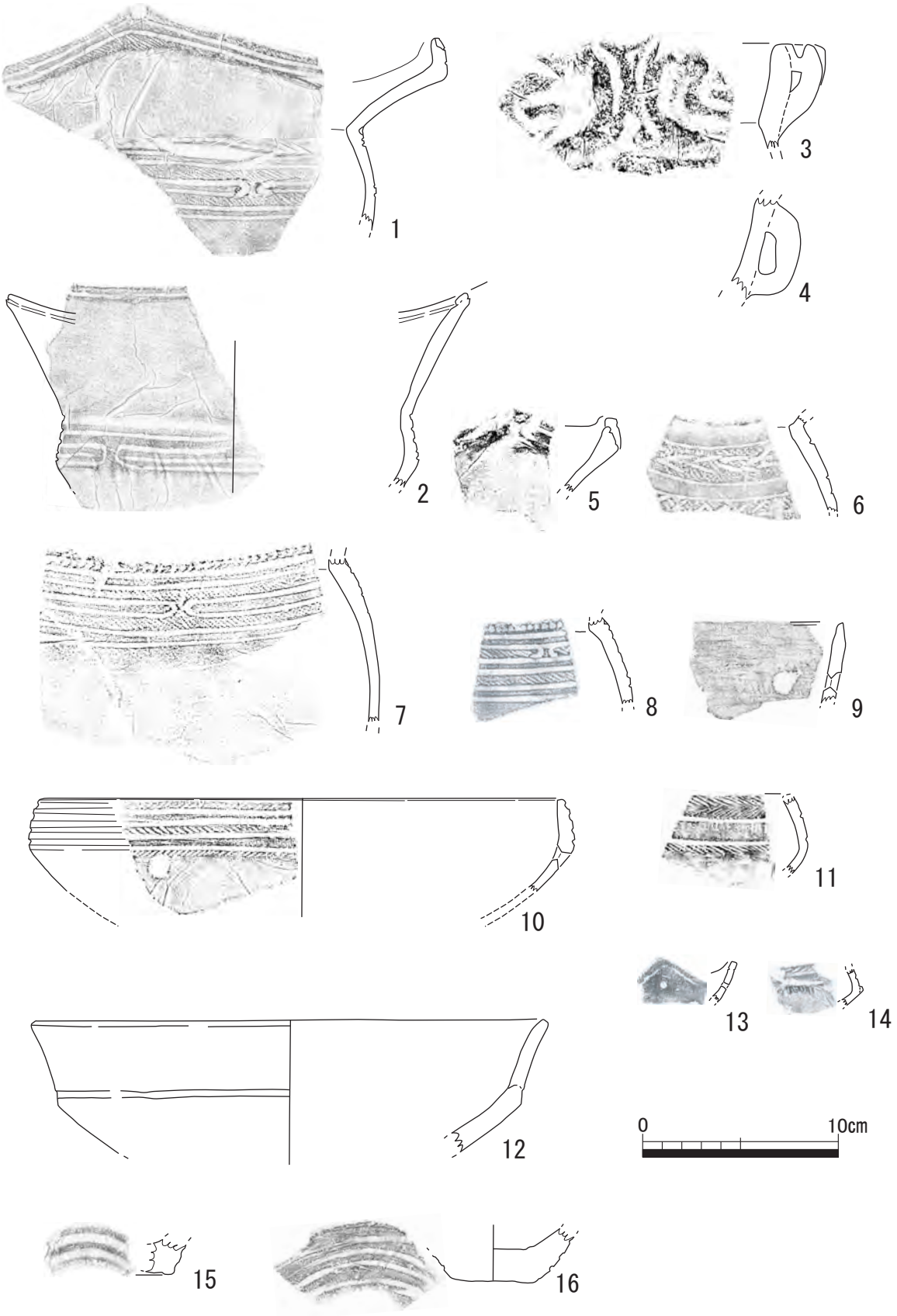
②特殊土器

17・18・21～28・32は高坏・筒形土器・注口土器・舟形土器・異形土器といった特殊土器である。

17・22・23は高坏である。17は三万田式土器で、口縁部の外面に沈線文を巡らせて、3条の弧状を5箇所施す。22は縄文時代後期後半器で、脚部である。23は脚部で、凹線文を施すことから、鳥井原式土器と考えられる。透かしを有する。

21は内部が筒状になっている、筒形土器である。外面に沈線文を施す三万田式土器である。

24～28は注口土器の注口部である。24は三万田式土器で、外面に沈線文と細線文を施す。25・28は三万田式土器で、外面に細線文を施す。26・27は縄文時代後期後半器で、注口部の外面はナデ調整する無文である。



第111図　包含層出土遺物実測図(S=1/3)

18は舟形土器で、波状口縁部の外面に沈線文・羽状文・凹点文といった装飾性が豊かな土器である。

32は異形土器の脚部である。細線による沈線文を施すことから三万田式土器と考えられる。表面はミガキを施し、赤色顔料が付着する。

③土製品

19・29～31はＸ字形土製品・土偶の土製品である。

19はＸ字形土製品である。

29～31は土偶である。

29は頭部である。表裏面に貝殻刺突による擬似縄文を施すことから太郎迫式土器の可能性がある。裏面には沈線を施し、表面には刺突文を3点施す。この刺突文は目・口・鼻の何れかを表現している可能性がある。

30は縄文時代後期後半に首・胸・腹部、腕・頭部の一部である。表面は胸と腹部は剥落し、頭部・脚部の付け根は一部残り、腕部が欠損している。

31は分銅形土偶の脚部で、沈線による文様を描く。ミガキによる調整で、表面に赤色顔料が見られる。70は人形土偶で頭部・腕部・脚部・乳房や腹部膨らみが欠損している。ナデによる丁寧なつくりである。

④石器

33～37は片岩製のＸ字形石器である。

38は安山岩製のスクレーパーである。縁辺部を加工して刃部を作り出す。

39～42は石斧である。39・42は蛇紋岩製で、40は安山岩製の磨製石斧である。表面は丁寧に研磨する。40・42は研磨により弧状に刃部を作り出す。41は砂岩製の打製石斧である。

43は石英を用いた磨石である。擦痕が確認できる。

50～52は腰岳産黒曜石製の石鏃である。53～55は安山岩製の石鏃である。56・57は姫島産黒曜石製の石鏃である。58・59・62は安山岩製のスクレーパーである。63は安山岩製の石匙である。64は安山製のナイフ形石器である。

⑤その他の遺物

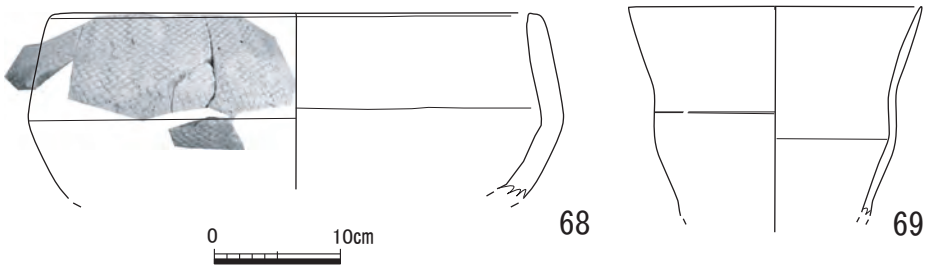
45・46は縄文時代晩期～弥生時代早期の突帯文土器である。68は組織痕土器である。内面に指圧痕や粘土帯が見られる。

47・48は弥生時代早期の突帯文の板付式土器である

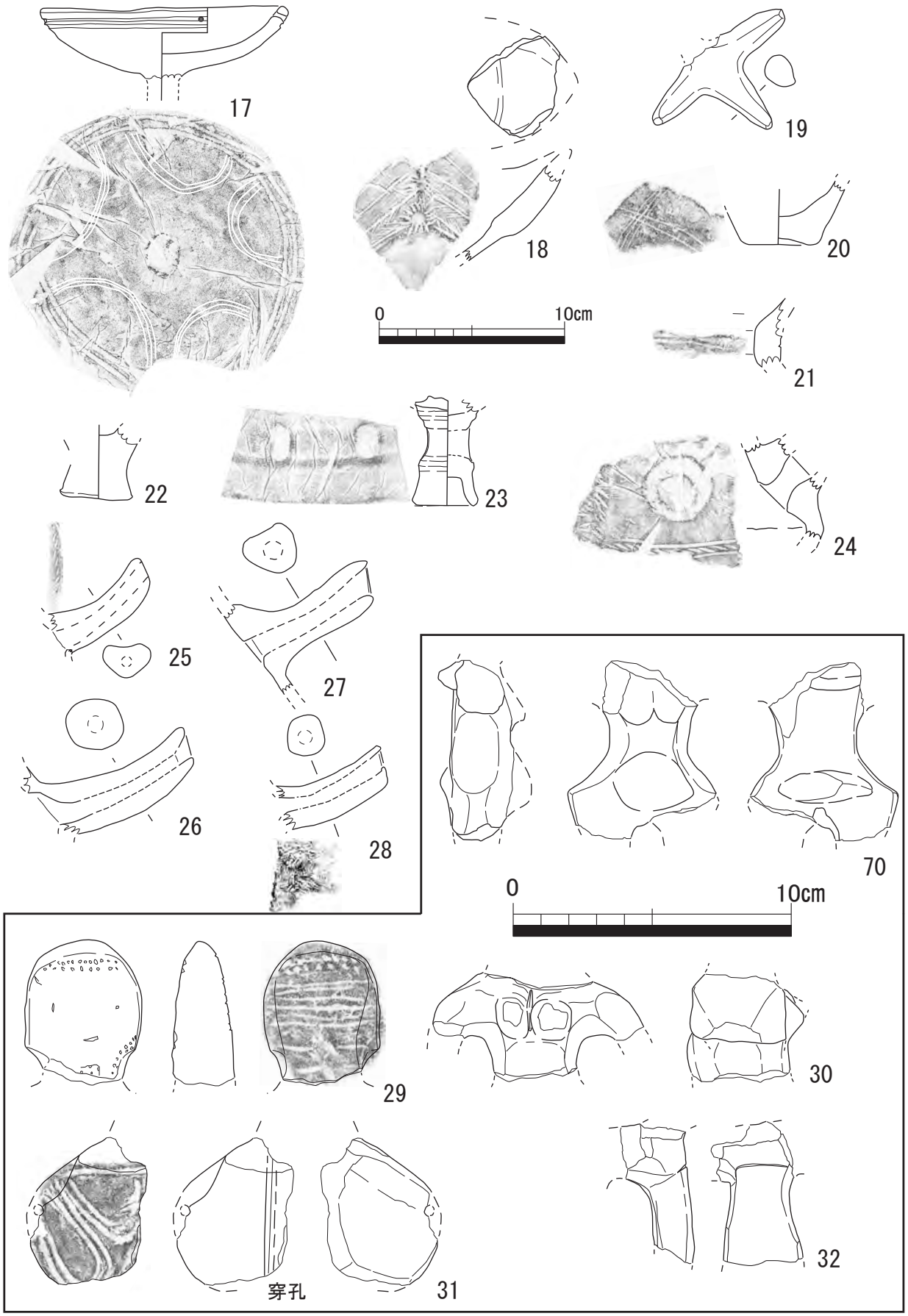
49は弥生時代中期の須玖式土器である。

60・61は古墳時代の須恵器の蓋である。

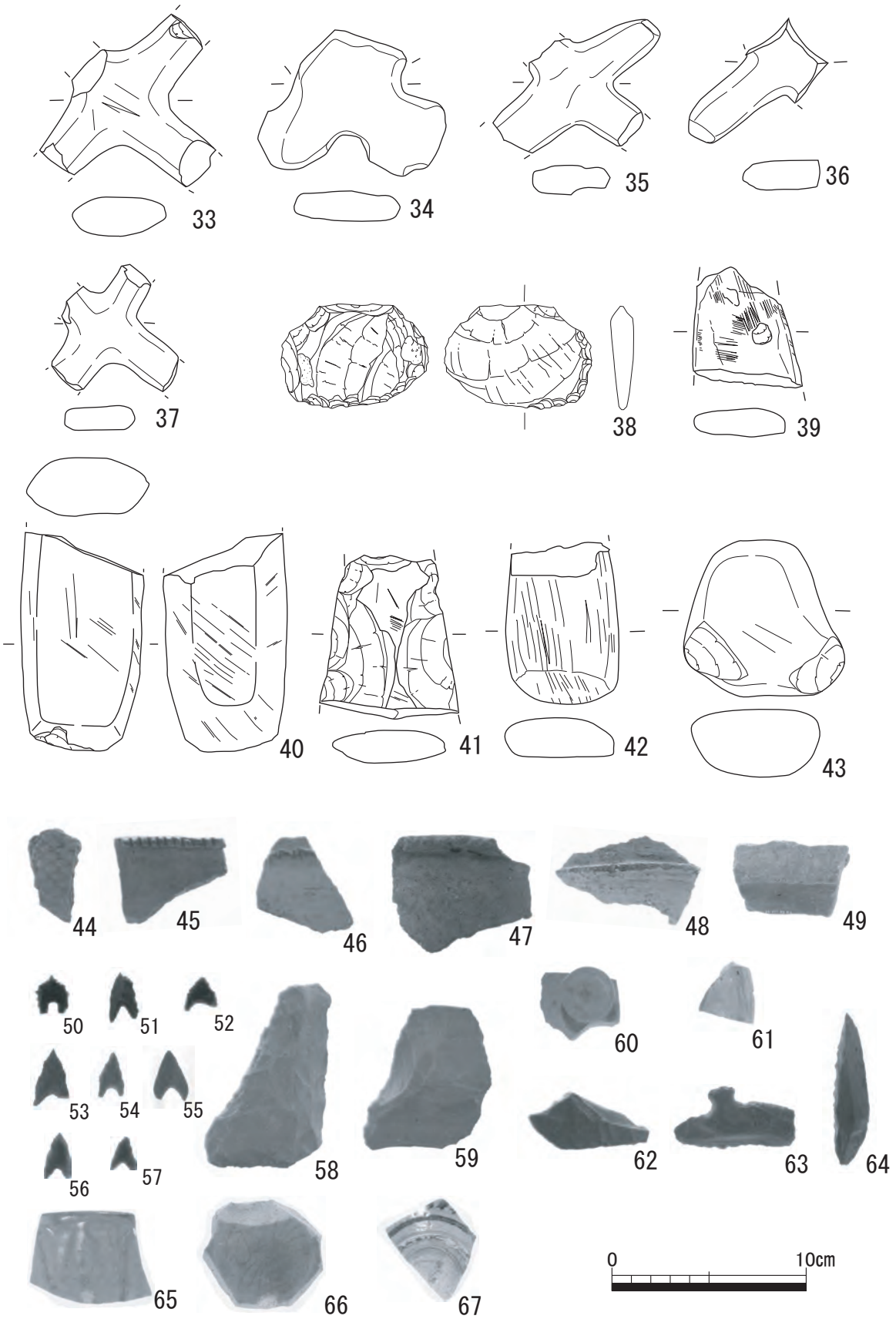
65・66は龍泉窯系の青磁碗である。67は漳州窯系の碗で、16世紀後半の遺物である。



第112図　包含層出土遺物実測図(S=1/6)



第113図　包含層出土遺物実測図(S=1/3・1/2)



第114図　包含層出土遺物実測図(S=1/3)

Ⅳ　総括

本調査では主に縄文時代後期中葉から後半にかけての遺構を検出し、出土した遺物はコンテナ約300箱であった。その他、中世や弥生時代中期、縄文時代晩期から弥生時代早期の遺物も出土した。

また、その上の層からは中世の包含層が確認できた。

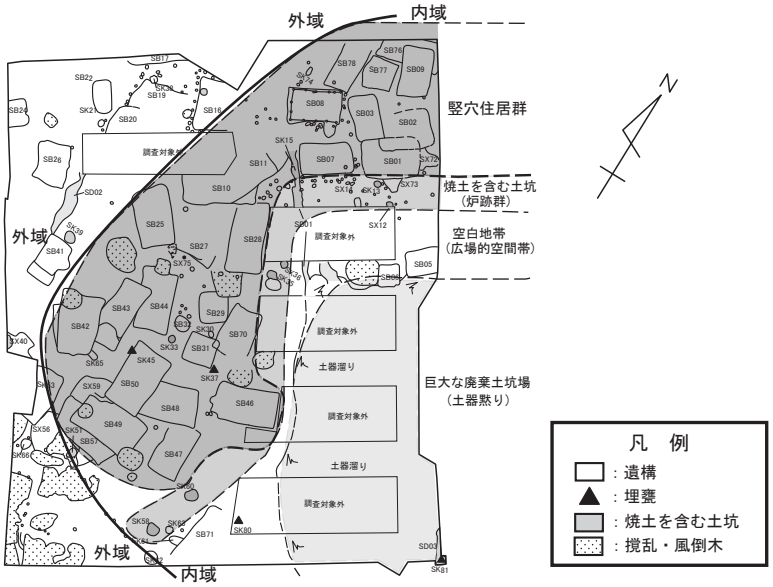
1　小原下遺跡の集落構造

調査で確認できた縄文時代の遺構は竪穴住居が39軒、土坑が24基、溝が3条、巨大な廃棄土坑と考えられる土器溜りが1箇所、その他の性格不明遺構が6基であった。縄文時代後期の遺構検出面より上層の縄文時代包含層からは縄文時代中葉から後期後半の遺物を主に含み、縄文時代晩期から弥生時代早期の遺物、弥生時代中期の遺物が僅かに確認できた。

検出できた遺構の配置は調査区の中央で南北方向に弧状(三日月状・半環状)を呈して竪穴住居が集中し、その弧状の住居の内側(調査区東側)に近接して焼土を多く含む土坑が出土した。その弧状の住居の内側には埋甕が2基出土した。さらに内側には、大量の土器黙りの巨大な廃棄土坑が出土した。竪穴住居群及び焼土を含む土坑と巨大な廃棄土坑との間には、ほぼ遺構が確認できない約10m前後の空白地帯が見られる。SD01は巨大な廃棄土坑場及び住居群の排水溝の可能性がある。一方、弧状に群がる竪穴住居群の外側には竪穴住居が疎らに点在し、何らかの施設と考えられるSX40が出土した。また、風倒木や撹乱が目立ち、竪穴住居群周辺の硬目の地山に比べて検出状況も締りのない地山であった。

つまり、調査区内の小原下遺跡の集落は竪穴住居群を境に大きく内域と外域に区分できる。内域は居住空間で、弧状(三日月状・半環状)を呈する竪穴住居群の内側に向かって順に、炉跡と考えられる焼土を含む土坑、作業や集会等を広場として利用していたことも考えられる空白地帯、巨大な廃棄土坑場によって構成している。外域は遺構のまとまりがなく、何らかの施設と考えられるSX40が見られることから、居住空間より別の生業に伴う空間の可能性がある。先述した様に、竪穴住居群周辺の硬目の地山に比べて検出状況も締りのない地山であった。当該期は水稲耕作開始の前段階の焼畑などの農耕を行う時期であり、外域は何らかの生業を営む空間の可能性がある。小原下遺跡の集落の空間構造は今回の調査では居住空間の一部しか確認しておらず、周囲には墓域や生業場が展開していた可能性が高い。

長崎県内における縄文時代の竪穴住居が確認された遺跡は当遺跡を含めて6遺



第115図　小原下遺跡遺構配置図(S=1/1,000)

第116図　九州北半における縄文後期後半の拠点集落

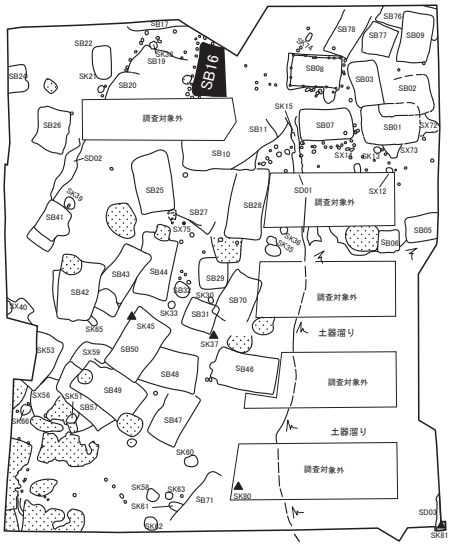
跡ある。その内、縄文時代後期の竪穴住居が出土した遺跡は当遺跡と筏遺跡（雲仙市）の2遺跡のみである。当遺跡と距離的に近い大野原遺跡では多量の遺物と土器製作場とされる遺構が出土しているものの、住居が確認できていない。この様に、県下において竪穴住居が5軒以上検出された遺跡は小原下遺跡が初見で、集落構造を掴める良好な遺跡である。

また、西北九州（佐賀県）・西九州（長崎県）においても、豊富な遺物量と数十軒で構成する集落は小原下遺跡のみである。しかし、佐賀県の蔵上遺跡は竪穴住居が10軒のみだが、38基にのぼる埋甕の検出と、当遺跡と同様に特殊遺物を豊富に出土しており、この様な当該期の遺跡と比較しても質・量ともに突出した両遺跡は西北九州・西九州における拠点集落と言えよう。

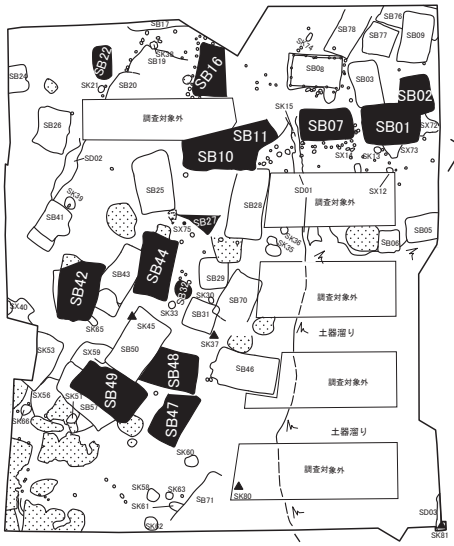
2　小原下遺跡の竪穴住居の構造と変遷

小原遺跡の遺構の検出は遺構上部が一律に削平を受けているため、遺構の検出が困難であった。そのため、今回報告した竪穴住居39軒の内、竪穴住居と特定できるものが19軒で、検出の困難さから竪穴住居と特定にまでいたらず可能性に留めるものが20軒であった。

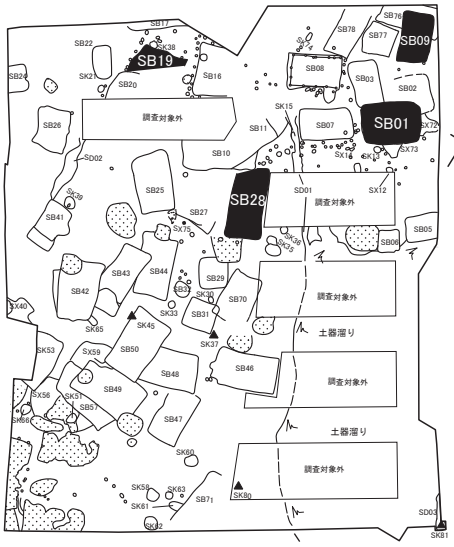
竪穴住居の時期は縄文時代後期後半の西平式土器～鳥井原式土器であった。最も古い竪穴住居は西平式土器が出土したSB16である。次に後続する時期の太郎迫式土器が出土した竪穴住居はSB01・02・07・10・11・16・22・27・32・42・44・47～49である。さらに後続



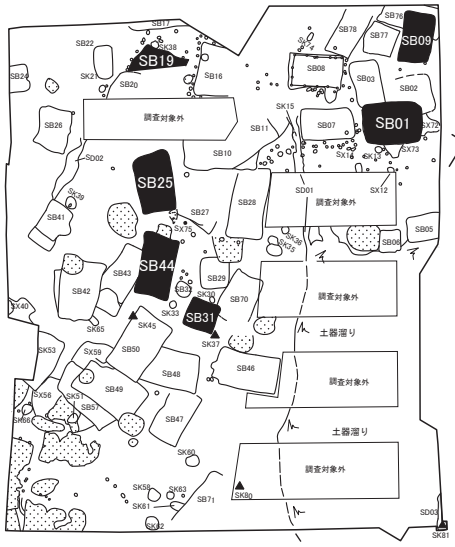
西平式土器出土竪穴住居



太郎迫式土器出土竪穴住居



三万田式土器出土竪穴住居



鳥井原式土器出土竪穴住居

【凡　例】

黒塗は当該期の竪穴住居である。黒塗は時期が判明したもので、時期が不明瞭なものは除外している。

第117図　小原下遺跡主要遺構変遷図(S=1/1,000)

する時期の三万田式土器はSB01・09・19・28である。最後に、鳥井原式土器が出土した竪穴住居はSB01・09・19・25・31・44である。その他の竪穴住居は太郎迫式土器～鳥井原式土器が混在していたり、遺物が少ないため明確に時期の特定は困難であるが、概ね縄文時代後期後半の太郎迫式土器～鳥井原式土器の時期の遺構である。

竪穴住居の形態は長方形・隅丸長方形・隅丸方形・楕円形(円形)・不定形の形状が確認できた。長方形の竪穴住居は33軒、隅丸長方形・隅丸方形の竪穴住居は4軒、一般的に円形と分類される楕円形の竪穴住居は1軒、不定形の竪穴住居は1軒である。楕円形(円形)の竪穴住居はSB32のみで、太郎迫式土器が一括で出土した。それ以外の長方形・隅丸長方形・隅丸方形は太郎迫式土器・三万田式土器・鳥井原式土器が出土した。

【小原下遺跡における竪穴住居の形態分類と変遷概観】

円形(正確には楕円形)　… 太郎迫式土器のみ

方形・長方形(楕円状含)　… 西平式土器→太郎迫式土器→三万田式土器→鳥井原式土器

竪穴住居の規模は円形が長軸約4mである。方形・長方形（楕円状含）の規模は大きく2種類に別れて、長径約7m～7.5m×短径約4m～5mの長方形と、長径約4m～5m×短径約4m～5mの方形に近いものとがある。

竪穴住居の構造は残存する掘削深度はいずれも0.1～0.4mであるが、恐らく、遺構上半は後世に削平を受けている。また、地山と埋土の土質・土色が近似するため、柱穴や壁溝の検出が困難であった。そのため、柱穴の検出漏れもあると思われ、柱穴の配置の検証までは至らなかった。SB01は遺構の隅に焼土・焼石・炭化物が集中しており、地床炉の可能性がある。また、日常生活の痕跡として床面に甕が埋まっていた（埋甕）。埋甕内に何らかのものを貯蔵・貯水していた可能性がある。また、SX72が付属しており、SB01の出入口施設と考えられる。SB07は遺構の隅に焼土が集中しており、地床炉の可能性がある。その周辺には石皿・石斧・注口土器・高坏が出土した。SB08遺構は遺構内の周囲に柱穴が巡り、SB08竪穴住居に伴うものか、4間×3間の掘立柱建物の柱穴のいずれかの可能性がある。当該期の掘立柱建物の存在については金丸武司・林潤也氏によって指摘されており、有田・小田部遺跡（福岡市）、太郎迫遺跡（熊本市）、高野原遺跡・本野原遺跡（宮崎市）、藤平小田遺跡（種子島市）等で掘立柱建物が確認されている。SB16も同様に遺構の隅に焼土が集中しており、地床炉の可能性がある。また、SB16は突出部を持ち、出入口施設の可能性がある。SB29・31は柱穴が明瞭に確認できた。SB29は遺構の四隅と中央に2本の主柱穴であろう柱穴が出土した。SB31は中央に2本の主柱穴を検出した。SB46は遺構の隅に焼土が多量に出土しており、また、集石も検出した。集石は礫どうしに隙間がみられるが、本来、組まれて石組炉だった可能性がある。集石を除去後は、床が赤化して焼けていた。SB48は遺構の中央に集石を検出して、その礫は焼けていた。また、その付近から石皿が出土した。

表１　小原下遺跡の竪穴住居の属性

遺構名	形態				主な時期					炉	
	長方形	隅丸方形 隅丸長方形	楕円形（円形）	不定形	西平式	太郎迫式	三万田式	鳥井原式	縄文後期後半	地床炉	石組炉
SB01	○					○	○	○		○	
SB02	○					○					
SB03	○								○		
SB05	○								○		
SB06	○								○		
SB07	○					○				○	
SB08	○								○		
SB09	○						○	○			
SB10	○					○					
SB11	○					○					
SB16	○				○	○				○	
SB17	○								○		
SB19				○			○	○			
SB20		○							○		
SB22		○				○					
SB24		○							○		
SB25	○							○			
SB26	○								○		
SB27	○					○					
SB28	○						○				
SB29		○							○		
SB31	○							○			
SB32			○			○					
SB41	○								○		
SB42	○					○					
SB43	○								○		
SB44	○					○		○			
SB46	○								○		○
SB47	○					○					
SB48	○					○					○
SB49	○					○					
SB50	○								○		
SB53	○								○		
SB57	○								○		
SB70	○								○		
SB71	○								○		
SB76	○								○		
SB77	○								○		
SB78	○								○		

３　小原下遺跡出土の土器編年考察とその他の出土遺物について

縄文時代後期後半の遺構及び包含層からは土器・土製品の埋甕・深鉢・鉢・浅鉢や、舟形土器・異形土器・高坏・注口土器・土偶・土版・Ｘ字形土製品の特殊遺物が多く出土した。石器は石鏃・スクレーパー・石匙・Ｘ字形石器・石皿・台石・磨石・叩石・打製石斧・磨製石斧が出土した。

それでは、小原下遺跡から出土した土器の器種・形態・文様・精度などの属性分析を基に編年して（第118図参照）、各型式と集落の変化を古い方から比較検討する。

①　北久根山式土器・辛川式土器【小原下集落の定着前】

縄文時代後期の遺構から出土した最も古い遺物は後期中葉の北久根山式土器で、この頃から遺跡に人々が住みはじめた可能性がある。出土した北久根山式土器は深鉢・高坏の脚部・北久根山式土器か辛川式土器を転用して作られた土版である。

②　西平式土器【小原下集落の定着期】

西平式土器はSB16竪穴住居で出土して、この頃から小原下遺跡に定住し始めた可能性がある。西平式土器の形態は文様帯の幅が前型式のものと比べて狭くなり、口縁部の逆「く」の字状の断面が内傾に強く曲がり、頸部も「く」の字状に折れ方が強くなる。口縁

部形態は波状口縁のものと平坦口縁のものとがある。今回出土したものは鉢の頸部から胴部にかけての部位で、頸部に刺突列点文を巡らせて、数条の胴部の沈線間に縄文を施していた。

③　太郎迫式土器【小原下集落の形成期】

竪穴住居や周囲の遺構・包含層から爆発的に出現・増加するのが縄文時代後期後半の太郎迫式土器である。太郎迫式土器の段階で竪穴住居が急増することから、小原下遺跡の集落が形成される時期である。

太郎迫式土器の深鉢・鉢の形態は前型式の西平式土器と比べて文様帯の幅が狭くなり、口縁部の逆「く」の字状の断面が内傾に弱く曲がり、口縁部が直線的になる。頸部で逆「く」の字状の折れ方が弱まる。口縁部の形態は、波状口縁のものと平坦口縁のものとがある。また、リボン状口縁のものが出土する。

太郎迫式土器の鉢の口縁部の文様帯は古段階のものが基本的に2本沈線を巡らせており、その沈線間に縄文が施されている。太郎迫式新段階より、縄文が施されておらず、沈線とナデによる構成の文様帯が現れる。太郎迫式土器の新段階の頃には、口縁部文様帯の沈線が1本に減少するものも見られる。この１本のみの沈線と無文との組合せは、三万田式土器の頃に引き継がれる。

太郎迫式土器の鉢の胴部の文様帯は「X」字文を施し、数状の胴部の沈線間に縄文を施すものと、縄文を施さず、沈線と無文の構成のものもある。

当遺跡では太郎迫式古段階のものが多く、三万田式土器へ変遷する過程の新段階の遺物が少なかった。また、浅鉢も少ない。注目すべきことはこの頃より当遺跡において土偶が出現する。この詳細は次の節で述べる。

④　三万田式土器【小原下集落の成熟期】

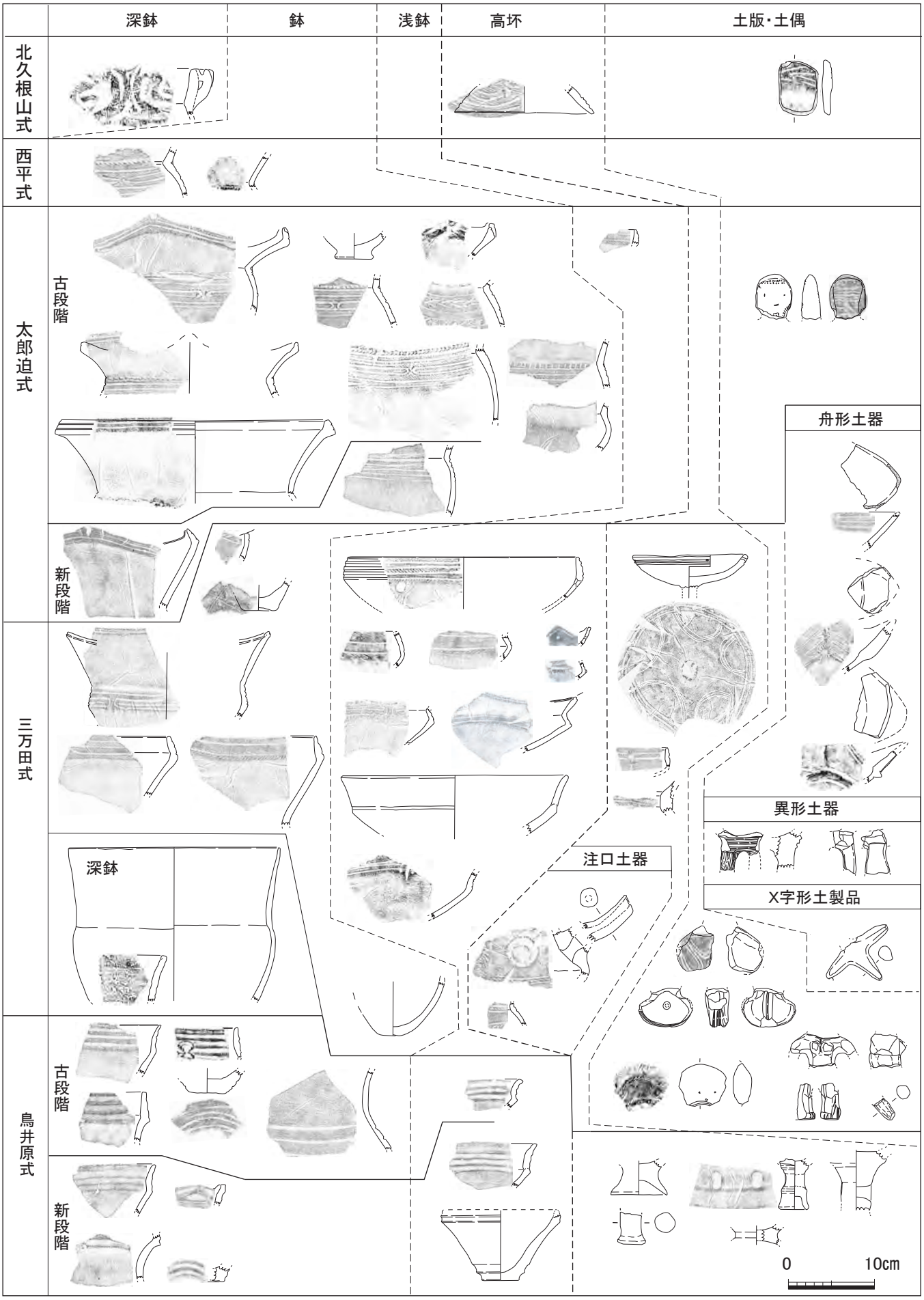
当遺跡では深鉢・鉢・浅鉢・高坏・土偶に加えて、舟形土器・注口土器・異形土器・X字形土製品が出現する。この器種の増加は西日本全体の傾向と一致し、かつ小原下居遺跡の集落の成熟を物語っていると言える。

三万田式土器の深鉢・鉢の形態は口縁部の「く」の字状断面がなくなり、緩やかに外反するものと、一方で直線的に間延びするものも増える。頸部の「く」の字状の断面が緩やかになる。また、この時期にもう１つの形態の土器が現れる。それは浅鉢の上に再び浅鉢を乗せた深鉢が増加するということである。口縁部の形態は波状口縁のものと平坦口縁のものがある。

三万田式土器の浅鉢の形態は一般的な浅鉢の器形と、鉢と浅鉢の中間的な要素を含みそうなやや器高が低く、胴部で膨らみをもち、頸部で外に反り返るものとの２種類に大別できる。

三万田式土器の鉢の口縁部の文様帯は2本巡る沈線と無文との組合わせのものと、１本のみ巡る沈線と無文との組合せものがある。また、古段階では細線文や細線羽状文が多様に用いられるが、鳥井原式土器へ変遷する過程の三万田式土器新段階では細線文や細線羽状文の文様を施さず、沈線のみのものも増える。

三万田式土器の胴部の文様帯は沈線を数条巡らせて、その沈線間に従来の縄文ではなく細線文を施している。この太郎迫式土器から三万田式土器に移る過程の縄文文様から細線文文様への変化は、技法的後退であり、細線文は伝統的に縄文文様を施す習慣に乗っ取っ



後期後半：西平式土器以降

第118図　小原下遺跡における縄文時代後期後半の土器編年表(S=1/6)

た「擬似縄文的な役割」を成している。また、三万田式土器には、細線文を施さないで沈線のみを巡らせているものもある。三万田式土器の頃は、装飾性に富む浅鉢の器形には、赤色顔料が塗膜しているものが多い。この塗膜は、太郎迫式土器の頃より見られ、三万田式土器でさらに増加する。

当遺跡では舟形土器が3点確認できており、高坏・土偶と同様に沈線や細線文を駆使して文様を装飾している。また、異形土器の脚部が2点確認できているが、南九州の市来式土器に比べるとシンプルである。

⑤鳥井原式土器【小原下集落の衰退・消滅期】

鳥井原式土器は器種が減少して、鉢と浅鉢や高坏が主体となる。この器種・遺物量の減少、遺構の減少とともに集落の縮小化に伴う衰退期と言える。この事は九州北半の状況とも一致しており、集落の衰退は九州北半の社会的影響もしくは環境的影響を受けている可能性もある。

鳥井原式土器の深鉢・鉢の形態は三万田式土器の器形を基調として口縁部と胴部に凹線文が巡るものと稜線のものとがある。特異なものでは、浅鉢の上に再び浅鉢を乗せて、さらに上に複合的に重ねていく深鉢が増加するということである。遺跡内から出土した土器は鉢と深鉢では鉢が圧倒的に多いものの、特定の用途に関しては深鉢の器種がある。それは当遺跡で出土した埋葬用の埋甕を用いた甕棺墓が3基の内、SK45・SK81の2基について大型の深鉢であった。また、SB01の竪穴住居内で出土した煮炊・貯水で用いたと思われる埋甕も大型の深鉢であった。この様に、埋甕や煮炊・貯水の甕は深鉢を用いている。

鳥井原式土器の浅鉢の形態は三万田式土器に類似する器形である。

鳥井原式土器古段階の口縁部の文様帯は凹線文を数条巡らせており、その条数に関しては少ないもので2本からあり、多いものだと幾条も巡らされている。凹点も施される。また、太郎迫式土器の波状口縁部外面の中央部には縦に刺突が施され、上記した数条の沈線が巡っている。新段階はこの古段階の凹線文が発達して、凹線文どうしが接することにより視覚的に稜をなして見える稜線文を巡らせている。

鳥井原式土器古段階の胴部の文様帯は、三万田式土器と同様の部分に凹線文が数条に渡り巡らされている。新段階は稜線文を巡らせている。

①～⑤石器

石器は石鏃・スクレーパー・石匙・X字形石器・石皿・台石・磨石・叩石・打製石斧・磨製石斧が出土した。

出土量は台石・磨石・叩石・打製石斧・磨製石斧と比較して石鏃・スクレーパー・石匙が少なかった。特に石鏃は縄文時代後期前半と比べて極端に少なく、石斧が増加している事から生業形態の変化が伺える。石皿・台石の出土量は少なく、出土状況は竪穴住居の屋内に持つ場合と2軒の間に1点持つ場合があり、恐らく集落・個別住居における貴重品であったと思われる。ただし、巨大な廃棄土坑(土器溜り)には欠損した石皿・台石が目立つことから、使用できなくなったものを廃棄したものであろう。

スクレーパー・石匙は安山岩製の製品が多いが、石鏃・剥片石器は黒曜石・安山岩製が多い。ただし、黒曜石製の石鏃の産地は腰岳産(佐賀県産)が大半を占めるが、その他、僅かに姫島産(大分県)が出土している。このことは西北九州・西九州に位置する当遺跡において、東九州の姫島産黒曜石が出土するということは広域に物が流通していたのか、もし

くは東九州との交流があった可能性がある。

⑥その他の時期の遺物

小原下遺跡で最も古い遺物は包含層より縄文時代早期の押型文土器の破片が１点のみ出土している。時期は東九州編年で言う下菅生Ｂ式土器でそれに併行する深鉢の弘法原式土器の楕円押型文土器と考えられる。

小原下集落が消滅後の遺物としては包含層より縄文時代晩期～弥生時代早期の突帯文土器や組織痕土器が出土している。

弥生時代の遺物は包含層より前期突帯文土器の板付式土器や中期の須玖式土器の丹塗土器が僅か出土している。

古墳時代の遺物は包含層より須恵器の蓋が僅かに出土している。

鎌倉～戦国時代の遺物は包含層より龍泉窯系の碗や16世紀後半の漳州窯系の磁器碗が出土している。この地は、戦国大名の龍造寺隆信と政家親子の勢力範囲内で、肥前南端の地である。近辺には大野城があり、今回、出土した遺物も何らかの関係がある可能性もある。

４　小原下遺跡出土の土偶編年考察

小原下遺跡から出土した土偶は８点、今回掲載していない過去表採された人形土偶の1点を加えると９点である。また、土版は１点で、土偶と土版とを合せると総計10点である。

長崎県内の縄文時代中期末～後期前葉の土偶出土遺跡は宮下貝塚（五島市富江町）・吉田遺跡（対馬市）で動物（イノシシ）形土偶が出土している。縄文時代後期前葉の土偶出土遺跡は西常盤貝塚（諫早市）で板状の人面土偶が出土している。後期後半の土偶出土遺跡は当遺跡の小原下遺跡や大野原遺跡（島原市有明町）・石原遺跡（雲仙市国見町）・出津遺跡（長崎市外海町）で人形土偶が出土している。縄文時代晩期と思われるものでは原山支石墓群（南島原市北有馬町）で動物（魚）形土偶の土偶が出土している。これらの各遺跡から出土した土偶は当遺跡を除いて1～2点で、当遺跡の土偶の出土量は最も多い。その上、今回の調査は小原遺跡の縄文集落のごく一部の調査であるため、さらに多くの土偶が眠っていると推察できる。

さて、小原下遺跡から出土した土偶を形状と文様属性により４型式に編年した。

①小原下型土偶１式

小原下遺跡で土偶に先行して、最も古いものが縄文時代後期中葉の西平式土器併行の土版である。この遺物は北久根山式土器か辛川式土器の土器を転用したものである。

②小原下型土偶２式

当遺跡において土偶が出現するのが太郎迫式土器に併行する分銅形土偶である。この土偶は太郎迫式土器の特徴である擬似縄文と沈線文を用いた土偶で、この分銅形土偶は次の三万田式土器を用いる時代まで受け継がれる。

③小原下型土偶３式

当遺跡において太郎迫式土器・三万田式土器に併行する分銅形土偶は2点である。太郎迫式土器・三万田式土器の属性である沈線文を施し、小原下型土偶２式としたものより、丁寧で精巧な作りである。図版の３は表面に臍（へそ）が、背面に尻があり、縁辺部が丸味が出て、面的から立体的な丁寧な作りへと変化が見られる。また、図版の４は下位に穿孔があり妊婦の産道を表現している可能性がありる。この様に表現方法と立体的な作りが次の段階で登場する人形土偶へ変遷過程にあるものである。

④小原下型土偶４式

当遺跡において最終段階の土偶が人形土偶で、本調査で４点、今回掲載していないが過去表採されたものが1点ある。この表採された土偶は図版の９と酷似する。これらの人形土偶は小原下型土偶３式までに比べて精巧な作りで、乳房や腹部の膨らみが見られる事から、女性でかつ妊婦像である。いずれの土偶も人形であったものをバラバラに打ち欠いてパーツで出土した。また、文様に三万田式土器の文様を装飾することから三万田式土器に併行するとともに鳥井原式土器の頃まで残る可能性がある。

以上の様に、小原下遺跡においては「小原下型土偶１式（土版）→小原下型土偶２式（分銅形土偶）→小原下型土偶３式（分銅形土偶）→小原下型土偶４式（人形土偶）」へと変遷すると考えられる。

第119図　小原下遺跡における土偶編年表(S=1/2)

【参考文献】

池田朋生　2008　「住居跡からみた定住化の様相」『九州の縄文住居Ⅱ』第18回九州縄文研究会熊本大会　九州縄文研究会

大坪芳典　1999　「筑後川流域の先史文化―川下遺跡の資料―」『別府大学附属博物館だより』No,42　別府大学博物館だより

大坪芳典　1999　「ワラミノ遺跡の資料―太郎迫式土器小考―」『別府大学附属博物館だより』No,43　別府大学博物館だより

大坪芳典　2000　「縄文後期後半の土器について」『蔵上遺跡Ⅲ』　鳥栖市教育委員会

大坪芳典　2000　「筑後川流域の縄文後期後半土器」『Fragments』第２号　さくら刊行会

大坪芳典　2001　「南に中岳式土器あり」『Frontier』第3号　海部考古学会

大坪芳典　2005　「三ヶ所神社裏遺跡整理ノート」『九州縄文時代早期研究ノート』第3号　九州縄文早期研究会

賀川光夫・古田正隆　1970　「縄文後期磨消縄文Ⅲ式の文化」『古代学研究』No.57

金丸武司　2008　「宮崎県の特徴（本野原遺跡）」『九州の縄文住居Ⅱ』第18回九州縄文研究会熊本大会　九州縄文研究会

小池史哲　2002　「北部九州の縄文後晩期集落‐住居跡を中心に‐」『考古学ジャーナル』No.485　ニュー・サイエンス社

小池史哲　2008　「北部九州の縄文時代住居跡について」『九州の縄文住居Ⅱ』第18回九州縄文研究会熊本大会　九州縄文研究会

島津義昭　2002　「西日本の集落研究について」『考古学ジャーナル』No.485　ニュー・サイエンス社

正林護　1984　『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅶ』（小原下遺跡）　長崎県教育委員会

高橋信武　2007　「九州における縄紋時代集落の様相」『日韓新石器時代の住居と集落』　第7回日韓新石器時代研究会発表資料集　九州縄文研究会・韓国新石器学会・九州国立博物館

富田紘一　1977　「三万田式土器の文様」『九州原始文様ー縄文土器にその原点を探る』　佐賀県立博物館

富田紘一　1977　『鳥井原遺跡発掘調査報告書』　熊本市教育委員会

富田紘一　1981　「三万田式土器」『縄文文化の研究』第4巻　雄山閣

富田紘一　1983　「太郎迫遺跡の縄文土器(1)」『肥後考古』第4号　肥後考古学会

富田紘一　1986　「西山南麓」『戸坂遺跡発掘調査報告書』　熊本市教育委員会

富田紘一　1987　「太郎迫遺跡の縄文土器(2)」『肥後考古』第6号　肥後考古学会

中越利夫　1998　「石器の交流（後・晩期、中四国を中心に）」『本州西部地域における文化交流の諸問題』第9回中四国縄文研究会（発表資料）　中四国縄文研究会

林潤也　2002　「北久根山式土器をめぐる諸問題」『犬養徹夫先生古稀記念論集　四国とその周辺の考古学』　犬養徹夫先生古稀記念論文集刊行会

林潤也　2007　「九州における縄文時代竪穴住居の変遷」『日韓新石器時代の住居と集落』　第7回日韓新石器時代研究会発表資料集　九州縄文研究会・韓国新石器学会・九州国立博物館

古田正隆　1974　『重要遺跡の発見から破壊までの記録‐縄文晩期原山埋葬遺跡‐』　百人委員会

古田正隆　1974　『筏遺跡‐縄文後・晩期の埋葬遺跡‐』　百人委員会

古田正隆　1976　『続・筏遺跡‐主として第6次調査の新資料を中心に‐』　百人委員会

前川威洋　1966　「九州後期縄文土器の諸問題」（修士論文）

前川威洋　1968　「九州後期縄文文化の諸問題」（1966修士論文）『九州縄文文化の研究』　前川威洋遺稿集刊行会

水ノ江和同　1992　「西平式土器に関する諸問題―福岡県築上郡築城町所在，松丸遺跡（D地区）出土縄文土器の位置付け―」『九州考古学』第67号　九州考古学会

水ノ江和同　1997　「北部九州の縄紋後・晩期土器―三万田式から突帯文時の直前まで―」『縄文時代』8　縄文時代文化研究会

宮内克己　1981　「三万田式土器の研究」『古文化談叢』第8集　古文化研究会

宮内克己　1985　「東貝塚の縄文式土器」『研究紀要』第2集　大分県立宇佐風土記の丘歴史民族資料館

宮内克己　1997　「九州の土偶」『西日本をとりまく土偶』発表要旨集　土偶シンポジウム6奈良大会実行委員会

綿貫俊一　1991　「大野川流域を中心とした西平式系土器の変遷」『川南原遺跡群』　大分県教育委員会

長崎県教育委員会　1997　『原始・古代の長崎県』資料編Ⅱ

写　真　図　版

小原下遺跡出土の土偶と土版（前面）

小原下遺跡全景と南側を望む

小原下遺跡全景と南東の有明海を望む

小原下遺跡全景（図上は北東）

小原下遺跡出土の土偶と土版（背面）

写真図版３

01. 調査前

02. グリッド設定

03. 包含層遺物

04. 包含層遺物

05. 包含層遺物

06. 包含層遺物

07. 包含層遺物

08. 包含層遺物

09. 包含層遺物

10. 包含層遺物

11. 埋甕(SX01内)

12. 埋甕(SX01内)

13. SK37埋甕

14. SK37埋甕

15. SK45埋甕

16. SK45埋甕完掘

17. SK47埋甕断面

18. SK79埋甕

19. SK81埋甕

20. 遺構検出

21. 遺構検出

22. 遺構検出

23. SB01検出

24. SB01土層

25. SB01掘削

26. SB01掘削

27. SB01掘削

28. SB01完掘

29. SB01遺物

30. SB05

31. SB06

32. SB07完掘

33. SB07遺物

34. SB07遺物

35. SB07遺物

36. SB07遺物

37. SB08

38. SB09

39. SB10・11

40. SB10・11

41. SB16完掘

42. SB25遺物

43. SB28掘削

44. SB28掘削

45. SB28完掘

46. SB28遺物

47. SB28遺物

48. SB28遺物

49. SB28遺物

50. SB31遺物

51. SB32遺物

52. SB32遺物

53. SB43遺物

54. SB43遺物

55. SB46

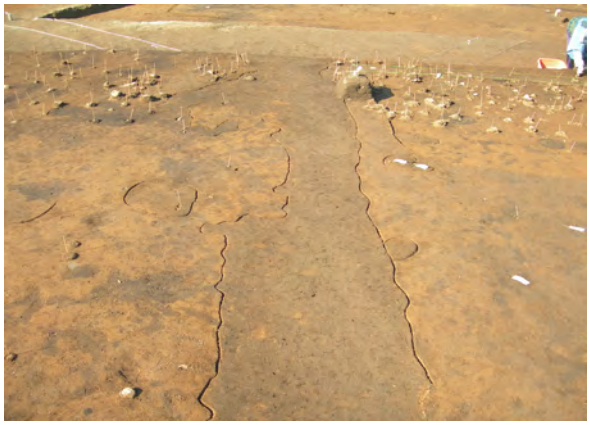
56. SB46集石

57. SB46

58. SB50検出

59. SB50完掘

60. SB50遺物



61. SD01検出

62. SD01完掘

63. SK12

64. SK14

65. SK21

66. SK21遺物

67. SK30

68. SK35

69. SK58

70. SK63

71. SX40検出

72. SX40断面

73. SX75

74. SX75遺物

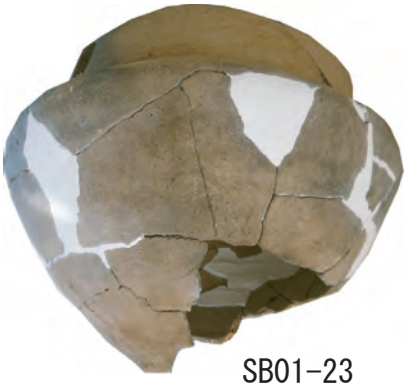
75. SX75遺物

76. SB01から調査区南を望む

77. 土器溜り遠景

78. 土器溜り

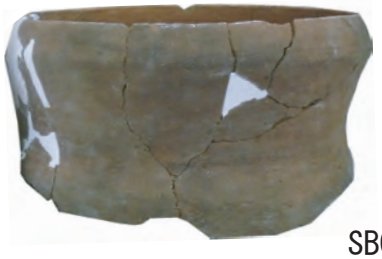
79. 土器溜り



SB01-23

SB01-24

SB01-25

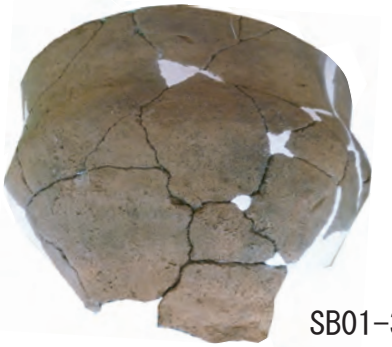


SB01-26

SB01-27

SB01-29

SB01-30



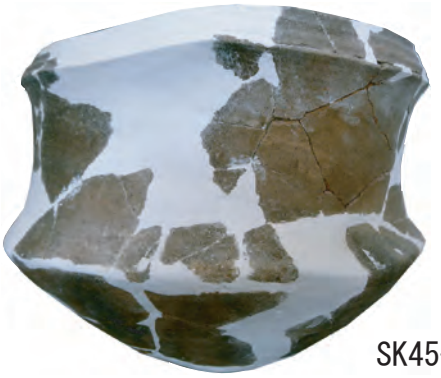
SB01-31

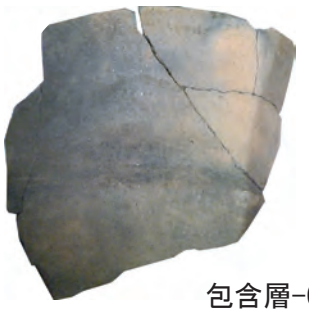
SB01-33

SB01-34

SB28-18

SB01-35


SK45-1


包含層-69

SK80-1

SK81-1

報 告 書 抄 録

ふりがな	おばるしもいせき
書名	小原下遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	島原市文化財調査報告書
シリーズ番号	第12集
編著者名	宇土靖之　大坪芳典
編集機関	島原市文化財保護協会
所在地	〒859－1492　長崎県島原市有明町大三東戌1327番地　TEL 0957－68－5473
発行年月	西暦2008年３月

ふりがな 収蔵遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おばるしもいせき 小原下遺跡	ながさきけんしまばらし 長崎県島原市 ありあけまちおおみさきおつ 有明町大三東乙 ばんち 842･846番地	-	-	32° 50′ 14″	130° 20′ 38″	20060901～ 20070302	2,900㎡ （調査対象面積）	民間工場に伴う緊急発掘調査

収蔵遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
おばるしもいせき 小原下遺跡	集落	縄文	竪穴住居 溝 土坑 焼土土坑 埋甕	土器　　石器 土製品（土偶） 石製品　　土製品	縄文時代後期後半の集落跡

島原市文化財調査報告書　第12集

小原下遺跡

発行月　平成20(2008)年３月

編集・発行　島原市文化財保護協会
島原市有明町大三東戌1327
TEL　0957(68)5473

印刷　㈱昭和堂印刷